

長崎県文化財調査報告書第83集

TON ZAKI
殿 崎 遺 跡

1986

長崎県教育委員会

殿崎遺跡



小倉町位置図

序 文

ここに報告いたします「殿崎遺跡」は、長崎県北松浦郡小值賀町にあり、「小値賀空港」建設に伴って昭和58・59年に緊急発掘調査を実施したものです。

遺跡は縄文時代中期～後期にかけて営まれた生活址であり、僅か約1000m²の調査区内より土器・石器・装飾品など約2万点にも及ぶ資料が出土しました。

それらの遺物を詳細に観察しますと、東支那海に面するという遺跡の立地条件のためか、漁網鍼、鉛先、あるいは貝類採集道具など、海人の伝統と生活を彷彿とさせる内容である事がよく判ります。自然環境が即、往時の生活ぶりを現わしていると申しても過言ではないでしよう。

本書が五島列島の歴史を語る一資料として、広く一般の用に供せられれば望外の幸せであります。

昭和61年3月31日

長崎県教育長 伊藤昭六

例　　言

一、本書は、昭和57・58年度にかけて実施した小
值賀空港建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報
告書である。

二、調査は、長崎県空港課が事業主体となり、長
崎県文化課がこれを担当した。

三、調査は、試掘調査（以下本文中、一次調査と
する）を長崎県文化課文化財保護主事高野晋司
(現、主任文化財保護主事)・副島和明が従事し、
本調査（以下二次調査とする）を高野、文化財
調査員福田一志・草野誠司が従事した。

四、本書は分担執筆し、各項の執筆者は本文目次
の項に記した。

五、本書の編集責任は、福田にある。

本文目次

頁 執筆者

I 序説

(一) 調査に至るまで.....	1 高野晋司
(二) 調査経過.....	5 "
(三) 遺跡の地理的歴史的環境.....	7 "
(四) 周辺遺跡概観.....	11 "

II 遺跡の調査

(一) 第一次調査

1. 土層.....	18 高野晋司
2. 遺物の出土状況.....	18 "
3. 一次調査出土土器.....	21 "
4. 一次調査出土石器.....	35

副島和明・草野誠司・福田一志

(二) 第二次調査

1. 土層.....	61 高野晋司
2. 遺物出土状況.....	61 福田一志
3. 第二次調査出土土器.....	65 高野晋司
4. 第二次調査出土石器.....	92

副島和明・草野誠司・福田一志

5. 造構.....	114 福田一志
------------	----------

III 総括

(一) 距崎遺跡出土の土器について.....	115 高野晋司
(二) 距崎遺跡出土の石器について.....	122 福田一志

挿図目次

Fig. 1 空港予定位図	2
Fig. 2 第1次調査区配置図	3
Fig. 3 T P 2 遺物出土状況	5
Fig. 4 T P 4 遺物出土状況	6
Fig. 5 T P 19 遺物出土状況	7
Fig. 6 第2次調査位置図	8
Fig. 7 調査区配置図	9
Fig. 8 小値賀町地形分類図	10
Fig. 9 町内遺跡分布図	13
Fig. 10 宇久松原出土壺	15
Fig. 11 水の下古墳出土土器	15
Fig. 12 球頭太刀実測図	16
Fig. 13 T P 2・3・4 壁面図 (1/40)	19
Fig. 14 T P 9・10・11・13・14 壁面図 (1/40)	19
Fig. 15 T P 12 遺物出土状況	20
Fig. 16 一次調査出土土器実測図 (1/3)	22
Fig. 17 " (")	23
Fig. 18 柄状把手土器 (1/2)	24
Fig. 19 一次調査出土土器実測図 (1/3)	25
Fig. 20 " (")	26
Fig. 21 W字文貼付口縁 (1/2)	27
Fig. 22 一次調査出土土器実測図 (1/3)	27
Fig. 23 " (")	28
Fig. 24 " (")	29
Fig. 25 " (")	30
Fig. 26 " (")	31
Fig. 27 一次調査出土石器実測図 (2/3)	35
Fig. 28 " (")	36
Fig. 29 " (")	37
Fig. 30 " (")	38
Fig. 31 " (")	39

Fig. 32	"	(1/3)	40
Fig. 33	"	(〃)	41
Fig. 34	"	(〃)	42
Fig. 35 A—2 · B—2 · D—2 区東壁		A—2 · 3 区北壁圖	62
Fig. 36 P—2 · 3 区, K—2 · 3 区北壁圖		(1/40)	62
Fig. 37 第二次遺物出土状況図		63	
Fig. 38 二次調査出土土器実測図 (1/3)		66	
Fig. 39	"	(〃)	67
Fig. 40	"	(〃)	68
Fig. 41	"	(〃)	69
Fig. 42	"	(〃)	70
Fig. 43	"	(〃)	71
Fig. 44	"	(〃)	72
Fig. 45 各種把手 (1/2)		-	73
Fig. 46	"	(〃)	74
Fig. 47	"	(〃)	75
Fig. 48	"	(〃)	76
Fig. 49	"	(〃)	78
Fig. 50 越文晩期土器出土分布図		78	
Fig. 51	"	(〃)	79
Fig. 52	"	(〃)	80
Fig. 53	"	(〃)	81
Fig. 54	"	(〃)	83
Fig. 55	"	(〃)	83
Fig. 56	"	(〃)	84
Fig. 57 秤生上器出土分布図		84	
Fig. 58 円形土版実測図 (2/3)		85	
Fig. 59 二次調査出土石器実測図 (2/3)		92	
Fig. 60	"	(〃)	93
Fig. 61	"	(〃)	94
Fig. 62	"	(〃)	95
Fig. 63	"	(〃)	96
Fig. 64	"	(〃)	97
Fig. 65	"	(〃)	98

Fig. 66	二次調査出土石器実測図(〃)	99
Fig. 67	〃	(〃) 100
Fig. 68	〃	(〃) 100
Fig. 69	〃	(1/3) 102
Fig. 70	〃	(〃) 103
Fig. 71	〃	(〃) 104
Fig. 72	〃	(〃) 106
Fig. 73	〃	(〃) 107
Fig. 74	〃	(〃) 108
Fig. 75	〃	(〃) 109
Fig. 76	〃	(〃) 110
Fig. 77	〃	(〃) 111
Fig. 78	遺構実測図(1/20)	114
Fig. 79	並木・阿高式土器分布図	116
Fig. 80	南福寺・出水式土器分布図	116
Fig. 81	籠ヶ崎・北久根山式土器分布図	117
Fig. 82	市来式土器分布図	117

表 目 次

Tab. 1	遺跡地名表	12
Tab. 2	土器觀察表	32
Tab. 3	〃	33
Tab. 4	〃	34
Tab. 5	石斧計測表	40
Tab. 6	石器計測表	42
Tab. 7	土器觀察表	86
Tab. 8	〃	87
Tab. 9	〃	88
Tab. 10	〃	89
Tab. 11	〃	90
Tab. 12	〃	91
Tab. 13	石斧計測表	107
Tab. 14	石器計測表	114

Tab. 15	"	115
Tab. 16	繩文中・後期土器出土地名表	118
Tab. 17	一次・二次調査出土石器数量表	122

図 版 目 次

- PL. 1 遺跡遠景・遺跡近景
- PL. 2 一次調査調査風景
- PL. 3 遺物出土状況 (TP 1)
- PL. 4 " (")
- PL. 5 "
- PL. 6 一次調査出土上器① (1/2)
- PL. 7 " ② (")
- PL. 8 " ③ (")
- PL. 9 " ④ (")
- PL. 10 " ⑤ (")
- PL. 11 " ⑥ (")
- PL. 12 " ⑦ (")
- PL. 13 一次調査出土石器 (1/1)
- PL. 14 " (")
- PL. 15 " (")
- PL. 16 " (")
- PL. 17 " (1/3)
- PL. 18 " (")
- PL. 19 二次調査風景
- PL. 20 土層写真
- PL. 21 "
- PL. 22 遺物出土状況
- PL. 23 "
- PL. 24 "
- PL. 25 "
- PL. 26 二次調査出土土器① (1/2)
- PL. 27 " ② (")
- PL. 28 " ③ (")

- PL. 29 二次調査出土土器 ④ (1/2)
PL. 30 " ⑤ (")
PL. 31 " ⑥ (")
PL. 32 " ⑦ (")
PL. 33 " ⑧ (")
PL. 34 " ⑨ (")
PL. 35 " ⑩ (")
PL. 36 " ⑪ (")
PL. 37 " ⑫ (")
PL. 38 二次調査出土石器 (1/1)
PL. 39 " (")
PL. 40 " (")
PL. 41 " (")
PL. 42 " (")
PL. 43 " (")
PL. 44 " (")
PL. 45 " (")
PL. 46 " (")
PL. 47 " (1/3)
PL. 48 " (")
PL. 49 " (")
PL. 50 " (")
PL. 51 " (")
PL. 52 円礪出土状況(上)・角礪出土状況(下)
PL. 53 調査完了全景 (上・東側より、下・西側より)
PL. 53 調査に参加した人達

I 序 説

一 調査に至るまで

短時間で目的地間を直結し得る飛行機は、今や日常生活の中で必要不可欠な存在となっているが、交通手段を専らフェリーのみに頼っている離島在住の人達にとっては単に時間の短縮のみならず、経済効果の波及、あるいは緊急時の場合などに、より多くの期待を持つのは当然である。

九州本島西方海上にうかび、古くから中国大陆や朝鲜半島との交流の接点に位置する五島列島は、南側から福江島、久賀島、奈留島、若松島、中通島、小値賀島、宇久島と実際には七島から成るが、これらの内最も南側の福江島と中程にある中通島にはすでに空港が完成し、住民の便に供して成果をあげているが、北側に在る小値賀島と宇久島は未だフェリーのみによる往来を余儀なくされており、空港の建設はいわば住民の悲願ともなっていた。

このような状況の中で、空港建設の必要性が強く呼ばれるところとなり、その結果小値賀島か宇久島のどちらかに建設が認められることとなった。

空港適地には小値賀島、宇久島内にそれぞれ1ヶ所づつの候補地が示されたが自然条件や環境問題等様々な条件を検討した結果、昭和56年8月最終的に小値賀町殿崎地区が適地として決定されることとなった。工事は昭和57年度着工し昭和60年度に供用開始という工程であった。

(Fig.1)

一方当該地区には以前より殿崎遺跡（長崎県8-64）が周知されており、加えて空港予定区域が広範囲にわたる事から新たな埋蔵文化財包蔵地の可能性も考えられた。この為同地域内の文化財の有無の確認が急務となり、昭和56年10月、文化課は空港課からの依頼を受けてまず当該地の分布調査を実施することとした。

現地踏査は空港予定地及びその周辺約30haを対象として行い、地表面観察の結果10ヶ所、面積にして約2.8haにわたって遺物が散布しているのが確認され、その旨公文による回答を行った。

これを受けて空港課は急ぎ計画図の手直しの検討を行ったが、空港にとっての最重要条件である、午間を通しての風向きが滑走路の方向を決定するとの理由で基本的な設計変更是不可能であるが、但しそ他の附属施設等の位置については、なお若干の再考の余地があるとの回答を得た。同時にその為には空港予定地内の遺跡について、急ぎその内容を詳細に知る必要があるとの要望がなされることとなった。

如上のような経過があり、文化課も遺跡保護協議の為の基礎資料を得る必要が生じ、各遺物散布地について、その範囲、内容を知るべく翌57年3月範囲踏査調査を実施することとした。

以下これを第1次調査と呼ぶ。

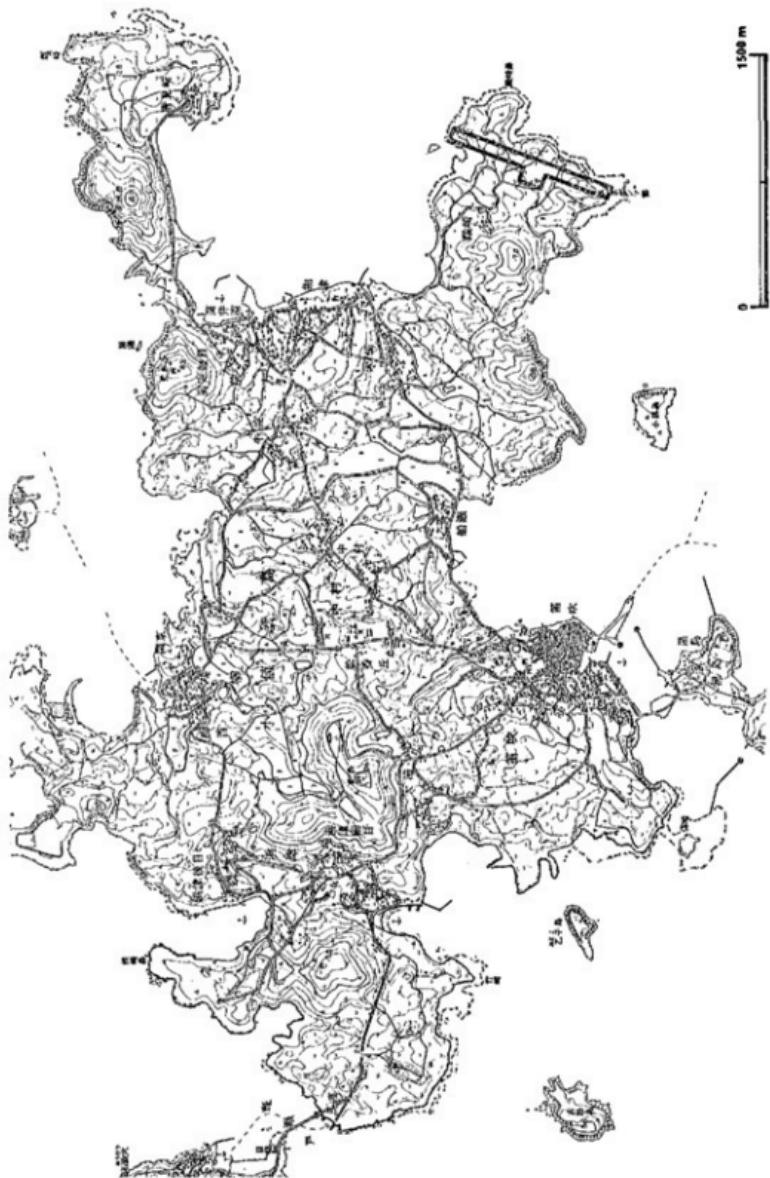


Fig. 1 空港予定位置図

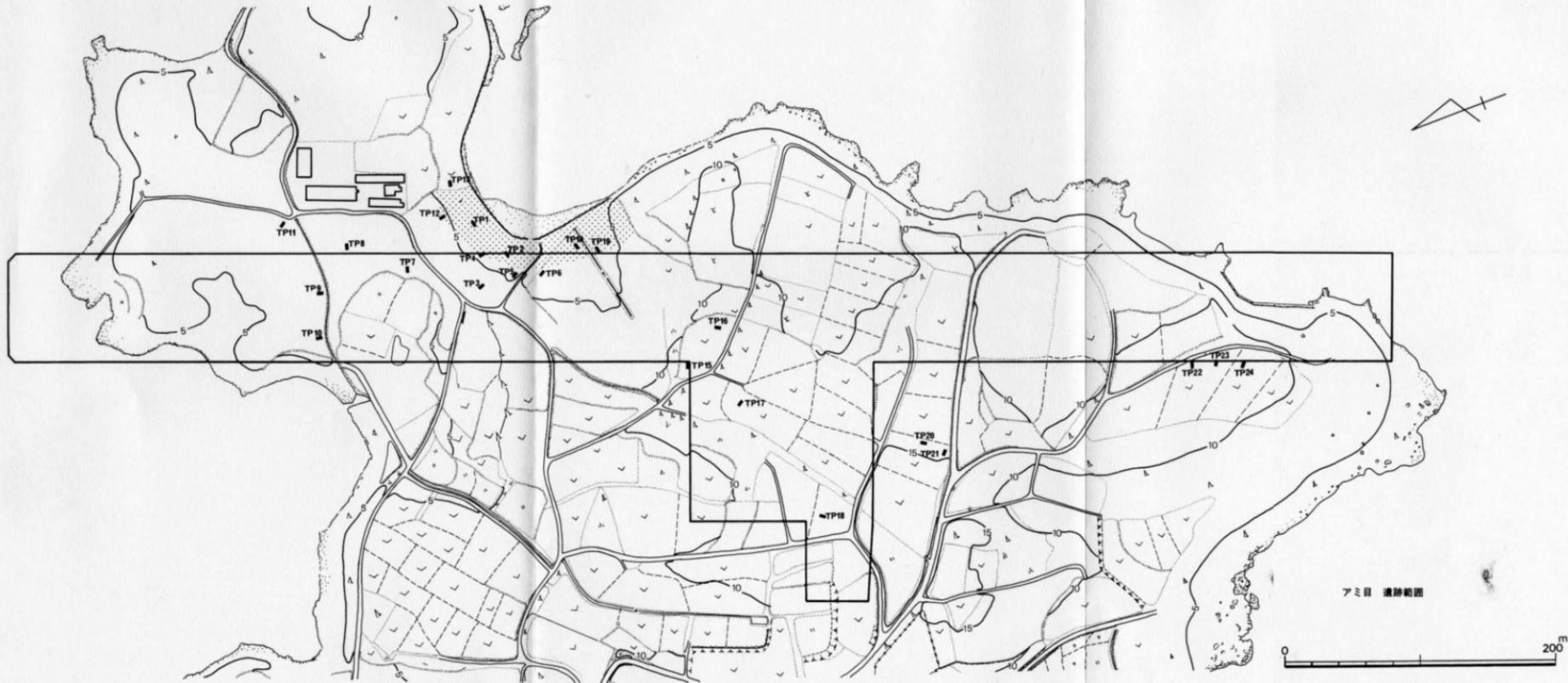


Fig. 2 第一次調査区配置図

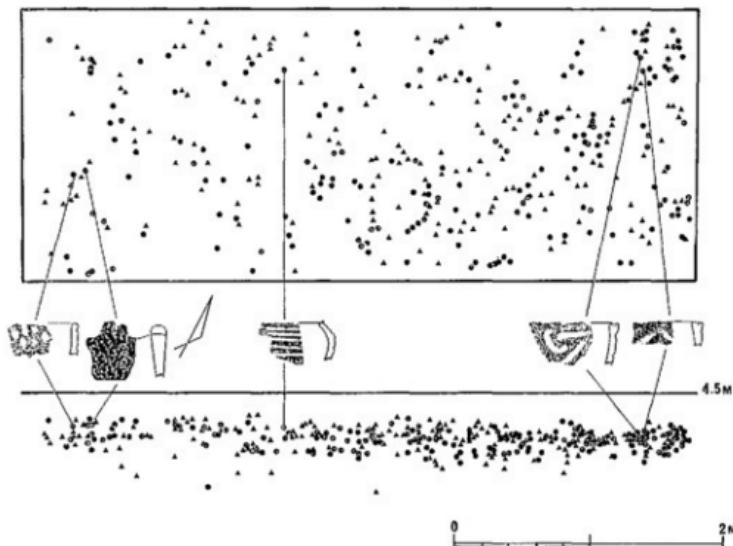


Fig. 3 TP 2 遺物出土状況

先きに空港課に提出した10ヶ所、2.8haの遺物散布地の位置は、その後の空港設計図との詳細な照合の結果、4ヶ所、約1.9haに減ずる事が判った為、第1次調査はこの4ヶ所について24ヶ所のトレンチを入れて精査する事とした。

その結果、6ヶ所に於いて良好な遺物包含層が認められた。

遺物を多く含む地域は、標高4～5mのほぼ平坦地に限られ、その面積は約4200m²程にも上るものと思われたが、この内空港敷地内にかかる部分は約1000m²であった。なおこの区域は從来から呼称されていた「殿崎遺跡」の場所と一致しており、結果的に空港工事区域に含まれる遺跡は殿崎遺跡のみになった訳である。

二 調査経過

第一次調査（昭和57年4月7日～5月13日）

前述した如く、第一次調査は昭和57年4月から実質30日間にわたって行った。調査面積は24トレンチ244m²である。

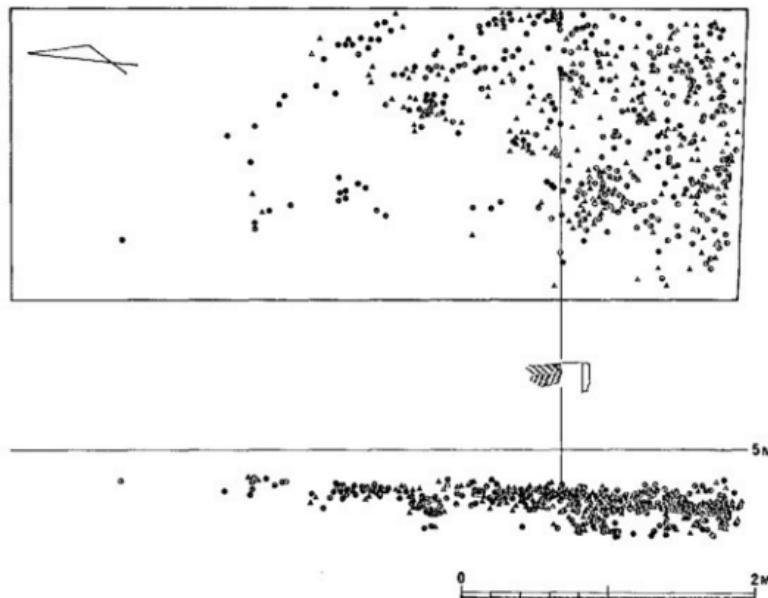


Fig. 4 TP 4 遺物出土状況

調査した地点は空港予定区域内に在ってそれぞれ若干の遺物を表面採取し得る区域であったが、精査の結果、TP 1, 2, 4, 12, 14, 19の6トレンチで良好な遺物包含層を確認した他は、何れも土層の堆積状況が悪く遺物、遺構共に見い出す事ができなかった。(Fig. 2)

遺物の出土状況はTP 1で5,000点以上、TP 2 (Fig. 3)、TP 4 (Fig. 4) でもそれぞれ数百点の土器・石器が出土しその附近が遺跡の中心である事が判る一方、TP 19 (Fig. 5) でもなお若干の遺物が出土するなど、遺跡の規模は思ったより広く、最終的に約4,200m²程度になる事が予想された。

出土遺物は縄文中期末～後期中頃に及ぶ上器類を中心として、多数の石錘、礫器等海洋的な遺跡の性格をよくあらわしている。その内容等については後述する。

第二次調査

前年度の調査によって確認した鍛冶遺跡の内空港建設予定地にかかる部分についてのみ全面に調査を行った。調査面積は結果的に975m²であった。(Fig. 6)

調査方法は調査対象区域を5×5mの方眼にくみ、遺跡の中心部と思われた北側より漸次掘

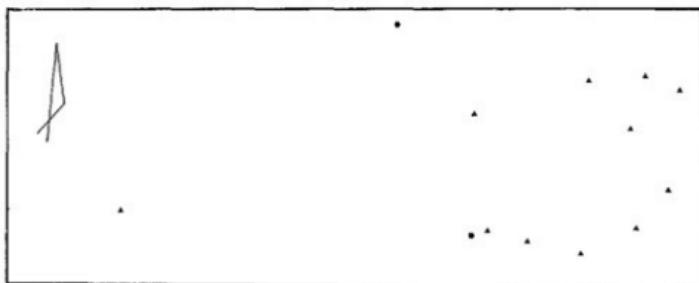


Fig. 5 TP 19 遺物出土状況

り進めた。(Fig.7) 又出土遺物はドットマップによって記録を行った。この成果については後述するが遺物の傾向としては、第一次調査TP 1が細文後期を中心とするのに比して、今回調査区では中期中頃～後期初の遺物が主であり、それに晩期と弥生土器も若干出土するなど遺跡の時期巾がかなり認められる結果となった。

三 遺跡の地理的歴史的環境

長崎港から約100km、九州西方海上に北東から南西にかけてほぼ一列に帯状に連なる列島がある。7つの島與と多くの属島から成るこの一連の島々が、五島列島である。その数は127島とされ、帶の長さは90kmに及ぶ。当然ながら海岸線は長く、リアス式の沈降海岸は至るところに景勝地を持つ。

五島の名の起りは、從来宇久・中通・若松・奈留・福江の五島を指すものであるらしいが、現在では中通・若松・奈留・久賀そして福江島の南側五島を指すことが多い。行政的にもこの五島は南松浦郡に属し、宇久・小値賀は北松浦郡に属する。

小値賀島は東経129°3分北緯33°12分の交点を中心とし、四隅を海に臨む。



Fig. 6 第2次調査位置図

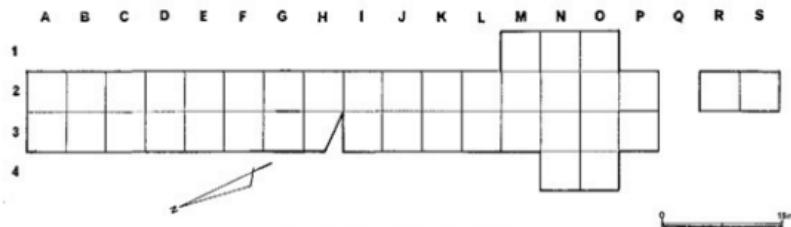


Fig. 7 調査区配置図

小値賀木島と16の属島から成る小値賀町は、26平方キロメートルの面積を有し、人口は約5,200人、業は漁業と農業が相半ばする。

本島全体の地形は極めて低平で地質的には「小値賀火山群」と呼ばれる流動性の溶岩台地上にあり、山頂高度は低く、最高所は島中央部木城岳で111mを計るにすぎない。一方木島東側に位置する野崎島は本島とは対照的に急峻な山嶺が連なり居住空間が限定される。現在では野生鹿が繁殖し300~500頭も棲息するらしい。(Fig.8)

五島列島は、古くは古事記国生み神話の中に「知荷島」としてあらわれるのを初例とする。次いで、肥前風土記に「值嘉の嶋」としての記載があり、名の由来と産物が詳しく述べられている。肥前風土記は、志式島（今の平戸島南部）より西方海上を望見した際の各島のあり様を叙述しているらしいが、その中には大近、小近という二つの島の名が登場する。位置的な関係からみると宇久・小値賀島が小近であり、大近とは中通り以南の各島を指しているものと考えられる。

註1 有川町「有川町郷土誌」1972

註2 小値賀教育委員会「小値賀町郷土誌」1978



遠跡より野崎島を望む

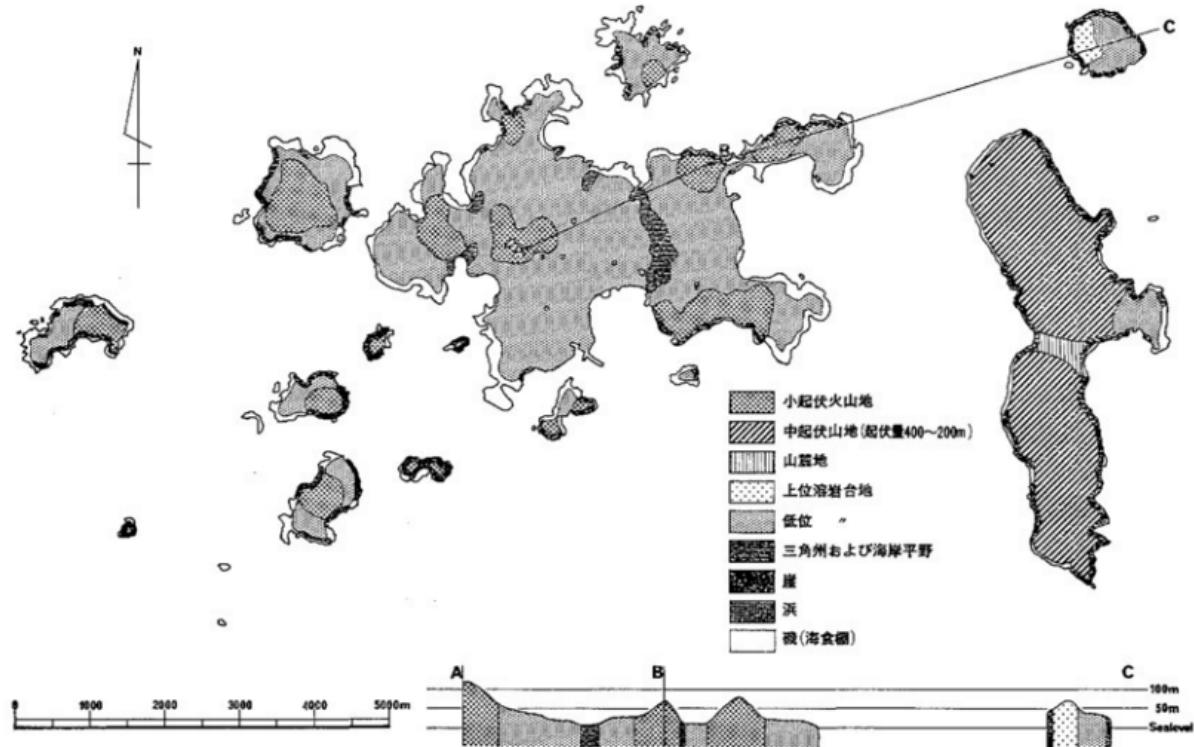


Fig. 8 小倉町地形分類図 (土地分類基本調査1982より転載)

四 周辺遺跡概観

現在小値賀町には45ヶ所程の遺跡が周知されている。(Fig.9)

その時期的な内訳は、旧石器時代3、縄文時代16、弥生時代18、古墳時代11、古代1、中世14、近世2ヶ所である。(Tab. 1) 総数が表と合わないのは複合遺跡が多い為である。

これらの内主な遺跡を概観してみたい。

旧石器時代の遺物としては11の殿崎周辺、40の玉石鼻等でナイフ型石器を発見しているが、点数は極めて少ない。只、小値賀島周辺の水深をみると、半径15km以内でも100mを越す部分は少なく、40m程の海退で宇久・小値賀を始め五島列島は全て陸続きとなる。往時の気候を考えると、旧石器時代の遺物の多くは現海面下に多数残存しているものと推定される。

島の面積の割には縄文時代の遺跡の数は多く、しかも早期から晩期まで一応連続する。早期の資料としては30の宮の下、37日崎、38ハモキ遺跡が知られる。30の宮の下遺跡は北面する低平台地上に位置するが、多量の石器と共に縄文土器が採集されている。又、鶴上史家近藤政英氏の収集資料の中に当該出土の尖底土器も含まれるなどその内容は豊富である。包含層も残存している模様であり注意すべき遺跡である。38のハモキ遺跡は小値賀で唯一の岩陰遺跡であり、小型の押型文土器が採集されている。標高4m程の南面する海蝕洞を利用しておらず、小規模ながら包蔵状態は良好らしい。

縄文土器が多く採集できる遺跡としては35の矢櫃遺跡も又重要である。標高3m、南面する遠浅の湾奥部に位置する。大量の石器類に加え前期曾根式土器を始め、阿高、出水、南福寺、北久根、鐘ヶ崎と後期に至るまでの資料を豊富に含む。立地、環境、そして時期的にも本書で報告する歎岐遺跡に極めて類似する。

晩期の資料は11殿崎遺跡において若干数出土している程度で今の所他では出土していない。それ以前の資料の多さと比較すると時期的な裏表が感じられる。

弥生遺跡も又多い。只、時期的には弥生初頭の資料はなく前期後半になって現われる感が強い。隣島の宇久島では板付1の存在が知られており(Fig. 10)、小値賀町でもその可能性はあるが今の所証拠は無い。

前期後半以降の遺跡としては9の相津遺跡24の笛吹遺跡、25の神ノ崎遺跡が代表的である。

9、及び24の両遺跡は広範囲にわたり、共にカメ棺も出土している。時期的にも弥生前期後半～古墳時代に化ぶが9の相津遺跡では更に石鍋や、輸入陶片なども多く、長期間にわたって営まれた複合遺跡である事が知られる。

25の神ノ崎遺跡は属島である黒島東岸より突き出た小さな岬上に在る。昭和57年当該地を含む港改修工事に伴う事前調査で初めて注目された。その時点では文石墓基と箱式石棺から成る弥生及びそれ以降の墓址群の疑いが持たれたが、その後の範囲確認の結果、長さ60m、高さ2.8mの小さな岬全体が墓址であった事が確認された他多くの新しい知見をもたらしている。

Tab. 1 遺跡地名表

番号	名称	種別	時代	所在地	文獻
1	タジ リ遺跡	散布地	縄文・弥生	小値賀町六島郷	10
2	野崎遺跡	#	縄文	野崎郷	5
3	ダントウ山古石碑群	石塔	中世	#	10
4	野首遺跡	包蔵地	縄文・弥生	#	6
5	唐見崎遺跡	散布地	弥生	前方郷宇里前	10
6	本城岳遺跡	城跡	中世	# 唐見崎	6
7	西林寺跡(シャラジ遺跡)	散布地	古・中世	# 字相津	10
8	神方古墳	円墳	古墳	# #	6
9	相津遺跡	包蔵地	弥・古・中世	# 字相津近	7
10	多郎戸遺跡	散布地	旧石器・縄	# 宇多郎戸	10
11	波崎遺跡	包蔵地	縄文・弥生	# 字船越	本書
12	小崎田遺跡	散布地	#	# 字小崎田	10
13	メグ遺跡	#	#	納島字大畠及び縄切	6
14	広浦遺跡	#	#	# 字広浦	10
15	友尾遺跡				10
16	國所城跡	城跡	中世	中村郷字城ノ越	6
17	藻摩堂古跡群	石塔群	#	前方郷字木場	1
18	蛭崎山墳墓群	墳墓群	#	# 字牧尾原	10
19	鬼の上遺跡	散布地	弥生	中村郷鬼の上	10
20	天神崎遺跡	#	#	# 宇天神崎	10
21	池の下遺跡	#	弥・古	前方郷字池の下	10
22	船瀬遺跡	#	古・中世	中村郷字船瀬	10
23	笛吹水の下古墳	古墳	古墳	笛吹郷字水の下	3.6
24	笛吹遺跡	散布地	弥・古	# 川久保	1
25	神崎遺跡	墓趾	#	黒島郷字庭畠	8
26	黒島遺跡	散布地	弥生	# 字岱ノ辻及び井手の畠	10
27	楓津遺跡	#	縄・古	笛吹郷字楓津	10
28	小佐賀通見番所	番所跡	近世	# 番所及び岳の内	6
29	東水田遺跡	散布地	弥生	柳郷字東水田	10
30	宮の下遺跡	#	縄・中世	# 字浜ガシ	6
31	牛の塔	石碑	中世	中村郷字船瀬	1
32	宮跡遺跡	散布地	弥生	柳郷字宮跡	1
33	浜津前日遺跡(浜津前日遺跡)	#	弥古・中世	浜津郷字八幡山	1.24
34	御経塚(灰尻塚石塚)				10
35	矢ヶ遺跡	包蔵地	縄文	浜津郷字矢ヶ及び吉田	5
36	浜津折尾遺跡	散布地	縄・弥	# 字斑鳥	5
37	日崎遺跡	包蔵地	#	斑島郷字宮崎	6.9
38	ハモキ遺跡	散布地	縄文	# #	6
39	ウドマリ遺跡	#	弥生	# 字大治り	6
40	玉石葬遺跡	#	旧・縄・弥	# 字斑鳥	1
41	オオサコ遺跡	#	旧石器	# 字中田	10
42	トネリ遺跡	#	縄文	# #	10
43	萩路木遺跡	#	#	萩路木島郷	1
44	尾泊り遺跡	#		大島郷字尾泊	10
45	大島ダイラ塚跡(水道遺跡)	#	#	# 字平及び水畠	1

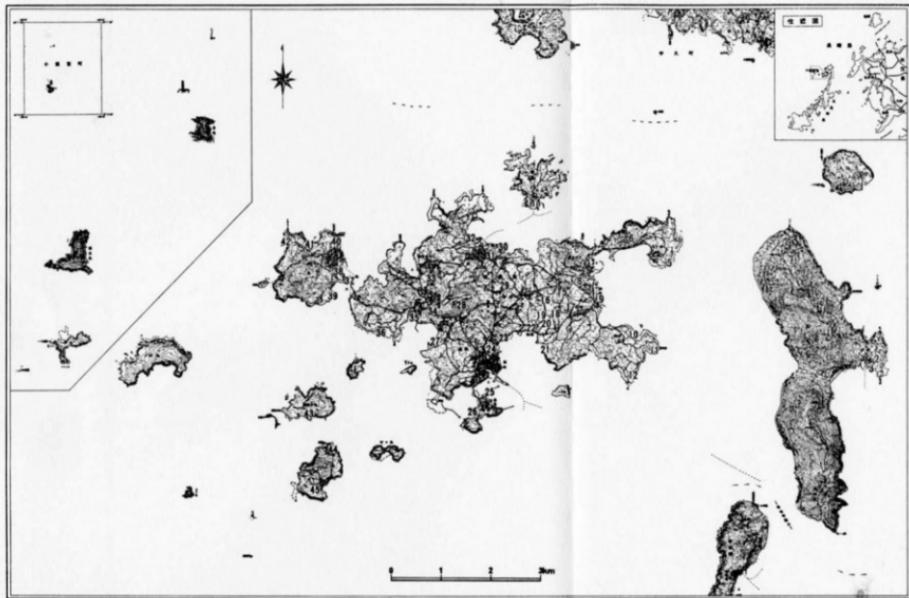


Fig. 9 町内 道路分布図

その1つは発見された36基の造構が時期的に弥生前期末～5.6世紀の巾を持つこと。にもかかわらず造構の構造が同一で変化していないことである。更に、石棺上の蓋石及び一番上に乗る大形の天井石という支石墓様の造構が一種の地下式構造の石棺であった事が判った。このような構造をもつ造構は從来地下式板石積石室墓と呼ばれる鹿児島、熊本県下にみられる特殊な石棺に類似し、「これによって弥生時代から古墳時代に及ぶ西北九州一天草一北薩地方の交渉が指摘できるようになった」とされる。

五島列島においては高塚形式と異なりこの箱式石棺を基本とし、板石を積み上げてゆく特殊な石室が弥生時代以後古墳時代に至るまで構造を替える事なく連続と続く例である。地縁ではなく海の媒介を担とする海洋族の独自の墓制であろうか。

古墳時代の五島列島は、極めて貧弱な状況にある。特に敵とした高塚古墳が存するにはこの小値賀に2基あるのみで今のところ他地域には見当らない。遺物の面からみても土師器、須恵器が集中するのは小値賀・宇久の両島に限定される感があり、中通島以南からは殆ど出土しない。この現象については未だ不明の点が多い。

島内の古墳時代の造構としてはまず先にあげた神ノ崎墳群がある。5—6世紀代に比定されており、從来空白であったこの時期を埋める好資料となった。只、構造的に高塚古墳ではなく地下式板石積石室墓である事は興味深い。

次に高塚古墳は2基が知られている8の神方古墳と23の水の下古墳である。

何れもすでに墳丘も無く凹状を留めていない。神方古墳は横穴式石室のみが残存するが副葬品も知られておらず内容時期共に不明である。水の下古墳は調査の結果その出土遺物の特徴より(Fig. 11)7世紀後半代に比定されている。これより前5世紀以前の状況については弥生時代後期以降殆ど判っていない。

しかし、このような不透明な五島列島の古墳時代にあって、

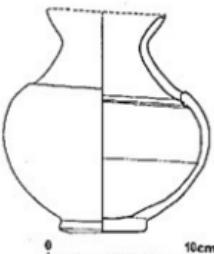


Fig. 10 宇久松原出土壺
(註4文献より転載)

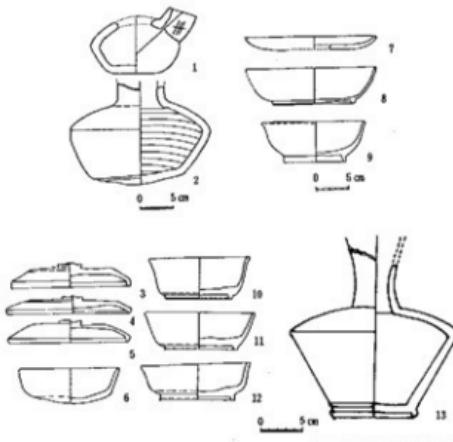


Fig. 11 水の下古墳出土土器 (文献6より転載)

^{註4}明瞭な高塚古墳の存在とこの後、野崎島「沖の神島神社」に奉納されていた狛犬の存在は(Fig. 12)諸外国との接点にあたるこの地域が大和朝廷下にあって重要な位置を占めていたであろう事は想像に難くない。

14世紀初頭までの小値賀島は、島のほぼ中央部を境として東西2島に分かれていたが1334年(建武元年) 平戸松浦家15代定による干拓工事によって一島になったとある。このような背景のもとに町内には中世の遺跡が多い。6の本城塗や16の居城などの城跡や9の相津遺跡に於ける多くの輸入陶磁の存在がそれを示している。この遺跡の内容については町教育委員会によって後日詳細な報告が予定されている。

近世に入ってからの五島を特徴づけるものとしては屈指の捕鯨の基地としてである。特に小値賀の小田氏^{三七}・魚目の深沢氏、有川の有川組などは著名である。

元々九州北西海域は鯨の洄遊水域にあたるところから、古くより鯨に対する認識は深いものであったらしく、福江白浜貝塚^{註8}、出平町つぐめの鼻遺跡^{註9}、有川町浜郷遺跡^{註10}、大瀬戸町串島貝塚を始め縄文時代から奈良平安時代に至るまで海辺部の遺跡にはよく鯨骨が残され、ヤスやアワビオコシなど骨角器として再利用されている事実がある。又老岐國風土記にも「鯨伏の条」があるなど古来鯨は西海上に於て極めて喫みの深い獲物であった。

その後、捕鯨方法が従来の突取法から17世紀網漁法に改変するに及び、捕鯨は急速に発達し、元禄から宝慶年間に至る60～70年間は全盛時代を迎えたらしい。ちなみに、ある鯨組の記録をみると、弘化四年（1847）には230頭が来遊し32頭捕獲、翌嘉永元年（1848）には190頭の通鯨に対し44頭を捕獲との記述がある。一鯨組でその成果であるから、壱岐、生月、有川、平戸そして小値賀等各鯨組の年間総水揚数は相当なものであったろう。

しかし、このような隆盛も歐米列国の銛砲捕鯨という近代式捕鯨には立ち打たれず又鯨の来遊も減りつけたことから幕末から明治初年頃には殆どの船組が転廩業の止むなきに至っている。

註1 昭和59年県文化課が実施した同町内の分布調査の結果による。ところが同町は昭和59年度より独自に同町の詳細分布調査を実施しており、その成果によると、遺跡数は更に増えて中世以前で58ヶ所になるという。但しここでは混亂を避ける為、遺跡カードが作成してある45ヶ所について述べておく。

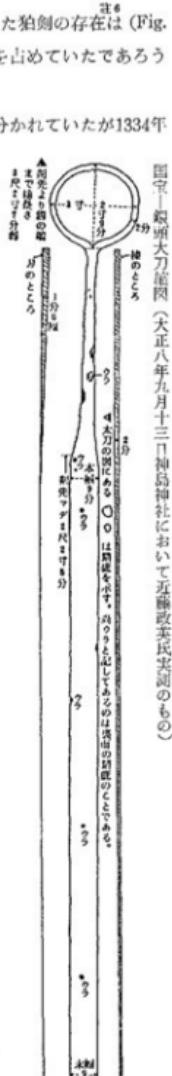


Fig. 12 豈頭大刀

- 註 2 遺跡の内容については文献 6, 7, 8, 9 を参照した。
- 註 3 小田富士雄氏は、弥生初頭の板付 I 式文化は宇久島に渡来し、その後前期中頃までの文化が中通島北部にまで及ぶとされ、そのルートは北松浦半島—宇久島—小値賀島—中通島北部という伝播経路を想定しておられる。小田富士雄「五島列島の弥生文化総説篇」長崎大学医学部解剖学第二教室人類学考古学研究報告 第2号 1970
- その後新資料の発見があり時期的には若干再考の余地があるが基本的には変らないものと思われる。
- 註 4 長崎県教育委員会「宇久松原遺跡」長崎県埋蔵文化財調査集報 VI 長崎県文化財調査報告書 第60集 1983
- 註 5 文献 8 120頁
- 註 6 戦後米軍に接収され現存しない。これと同類と思われる環頭大刀が平戸志々伎神社、同亀岡神社に伝えられているが、残っているのは亀岡神社のもののみで現在国の重要文化財として指定されている。
- 註 7 古元寛一「小値賀町捕縄考」文献 6 所収
- 註 8 福江市教育委員会「白浜貝塚」福江市文化財調査報告書 第2集 1980
- 註 9 長崎県文化課「つぐめのはな遺跡緊急調査概報」1971
- 註10 註3文献に同じ
- 註11 長崎県教育委員会「串島遺跡」長崎県文化財調査報告書 第51集 1980
- 註12 古田敏市「有川町捕縄史」有川町郷土誌所収 1972

文 献

- 1 長崎県教育委員会「長崎県遺跡地名表」長崎県文化財調査報告書 第1集 1962
- 2 長崎県教育委員会「五島遺跡調査報告」長崎県文化財調査報告書 第2集 1964
- 3 吉井一信「水の下古墳の発掘考および古墳期の小値賀について」龍燈第3号所収 小値賀町史談会 1965
- 4 吉井一信「発掘第一・綿津美神社境内」龍燈第4号所収 小値賀町史談会 1966
- 5 文化庁「全国道路地図—長崎県—」1976
- 6 小値賀町教育委員会「小値賀町郷土史」1978
- 7 長崎県教育委員会「般寺遺跡」長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅲ所収 長崎県文化財調査報告書 第50集 1980
- 8 小値賀町教育委員会「神ノ崎遺跡」小値賀町文化財調査報告書 第4集 1984
- 9 小値賀町教育委員会「町内遺跡分布調査、I」小値賀町文化財調査報告書 第5集 1985
- 10 小値賀町教育委員会原原博氏教示及び、1984年長崎県文化課分布調査の折譲認

II 遺跡の調査

一 第一次調査

1. 土層

第一次調査では、24ヶ所のトレンチを入れて遺跡の範囲を確認し、その内TP1, 2, 4, 12, 14, 19の6ヶ所のトレンチに於いて遺物包含層を確認した。ここでは包含層を含むTP2, 4, 14区及び無遺物層区であったTP3, 9, 10, 11, 13区について堆積状況を図示し若干の説明をしておきたい。

包含層を含む区はTP1, 2, 4を含む遺跡北東部とTP14を含む南東部で若干の違いをみせる。まず前者については基本的に3つの層に分けられる。1層は表土耕作土で厚さ15~20cm程度である。2層は暗褐色土で厚さ20~40cm、粘性は無く時折小礫を若干含む。いわゆる包含層であるが、TP1では5×2のトレンチの中に5,000点を越す遺物が集中する。遺物の堆積のみで層が形成された如きであった。

6層は赤褐色粘質土で以下遺物を含まない。部分的試掘では厚さ40cm程度で以下には風化した砂岩を含む暗紫色の上層に漸次変化する。(Fig. 13—TP2, 4) 南東部の基本土層は2層までは北半と同じであるが、3層に湿気を含む暗褐色土が堆積している。厚さは10~20cm程度であるがやはり若干の遺物を含む。(Fig. 14—TP14) なお、この区ではこの層の下に小角礫を一面に並べたような淡黄褐色の層が堆積する。遺物は含まない。

遺物包含層を含まない区では、殆どの場合、表土直下に赤褐色の粘質土か風化礫を含む赤褐色土に推移する。表土中にも遺物は含まれない。

2. 遺物の出土状況 (一次調査)

この項で説明する資料は第一次調査で包含層を確認した6トレンチの内、空港建設部分にかかるTP1, TP12, TP19の3ヶ所内のものに限定する。その他のTP2, TP4, TP14区は第二次調査区域内に含まれる為であり、混乱を避ける為それらの出土遺物は第2次調査の項で一括して説明することにしたい。

TP1は遺跡北東部に設定したトレンチで、標高4m40前後、奥汀線まで直線にして僅か12mの位置に在る。

出土遺物は土器2,307点、石器2,015点の計4,322点まで確認したが当該地が空港計画範囲外になる事が判った時点で調査を中断した。包含層は表土下の暗褐色土のみである。遺物は標高4.23mより出土し始め、3.92mの時点で埋め戻しを行った証であるので約30cmの厚みの中に入れだけの量を含んでいる事になる。この下の部分は未掘であるので当然この総量は拡大になら

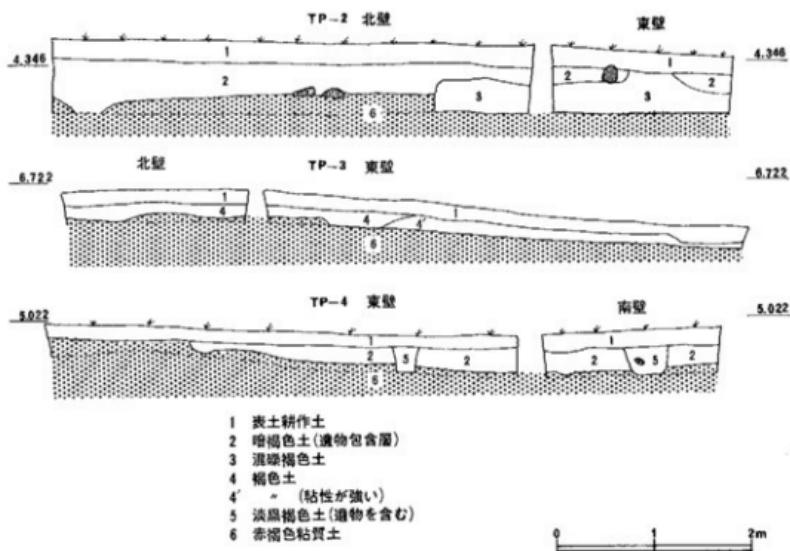


Fig. 13 TP 2・3・4 距面図 (1/40)

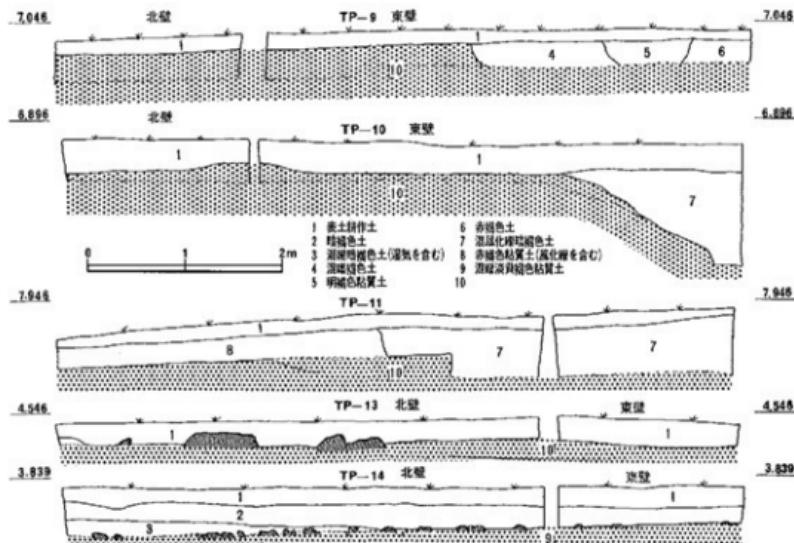


Fig. 14 TP 9・10・11・13・14 距面図 (1/40)

第一次調査

う。なお、このトレンチの出土状況図は点の図まりになるだけであるのであえて図示しない。

TP12はTP1の北方20mの位置に当たる。10cm程の厚みの表上下にすぐ包含層があらわれ30cm程の厚みの中に60点の遺物の出土をみた。(Fig. 15)しかし、トレンチ北側にはすぐに包含層も遺物もみられないことから、このトレンチが遺跡の北限であることが判った。

TP19は、遺跡の南東部にあたる。遺物は少なく僅か13点であり、標高3.6~3.75mの間に含まれる。(Fig. 5)

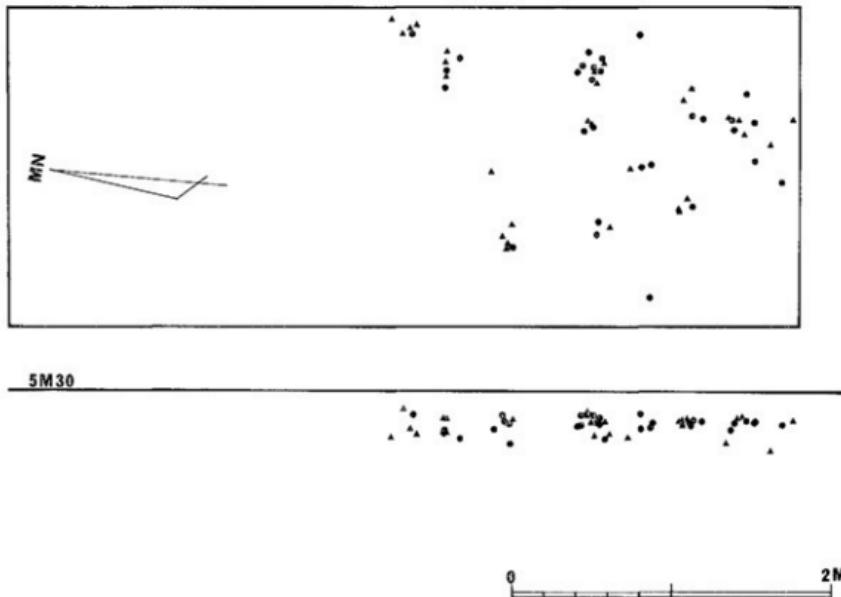


Fig. 15 TP 12 遺物出土状況

3. 第一次調査出土土器 (Fig. 16~26)

先述した如く、ここで図示する資料はTP 1出土土器に限定する。

遺物包含層は2層に比定した暗褐色土のみで、しかも厚さ30cm程の中に土器・石器が充填といったような状況であった為、層位による分類が難しい。そこで、ここでは土器をまず下記の6類に分け、しかる後一般的に呼称されている型式によって分類しておくこととする。

I類 阿高式系土器

- a 並木式土器
- b 阿高式土器
- c 南福寺式土器
- d 出水式土器
- e 御手洗A式土器

II類 磨消繩文系土器

- f 中津式土器
- g 繩ヶ崎式土器
- h 北久根山式土器

III類 貝殻文系土器

- i 市來式土器

IV類 無文土器

V類 その他の土器

VI類 底部

I類 阿高式系土器

- a 並木式土器 (Fig. 16-1)

1点のみ出土している。口縁下に浅い凹線を配した後半截竹管による爪形文を施す。淡黄紫褐色を呈し、胎土には多量の滑石を含む。田中氏の設定に従えば並木Ⅲ式ということになろう。

- b 阿高式土器 (Fig. 16-2~4)

何れも胎土に多量の滑石を含み、明赤褐色を呈する。器面は目調整後ヘラによってなで消し、その上に棒状原体による凹文を施す。

- c 南福寺式土器 (Fig. 16-5~8)

5は一条の沈線によって口縁部を作出する。口唇部には凹点を施し、口縁部には巾広のヘラ先状原体による「く」の字状文様を配する。7は口縁にコブ状突起を貼付する。胎土には多量の滑石を含む。

d 出水式土器 (Fig. 16-9~15)

9~11については胎土に滑石を含むが、13~15は含まない。9は口縁下に突帯を貼付し、その上に浅い凹点を施す。外面は祇口状調整の上をヘラでなで消す。10、11は口縁部のみに文様を集中させるが、特に11の文様はヘラ先状原体による鋭利な沈線となる。12は粘土紐を組み合わせて文様とするが、それ自体非常にくずれている。13は口唇部に粘土紐を貼付してその上に刻目を施す。14は波状口縁を成す。口縁下に帯状の隆帯を山形に貼付し刻目を施す。又口縁両面にも細い沈線をV字状に配する。よく判らない資料であるが、鹿児島県出水貝塚に類似資料が出上しているところから一応出水式系統のものと理解しておく。

e 御手洗A式土器 (Fig. 16-16~21)

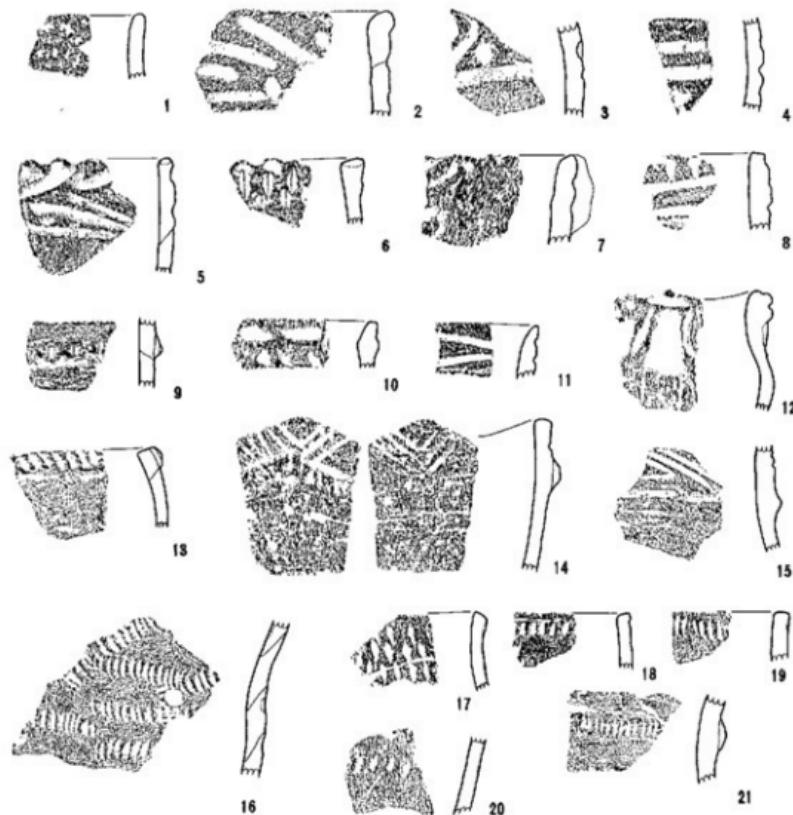


Fig. 16 一次調査出土土器実測図 (1/3)

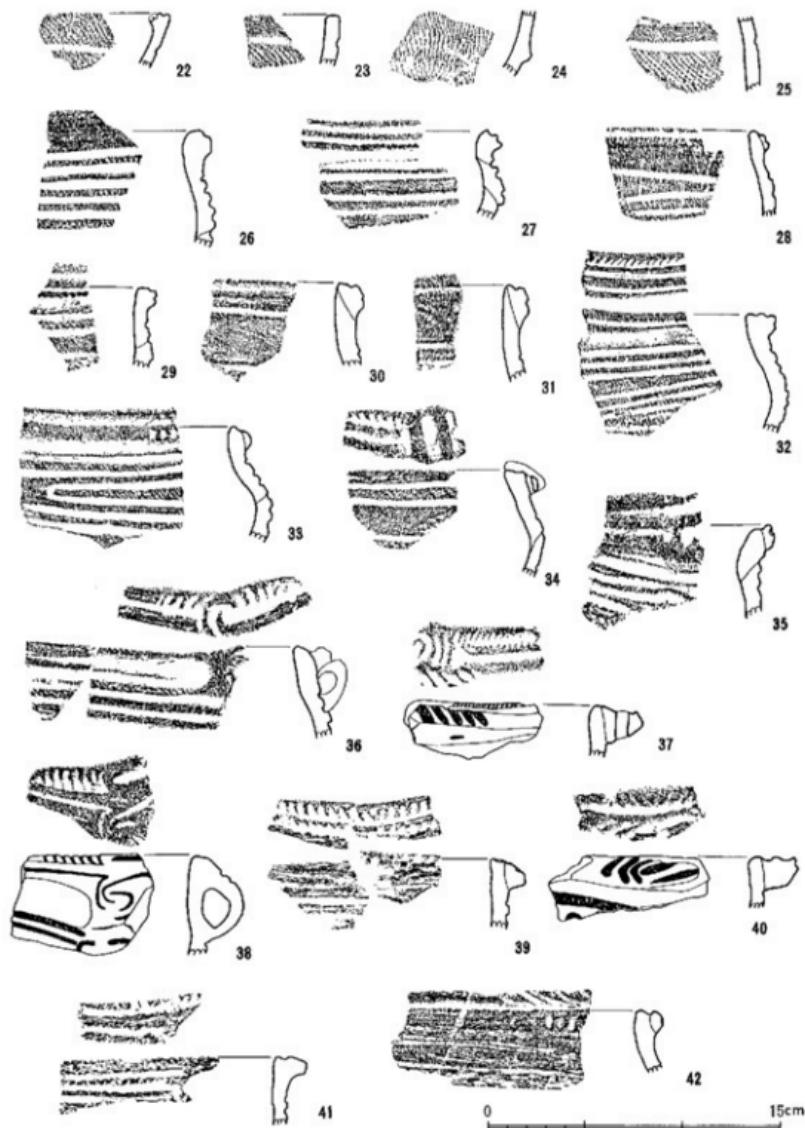


Fig. 17 一次调查出土土器尖端图 (1/3)

ここ掲示する資料は爪形文を主文様とするが、20・21については殆ど痕跡的な実帶上に浅い爪形文を施す。何れも胎土に滑石を含まない。

II類 磨消繩文系上器 (Fig. 17~21)

f 中津式土器 (Fig. 17~22~25)

沈線と繩文を主文様とする中津式土器と思われる。22は口縁下に一条の沈線をひき、その上部に斜繩文を施す。23も口縁下に沈線を持つが、22とは逆に沈線下に繩文を施す。24は鉢脚部と思われるが全繩文である。25には、2本の平行沈線と繩文がみえる。これらの資料は何れも小破片であり器形その他不明である。

g 鐘ヶ崎式土器 (Fig. 17, 18, 19, 20~60~75)

TP 1 の中で最も量が多く主体を成す土器である。鉢形土器が主であるが、復元し得る程の資料は無い。26~35は、口がやや開き頸部はしまり、腹部が若干張るタイプである。口縁は肥厚し、口唇に沈線がみられる。主文様は平行沈線であるが、32には口唇に短い刻目が、又33には曲線が配され、その中に小捲貝による擬似繩文が施される。36, 38, 43~46には柄状把手がつく資料である。38は把手上有浅い沈線による入組文を配するが文様はくずれている。45, 46は共に把手上有S字状や渦文を巡らすが、46の把手はもはや穿孔の意志が無く柄状の呈をなさない。37, 39, 40~42は口唇を巾広に作り、その上に沈線による渦文や刻目を施す。47~58は磨消繩文の資料である。47~49は頸部が短く屈曲し、脛の張りが強い。小型の鉢に属するものと思われる。50はローリングが認められ文様自体も浅く鋭さがない。59は比較的大型の深鉢で口径37.3cmを計る。ゆるやかな波状口縁を持つ。沈線と渦文から成る文様は口縁部に集約され、脣部は無文のまま放置される。脣部下半にはスヌが若干附着する。60~74は脣部破片である。渦文、沈線、磨消繩文を特徴とする。61, 62は文様下を研磨した精製土器である。薄手で焼成も良好である。



43



44



45



46

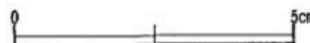


Fig. 18 柄状把手土器(1/2)

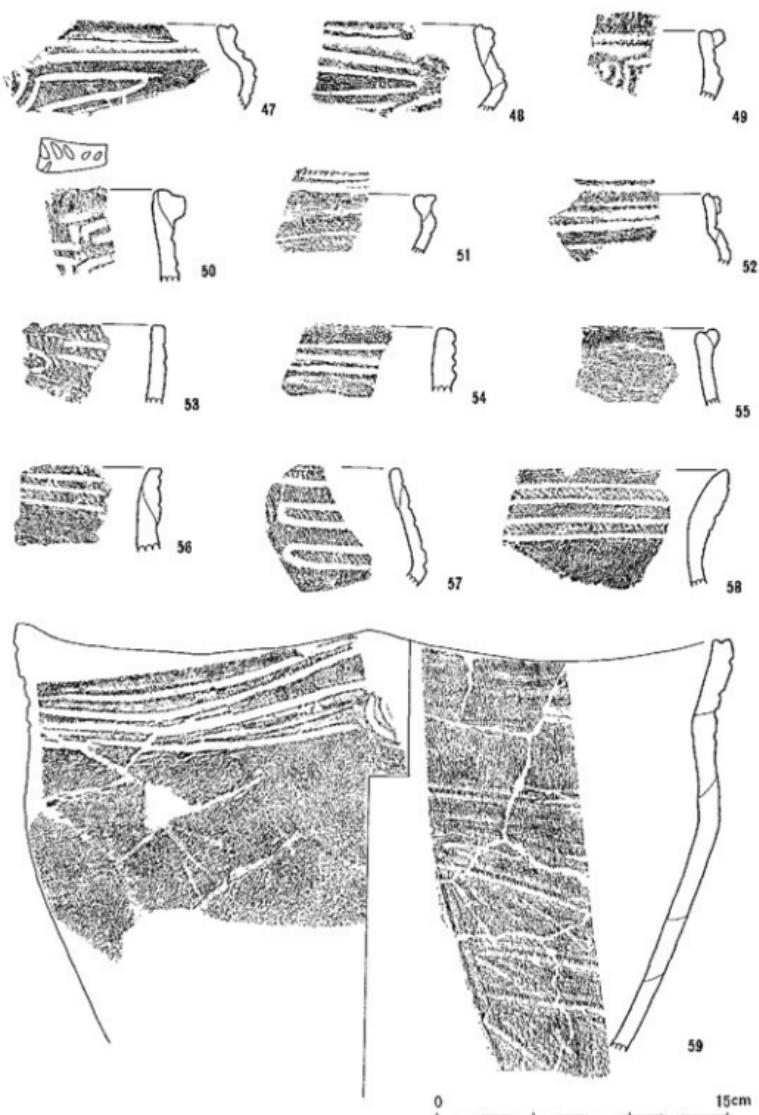


Fig. 19 ·一次調査出土土器実測図 (1 / 3)

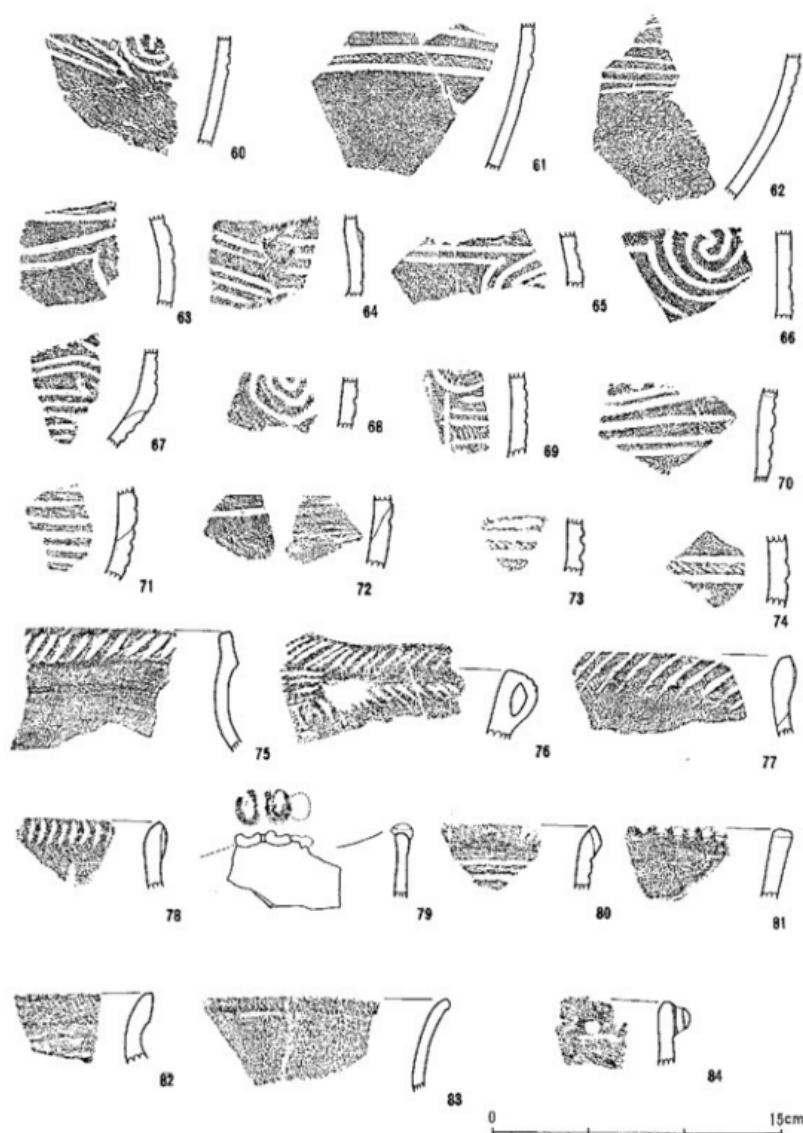


Fig. 20 一次調查出土土器実測図 (1 / 3)

h 北久根山式土器 (Fig. 20—76~84, Fig. 21)
 76—78, 80, 82は口縁部を厚くさせ頸部がややし
 まる。口縁には短斜線文を施こす。79は波状口縁と
 なりその頂部に3個の小さな粘土塊を貼付し、上部
 に押捺を施こす。85は口縁部に粘土帯を逆W字形に
 貼付する。

III類 貝殻文系土器 (Fig. 22)

口縁に直帶を巡らして厚く押厚させて口縁帯を作
 出し、その部分のみに文様を集中させる一群であ
 る。文様は貝殻腹縁による押圧 (86, 90, 91, 93) やヘラ先による短斜線文 (88, 89) そして
 波状文 (92) などがみられる。93は口径38cmの深鉢で頸部が「く」の字状に折れて口縁帯を作
 り出し、その部分に貝殻腹縁による押圧を施こす。西北九州ではあまり見られない資料であ
 る。以上的一群は南九州を中心とする市来式に相当するものであろう。

IV類 無文土器 (Fig. 23.~24)

無文の土器は数量的には多いが小破片が大部分である為、本当にそうであるかの断ができる



Fig. 22 一次調査出土土器実測図 (1/3)

い。そこでここでは無文で且つ胎土に滑石を含まない資料に限定して図示したい。94は口径37cmを計る深鉢で頸部がゆるい「く」の字形を成す。口唇には沈線が見られる。鐘ヶ崎式と共に伴するものか。96は換形を成す。やはり口唇に一条の沈線をもつ。明赤褐色で内外面共荒い坯目調整を行う。やはり口唇に浅い沈線がみられる。102, 103は口縁下に補修孔をもつ。104~114は無文土器の胸部資料である。調整痕は一般的に外面が柱目の縦方向、内面は横方向に行ってその上をナデ消す例と、そのまま放置する例がある。114は貝殻条痕の例である。肋眠のある貝殻腹縫を利用する。なお、110には丹塗りの痕跡が認められる。

V類 その他の土器 (Fig. 25)

不明土器を一括してV類とする。115は深鉢の口辺部と思われる。口縁が若干外反し、胸部

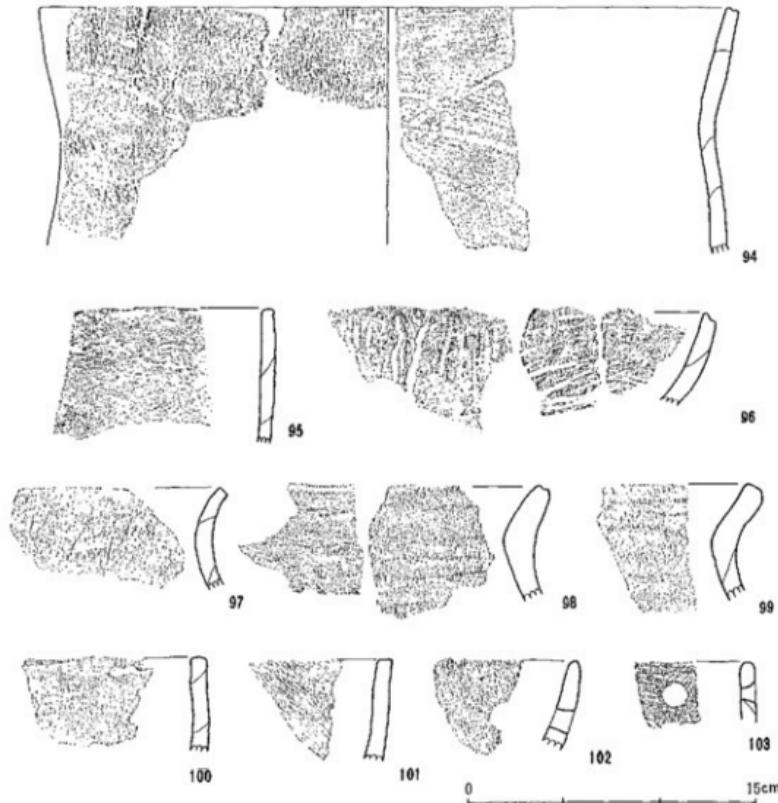


Fig. 23 一次調査出土土器実測図 (1/3)

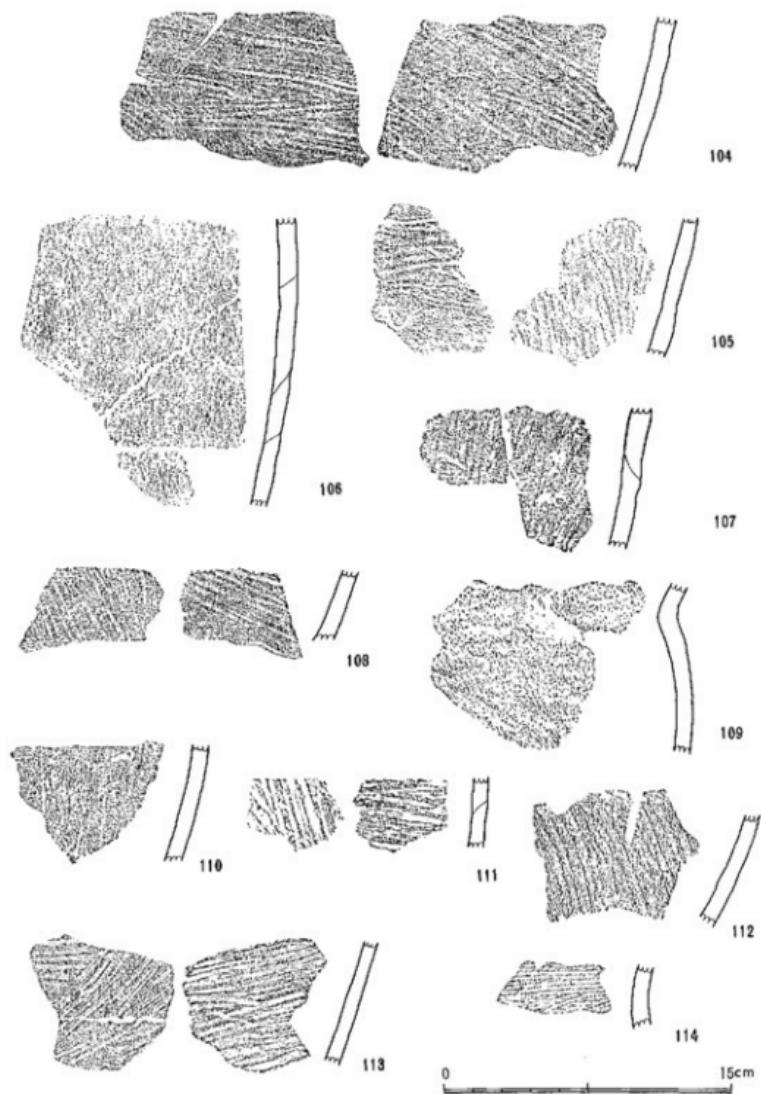


Fig. 24 一次調查出土土器實測圖 (1/3)

第一次調査

はすばまりながら底辺へ移行する。胎土には砂粒・石英粒等を含むが滑石は含まない。文様は右下りに山形文を施す。昭和54年同遺跡を試掘された坂田邦洋氏の新聞発表によれば、韓国備口土器が多く出土したらしい。あるいはこの種の土器片を含むのかも知れないが実見していないので確証は無い。116, 117は同一個体と思われる。共に鉢の口縁部で、口唇下に沈線を配し、その下部に斜め方向に平行沈線を施す。胎土色調共に115に似る。118は鉢調部である。頸部に3本の沈線をひき、その下に斜め方向に平行沈線を配する。暗褐色を呈する。

VI類 底部 (Fig. 26)

119～123は胎土に滑石を含む資料である。何れも深鉢の底部と思われる。124～135は胎土に滑石を含まない。底径は11.5～16.5cmの間に含まれ、12cm前後のものが最も多い。129は精製浅鉢の底部であろう。底から大きく外側へ張り出す。内外面共研磨を施す。131, 134～136は合状底部である。131, 134は無文のままであるが、135は唇が大きく広がり、コブ状の粘土塊と帶状の突帯を貼付し、沈線と小巻貝による擬繩文によって文様を構成する。136は長方形の通しを持つ合状底で曲線と淌文を記し、曲線間には擬繩文を施す。以上の資料の内119～123は阿萬系のもの、124以降が磨消繩文系に伴う資料であると思われる。

註1 下記文献を参考とした

- a 前川威洋「九州縄文文化の研究」所収各論文 1979
 - b 田中良之「中期・高式系土器の研究」古文化試叢第6集所収 1979
 - c 田中良之「磨消繩文土器伝播のプロセス」古文化論集上巻所収 1982
 - d 坂田邦洋「北久根山式土器の設定」考古学論叢3 所収 1975
 - e 佐賀県立博物館「坂の下遺跡の研究」佐賀県立博物館調査研究書第2集 1975
- 註2 前掲 b論文
- 註3 「薩摩郡出土水貝塚発掘報告」京都帝國大學文学部考古学研究報告 第六冊 大正10年
- 註4 昭和54年5月4日付け長崎新聞掲載要旨

参考文献

- 1 前川威洋「縄文後期文化一九州一」新版考古学講座所収 1969
- 2 熊本県教育委員会「黒橋」熊本県文化財調査報告 第20集 1976

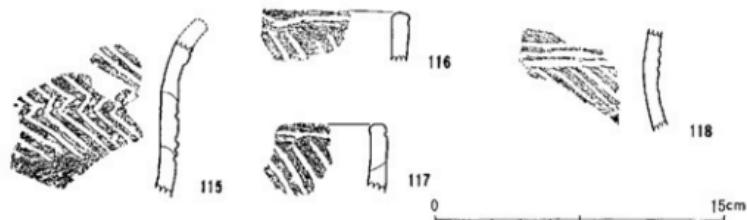


Fig. 25 一次調査出土土器実測図 (1/3)

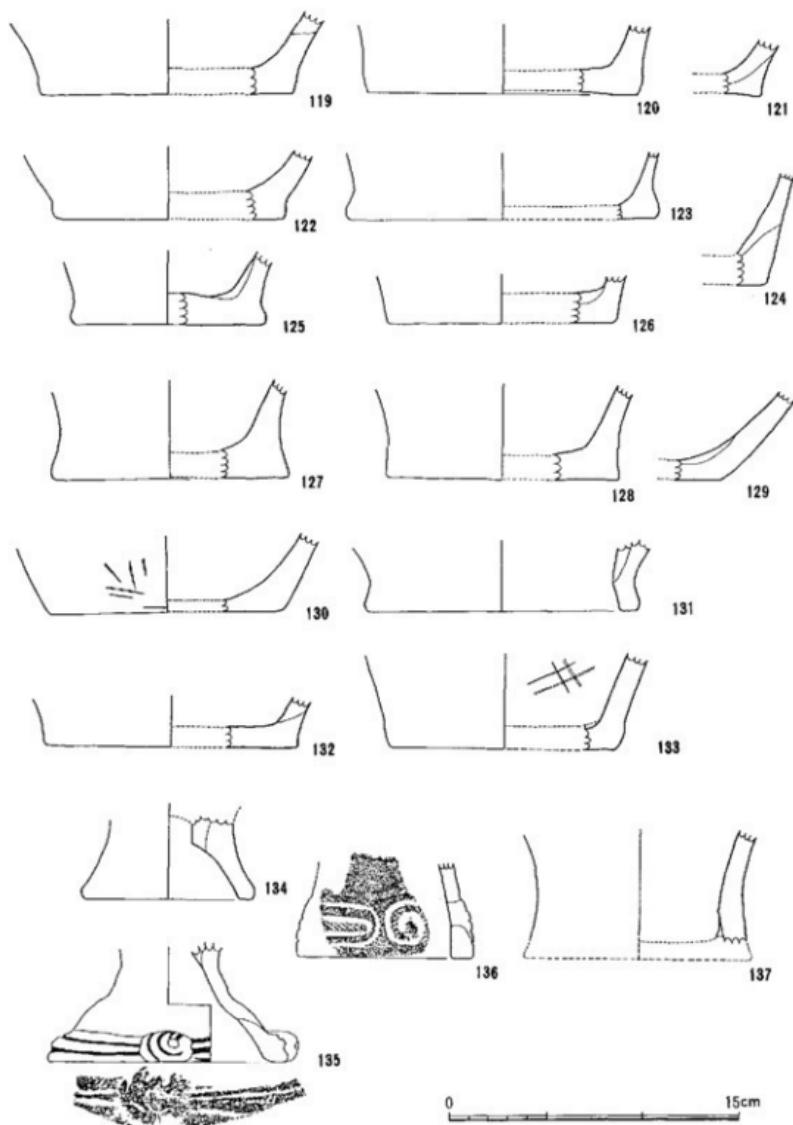


Fig. 26 一次調查出土土器實測圖 (1 / 3)

第一次調査

Tab. 2 土器観察表

器番号	遺物番号	出土区	部 位	厚(%)	色 満	胎	土	調 整		備 考
								外	内	
1-1	TON-1-1358	TP I	鉢 口 緑	7	淡黄茶色	滑	石			牛糞苔菅・ローリング
2	TON-1- 916	"	"	12	茶褐色	"	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	棒状原体円錐
3	TON-1-2154	"	鉢口辺部	11	明赤褐色	"	"	"	"	沈線・凹点
4	TON-1-1690	"	"	9	"	"	"	"	"	門線
5	TON-1-2345	"	鉢 口 緑	9	"	"	"	極目・ヘラナデ	ヘラナデ	沈線
6	TON-1-2130	"	"	8	茶褐色	"	"	"	"	凹点
7	TON-1- 551	"	"	10	"	"	"	ヘラズリ・ヘラナデ	ヘラナデ	隆脊・沈線
8	TON-1- 952	"	"	12	黒褐色	砂粒・雲母	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	凹点・沈線
9	TON-1- 420	"	鉢 脚 部	9	茶褐色	滑	石	ヘラナデ	"	尖部・凹点
10	TON-1- 413	"	鉢 口 緑	9	暗茶褐色	"	"	ヘラズリ・ヘラナデ	"	沈線
11	TON-1-1107	"	"	10	暗褐色	砂粒・滑石(少)	"	ヘラナデ	ヘラナデ	先沈線
12	TON-1-1976	"	鉢 口 緑	10	赤茶色	"	"	指頭圧・ヘラナデ	ヘラナデ	粘土結晶付
13	TON-1-1378	"	"	8	灰褐色	砂粒・石英粒・雲母	"	ヘラナデ	ヘラナデ	尖部・削目
14	TON-1-1379	"	"	9	暗茶色	砂粒・雲母(少)	ヘラナデ			尖部・削目・ヘラ先沈線
15	TON-1- 913	"	鉢 脚 部	8	黒褐色	砂粒・雲母	ケンマ			突起・フタ先沈線
16	TON-1- 365	"	鉢口辺部	9	暗灰黑色	砂粒・雲母・石英粒	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	裏面にも鋸目
17	TON-1- 224	"	鉢 口 緑	8	"	"	"	"	"	瓜形文
18	TON-1-2299	"	"	8	黒褐色	"	ケンマ		"	
19	TON-1-2328	"	"	8	"	"	ヘラナデ		"	
20	TON-1- 11	"	鉢 脚 部	8	灰茶色	砂粒・雲母・長石	"			ローリング
21	TON-1- 207	"	"	10	灰茶色	砂粒・雲母・長石	ヘラナデ			突起・削目
22	TON-1- 390	"	鉢 口 緑	7	黄褐色	砂粒・雲母・石英粒	"	ヘラ・ケンマ	ヘラ・ケンマ	縦文・沈線
23	TON-1-1629	"	"	8	暗褐色	砂粒・雲母・長石	ヘラナデ	"	"	
24	TON-1- 85	"	鉢 脚 部	7	黄褐色	"	"			全縦文
25	TON-1- 496	"	"	7	"	"	ヘラナデ			縦文・沈線
26	TON-1-1460	"	鉢 口 緑	9	暗灰黑色	"	ヘラナデ	ヘラ・ケンマ	平行沈線	
27	TON-1-1338	"	"	8	暗茶褐色	"	"	ヘラ・ケンマ	"	
28	TON-1- 4	"	"	8	淡褐色	"	"	ヘラ・ケンマ	"	
29	TON-1- 935	"	"	8	明褐色	"	"	ヘラ・ケンマ	"	
30	TON-1- 408	"	"	10	暗灰黑色	"	"	ヘラナデ	"	
31	TON-1-1582	"	"	"	"	"	"	"		9と同一側体
32	TON-1- 18	"	"	9	暗茶褐色	"	ヘラナデ	極目・ケンマ	平行成線口唇に削目	
33	TON-1-1314	"	"	9	"	"	ヘラナデ	ヘラナデ・ケンマ	根柢文	
34	TON-1-1153	"	"	8	"	"	"	ケンマ	口唇に削目	
35	TON-1- 847	"	"	8	明茶褐色	砂粒・長石・石英粒	"	ヘラナデ	退化沈線	
36	TON-1- 871	"	"	11	"	"	ヘラナデ・ケンマ			植根把手
37	TON-1- 145	"	"	9	暗灰黑色	"				11唇に溝文・削目
38	TON-1- 301	"	"	8	"	"	ヘラナデ	ヘラナデ・ケンマ	植根把手・ローリング	
39	TON-1- 778	"	"	8	黑褐色	"	ヘラナデ・ケンマ	"		口唇に2段の削目
40	TON-1- 333	"	"	9	暗茶褐色	"				ローリング
41	TON-1- 620	"	"	7	暗灰黑色	"	ヘラナデ	ヘラナデ・ケンマ	植根把手・ローリング	
42	TON-1- 983	"	"	9	黑褐色	砂粒・石英粒・石英粒	ヘラナデ・ケンマ	"		
43	TON-1-2089	"	"	9	淡黄灰色	"	ヘラナデ	ヘラナデ・ケンマ	橋状把手	
44	TON-1- 137	"	"	9	赤褐色	"	ヘラナデ	"	"	・溝文
45	TON-1- 575	"	"	9	暗灰褐色	"	"	"		植根把手・くすぐれた溝文
46	TON-1- 52	"	"	9	"	"	ヘラナデ	ヘラナデ	S字状文	
47	TON-1-2059	"	"	7	暗茶褐色	"	ヘラナデ・ケンマ	ヘラナデ・ケンマ	指製土器	
48	TON-1- 475	"	"	7	黑褐色	"	ヘラナデ	"	"	
49	TON-1- 424	"	"	8	"	"	ヘラナデ	ヘラナデ	溝文	
50	TON-1- 435	"	"	8	黄灰色	"	"	"	"	ローリング

Tab. 3 土器観察表

団番号	遺物番号	出土区	器種	厚(%)	色調	胎土	調整		備考
							外	内	
51	TON-1-520	T P I	鉢口縁	7	明赤褐色	砂粒・石英粒・雲母	ヘラナデ		ローリング・口唇部粗
52	TON-1-472	#	#	7	黒褐色	#	#	#	平行沈線
53	TON-1-1805	#	#	8	暗灰黑色	砂粒・雲母・長石	ヘラナデ・ケンマ	絃目・ケンマ	ヘラジ沈線
54	TON-1-162	#	#	11	暗黃褐色	#	ヘラナデ	ヘラナデ	平行沈線
55	TON-1-440	#	#	7	黒褐色	#		指模痕・ヘラナデ	口唇部に沈線
56	TON-1-1111	#	#	11	暗茶褐色	砂粒・雲母・長石	#	ヘラナデ	平行沈線
57	TON-1-119	#	#	8	暗黃褐色	砂粒・雲母・長石	#	#	沈線間に擬似文
58	TON-1-1154	#	#	12	#	#	#	ヘラナデ・ケンマ	" (巻貝)
59	TON-1-1342 2666	#	深鉢口縁	9	暗褐色	#	#	ヘラナデ	沈線・渴文
60	TON-1-1371 1681	#	鉢・財部	7	黒褐色	#	ヘラナデ・ケンマ	#	スリ落闇文・満文
61	TON-1-1473	#	#	6	#	#	ヘラナデ・ケンマ	#	
62	TON-1-2067	#	#	7	#	砂粒・石英粒・雲母	ヘラナデ・ケンマ		
63	TON-1-2346	#	#	7	#	砂粒・雲母	#	#	沈線・渴文
64	TON-1-1156	#	#	8	#	砂粒・雲母・長石	#	ヘラナデ	沈線
65	TON-1-2173	#	#	8	#	砂粒・雲母・長石	#	#	沈線・渴文
66	TON-1-1128	#	#	8	暗黄灰色	#	#	#	沈線・渴文
67	TON-1-835	#	#	8	暗黃褐色	#	#	#	入組文
68	TON-1-1515	#	#	8	暗赤褐色	#	#	ヘラナデ・ケンマ	同心円文
69	TON-1-1556	#	#	8	黒褐色	#	#	ヘラナデ	沈線・満文・組文
70	TON-1-840	#	#	8	黃褐色	#	#	#	沈線
71	TON-1-2302	#	#	8	#	砂粒・石英粒・雲母・長石	ヘラナデ・ケンマ	絃目・ケンマ	"
72	TON-1-46	#	#	9	#	#	ヘラナデ・ケンマ	ヘラナデ	"
73	TON-1-723	#	#	8	#	砂粒・石英粒・雲母	ヘラナデ	#	沈線開闊端文
74	TON-1-1632	#	#	8	灰褐色	砂粒・石英粒・雲母・長石	ヘラナデ・ケンマ	ヘラナデ・ケンマ	"
75	TON-1-1029	#	深鉢口縁	8	暗褐色	#	ヘラナデ・ケンマ	ヘラナデ・ケンマ	短斜微文・精製
76	TON-1-210	#	#	9	#	#	#	ヘラナデ	椭状把手
77	TON-1-108	#	#	9	#	#	ヘラナデ	ヘマナデ・ケンマ	短斜線文
78	TON-1-744	#	#	8	#	#	ヘラナデ	ヘラナデ	"
79	TON-1-708	#	鉢口縁	7	暗灰黑色	#	#	#	波状口縁
80	TON-1-821	#	#	8	暗黃褐色	#	#	#	口縁肥厚
81	TON-1-512	#	#	9	#	#	#	#	口輪に筋目
82	TON-1-593	#	#	9	暗褐色	#	#	#	口縁に浅い擬似文
83	TON-1-2050	#	#	6	明赤褐色	#	#	#	
84	TON-1-591	#	#	#	暗褐色	#	#	#	ローリング
85	TON-1-1404	#	深鉢口縁	10	暗黃灰色	砂粒・長石・雲母		ヘラナデ	平字扁付文・一部模文
86	TON-1-1768	#	鉢口縁	8	明黃褐色	砂粒・石英粒・雲母	ヘラナデ	ヘラナデ	口縁三角形文・貝殻文
87	TON-1-652	#	#	8	暗褐色	砂粒・石英粒・雲母・長石	#	#	"・斜幕文
88	TON-1-646	#	#	11	暗茶褐色	#	#	#	口縁肥厚
89	TON-1-845	#	#	6	#	#	#	#	"・短斜線文
90	TON-1-268	#	#	10	#	#	#	#	貝殻文
91	TON-1-1161	#	#	8	#	#	#	#	" " "
92	TON-1-1290	#	#	8	#	#	#	#	波状沈線文
93	TON-1-2075	#	深鉢口縁	9	#	#	ヘラナデ・ケンマ	#	貝殻文
94	TON-1-226	#	#	8	#	#	ヘラナデ	板目・ヘラナデ	口唇に沈線
95	TON-1-2235	#	鉢口縁	7	暗赤褐色	砂粒・雲母	板目・ヘラナデ	ヘラナデ	塊片に比して粗量
96	TON-1-101 555	#	#	9	明赤褐色	#	絃目	絃目	口唇に沈線
97	TON-1-969	#	#	9	黒褐色	砂粒・石英粒・雲母・長石	絃目・ヘラナデ	ヘラナデ	S字付着
98	TON-1-457	#	#	14	#	#	ヘラナデ	ヘラナデ(吻)	
99	TON-1-117	#	#	12	#	#	#	#	

Tab. 4 土器観察表

団番号	遺物番号	出土区	部 位	形(型)	色 調	胎 士	調 整		備 考
							外	内	
100	TON-1-1650	TP I	鉢 II 線	9	暗赤褐色	砂粒・雲母・長石	ヘラナデ・ケンマ	征日・ヘラナデ	
101	TON-1-562	"	"	9	"	"	ヘラナデ・ケンマ	ヘラナデ	
102	TON-1-373	"	"	9	赤褐色	砂粒・石英粒・雲母	"	"	袖修孔
103	TON-1-1583	"	"	9	暗黄灰褐色	"	ヘラナデ	ヘラナデ	
104	TON-1-213	"	深鉢側部	9	灰褐色	"	柱 目 板目(?)		
105	TON-1-1557	"	"	9	"	"	柱目・ヘラナデ	ヘラナデ	
106	TON-1-2007	"	鉢 脊 部	10	暗赤褐色	"	柱 目	柱目・ヘラナデ	
107	TON-1-2268	"	"	8	"	砂粒・雲母	"	ヘラナデ	
108	TON-1-1986	"	"	9	灰褐色	砂粒・雲母・石英粒	柱 目	柱 目	
109	TON-1-48	"	"	8	黑褐色	砂粒・石英粒・少雲母	柱目・ケンマ	ヘラナデ	
110	TON-1-372	"	"	9	赤褐色	"	柱目・ケンマ	柱目・ケンマ	表面に月
111	TON-1-2244	"	"	8	暗赤褐色	砂粒・雲母	条斑(クテ)	ヘラナデ(ヨコ)	
112	TON-1-44	"	"	8	"	"	ヘラナデ	ヘラナデ・ケンマ	
113	TON-1-1405	"	"	7	黑褐色	"	柱 目	柱 目	
114	TON-1-1716	"	"	8	"	砂粒・石英粒・雲母	貝殻条斑	ヘラナデ	
115	TON-1-2204	"	鉢 口 返 部	8	暗赤褐色	砂粒・石英粒	ヘラナデ	ヘラナデ	幾何文
116	TON-1-1904	"	鉢 口 横	10	"	"	"	"	
117	TON-1-1268	"	"	10	"	"	"	"	上と同一器体か 沈縞文
118	TON-1-2012	"	鉢 脊 部	8	暗褐色	砂粒・石英粒・雲母	"	"	
119	TON-1-2236	"	鉢 底 部	12(底)	赤褐色	滑 石	指標圧・ヘラナデ		
120	TON-1-2156	"	"	13(?)	褐灰色	"	"	"	スス附着
121	TON-1-2282	"	"	10(?)	"	"	指標圧・ケンマ	柱目・ヘラナデ	
122	TON-1-695	"	"	16(?)	"	"	"	"	ヘラナデ
123	TON-1-1754	"	"	9(?)	褐灰色	"	ヘラナデ	"	スス附着
124	TON-1-221	"	"	17(?)	暗赤褐色	砂粒・雲母・石英粒			
125	TON-1-672	"	"	15(?)	暗赤褐色	"			多孔質でもらい
126	TON-1-673	"	"	15(?)	赤褐色	"			
127	TON-1-2108	"	"	18(?)	淡褐色	砂粒・雲母・石英粒	ヘラナデ	ケンマ	
128	TON-1-219	"	"	14(?)	黄褐色	"			ざらざらしている
129	TON-1-425	"	"	12(?)	赤褐色	"	ヘラナデ・ケンマ	ケンマ	底にスス
130	TON-1-1275	"	"	9(?)	淡褐色	雲 母	柱目・ヘラナデ		
131	TON-1-368	"	台 状	10	"	砂粒・雲母	ヘラナデ	ヘラナデ	底部欠損
132	TON-1-242	"	鉢 底 部	11(底)	赤褐色	砂粒・雲母・長石	ヘラナデ・ケンマ	"	
133	TON-1-2019	"	"	10(?)	暗赤褐色	砂粒・石英粒・雲母・長石	ヘラナデ	"	
134	TON-1-98	"	台 状	12	赤褐色	"	"	"	底部欠損
135	TON-1-808	"	"	8	淡黄灰褐色	砂粒・雲母・長石	ヘラナデ・ケンマ	指標圧・ヘラナデ	沈文・幾何文
136	TON-1-1146	"	"	11	赤褐色	"	ヘラナデ	ヘラナデ	沈文・磨削繩文
137	TON-1-894	"	鉢 底 週	10	淡褐色	"	ヘラナデ・ケンマ	柱目・ヘラナデ	スス附着

3 福岡県教育委員会「九州横貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ」1977

4 田中良之「中期・高式系土器の研究」古文化談叢 第6集所収 1979

5 前川成洋「九州縄文土器の諸問題」九州縄文文化の研究 1979

6 福江市教育委員会「白浜貝塚」福江市文化財調査報告書 第2集 1980

7 本田道輝「市米式土器」縄文文化の研究Ⅳ 縄文土器Ⅱ所収 雄山閣 1981

8 田中良之「磨削繩文土器伝播のプロセス」古文化論集所収 1982

9 松永幸男「熊本遺跡出土の鐘ヶ崎式系土器について」古文化談叢 第11集所収 1983

- 10 五和町教育委員会「沖ノ原遺跡」1984
 11 諫早市教育委員会「有吉貝塚」諫早市文化財調査報告書 第5集 1984
 12 北九州市教育文化事業團埋蔵文化財調査室「下吉田遺跡」北九州市埋蔵文化財調査報告 第39集 1985

4. 第一次調査出土石器

(Fig. 27~34, PL 13~18)

一次調査出土の石器は、土器と同様TP 1出土のものを主体に取り上げて報告するものとする。從って旧石器時代の遺物 (Fig. 27) を除くものは、TP 1出土の土器の有り方から、鍾ヶ崎式土器に伴うものとして考えてよいであろう。

(Fig. 28~31) は、剝片石器・石核等を扱った。

石器は総数32点出土したが、実測図として27点を掲載した。9~30に示した剝片鐵は、山土総数22点と3~8のような通常の加工を施した石器総数10点を上回り、縄文後期の他の遺跡の有り方と同様な傾向にあると見てよいであろう。剝片鐵9~30の中には、9~11のような周辺加工を施したものや、24のように局部的に磨くなどの作業を行うものなどがある。剝片鐵といふ極めて完成された素材獲得段階を持ち得た時期においても、その範囲から逸脱する、いわば亜剝片鐵とでも言えるようなものが存在することは、当遺跡二次調査出土の石器の中でも看取できる。剝片鐵と共に注視されているのが34~40に見られる、つまみ形石器である。資料はすべて打面部付近で折り取ったもので、折断面は長楕円形を呈する。その他に、33・34の石盤、41~44の形器、及びスボールなど、西北九州における縄文後期の石器組成の主なものは只備している。45~67は、主な縦長剝片、使用痕ある剝片などを取り上げたが、遺物のほとんどは不定形剝片で、縦長剝片の絶対数は少數である。一つには縦長剝片という素材自体は、石器として加工され、残存する剝片は、石核の調整の際に生じた不定形の剝片が多くなるという見方もできよう。石核については、この時期の遺跡においては同様なことであるが、良好な縦長剝片石核は認められない。69については両端に打面を設け、上下から剝片剝離を行っており、両設打面石核とし捉えられる資料である。

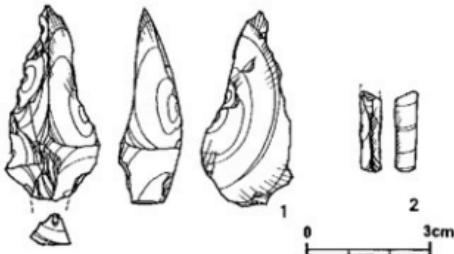


Fig. 27 一次調査出土土器実測図 (2/3)

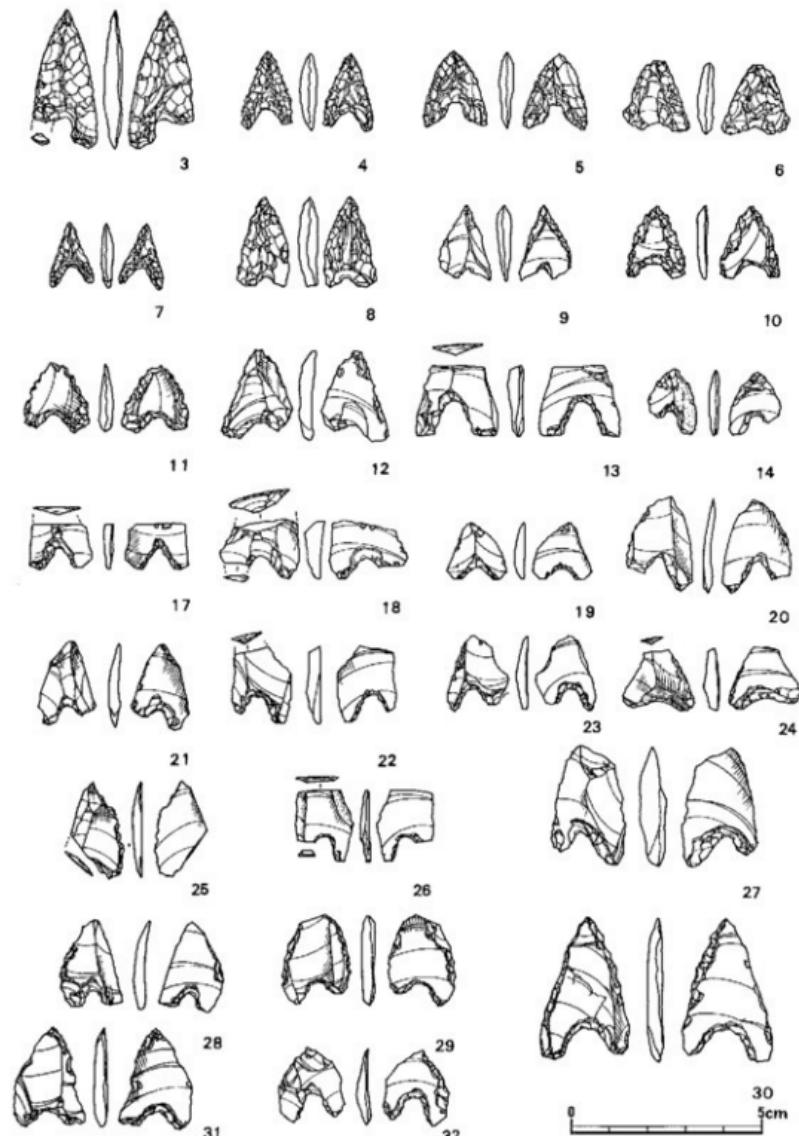


Fig. 28 - 一次調查出土土器實測圖 (2 / 3)

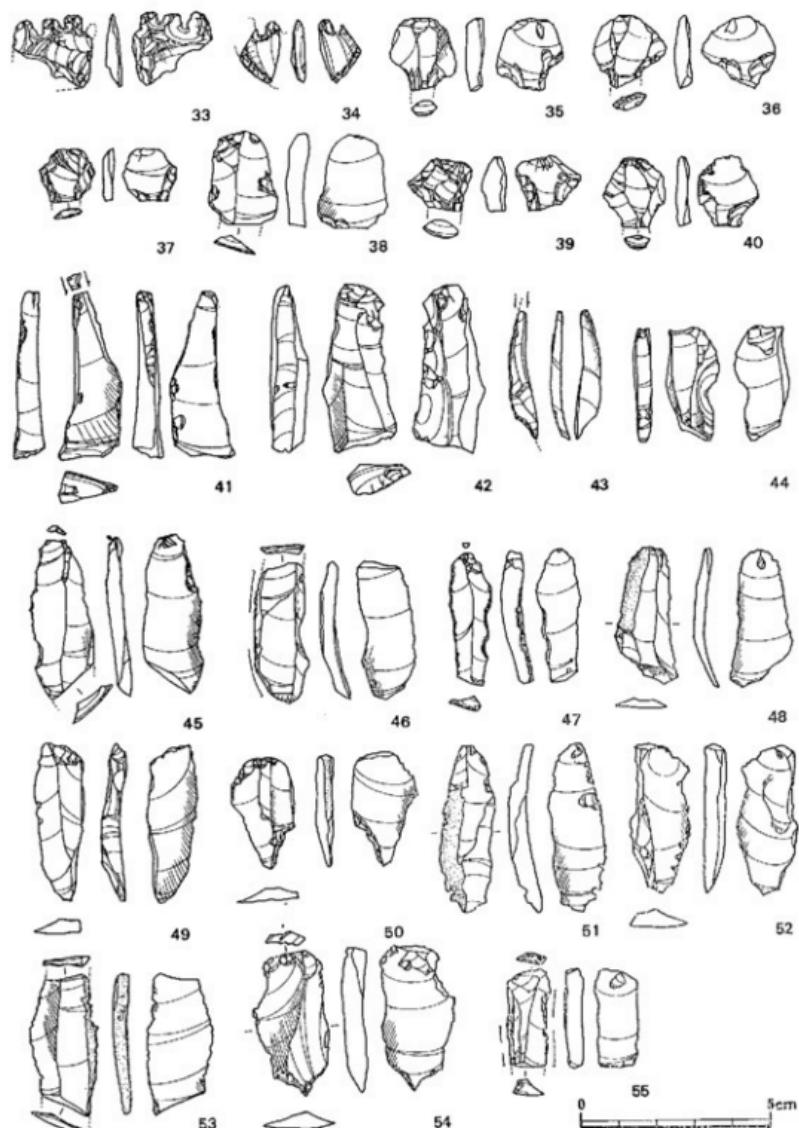


Fig. 29 一次調查出土土器測圖 (2/3)

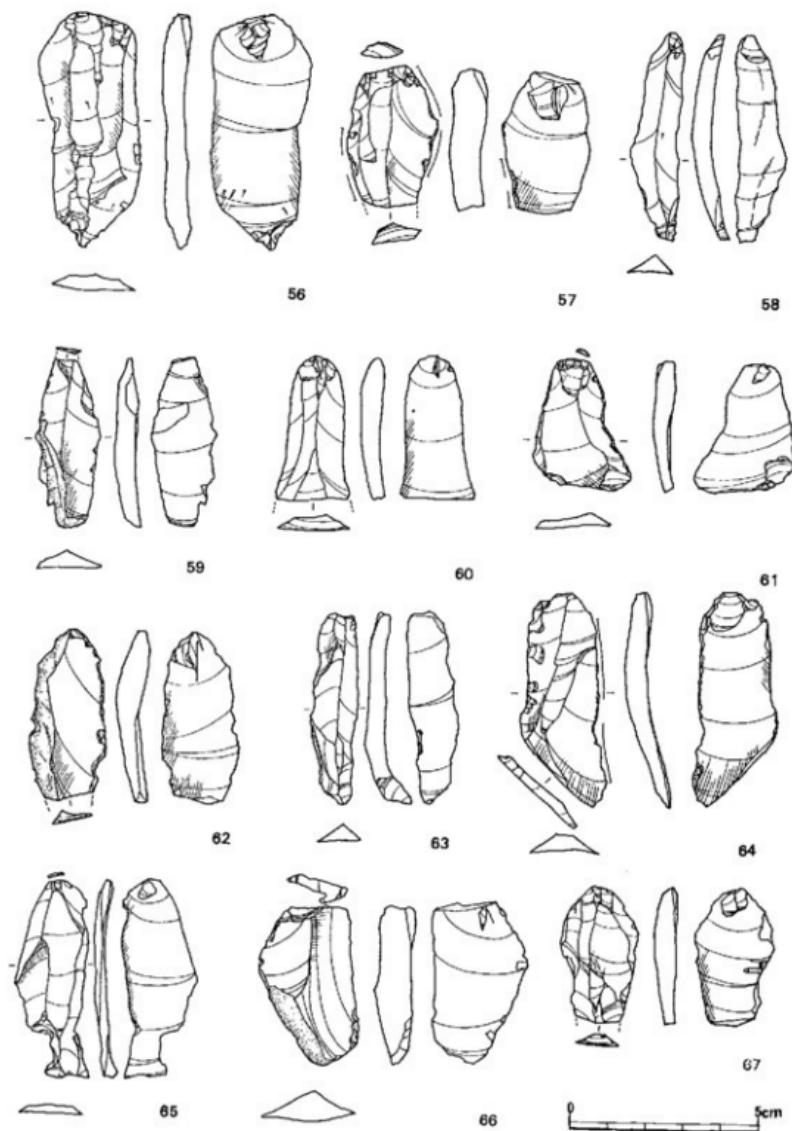


Fig. 30 一次調查出土上器實測圖 (2/3)

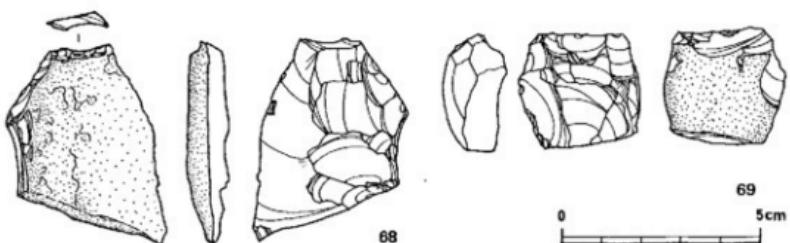


Fig. 31 一次調査出土石器実測図 (2/3)

石斧 (Fig. 32.P L17)

殿崎一次調査での石斧の出土は、10点の出土をみる。図示したのは5点であるが、磨製石斧1点、打製石斧4点である。蛇紋岩、玄武岩、凝灰岩があり、石質は豊富である。10cm内外の比較的小形のものがほとんどで、刃部も片刃状のものである。以下計測表を参照。

削器・搔器 (Fig. 33-75, 76)

1は削器で表裏面共に側縁部より粗い2次加工が施されている。2は搔器で部厚く、素材剥片の打面部はそのまま、他は表裏面共に2次加工を施している。共に安山岩製。

礫器 (Fig. 33-77~80)

形態的にI~IV型に分類される。礫に2次加工を施し、尖頭状の突出部分を作り出すものI型。礫の一端に2次加工を施し、凹み部分を作り出すものII型。円礫に2次加工を施したもので、I・II型程に形態が齊一性をもたないものIII型。以上でI型は尖頭状礫器とII型は双角状礫器と呼称されている。

I型3点、III型2点の計5点出土。

笠状石器 (Fig. 33-81)

遺跡の中で特徴的な石器の一つである。形状的に刃部の両端が張り出し、逆V字形を呈す。2次加工は刃部および側縁部に表裏面より施し、鋭利な刃部を作り出している。

尖頭状石器 (Fig. 33-82, 83)

7cm内外の小形で、石器の表裏面に縁辺より2次加工を施して先端部が尖るように作り出したもの。断面が菱形状を呈す。8は玄武岩、9は安山岩製で総数2点出土。

敲石 (Fig. 34-84, 85)

拳大位の安山岩製で、器種の長径部分の両端に数次の打撃痕が残る。6点出土。

石錘 (Fig. 34-86~89)

拳大位の安山岩、玄武岩の扁平な礫を利用し、石器の2次加工が器種の長径部分にあるものA、短径部分にあるものB、その他をCと加工部位から分類した。Aは5点、Bは3点、Cは2点と計10点が出土。特に12は器表面に縁を巻いた部分が磨滅して凹地状を呈す。

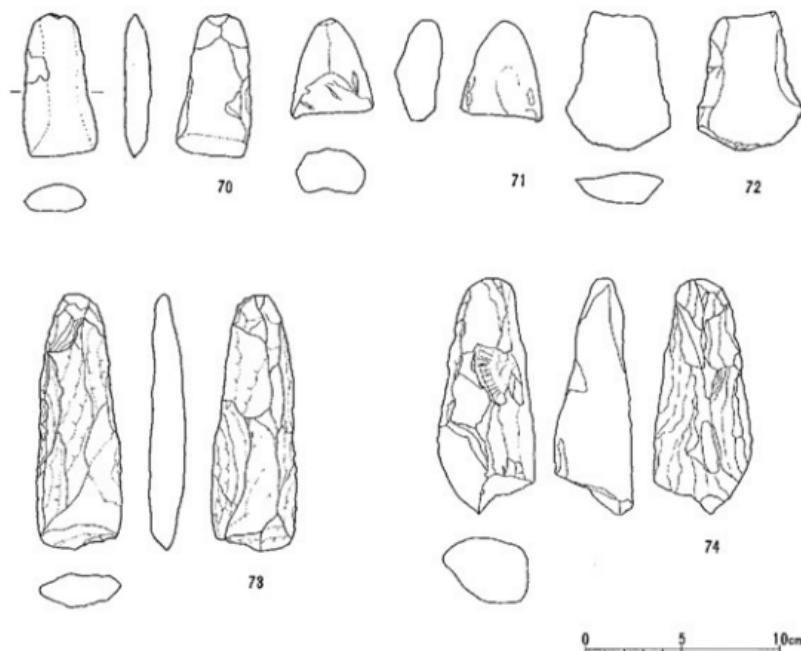


Fig. 32 一 次 調 査 出 土 石 器

Tab.5

番号	高さ 幅 厚さ mm	石質	特徴	備考
70 1-250	2.5 1.4 0.85	蛇紋岩	短錐形。小形で扁平な砸を使用。全体的に研磨痕。直刃で比較的丁寧に仕上げられている。刃部に鍋が認められる。	摩製石斧
71 1-819	2.5 0.9 0.8	玄武岩	先端部のみ残存。	打製石斧
72 1-959	2.2 4.6 0.75	玄武岩	全周にわたって剥離を行い錐形。使用により片面剥離蛤刃、刃部の一部を欠損。	打製石斧
73 1-342	12.3 1.1 1.0	凝灰岩	短錐形。全般的な形状は整えられており、刃部は両刃である。刃部の一部欠損。	打製石斧
74 1-128	11.0 4.9 0.4	玄武岩	断面は円形を呈する。自然面を残し、粗い作りである。	打製石斧

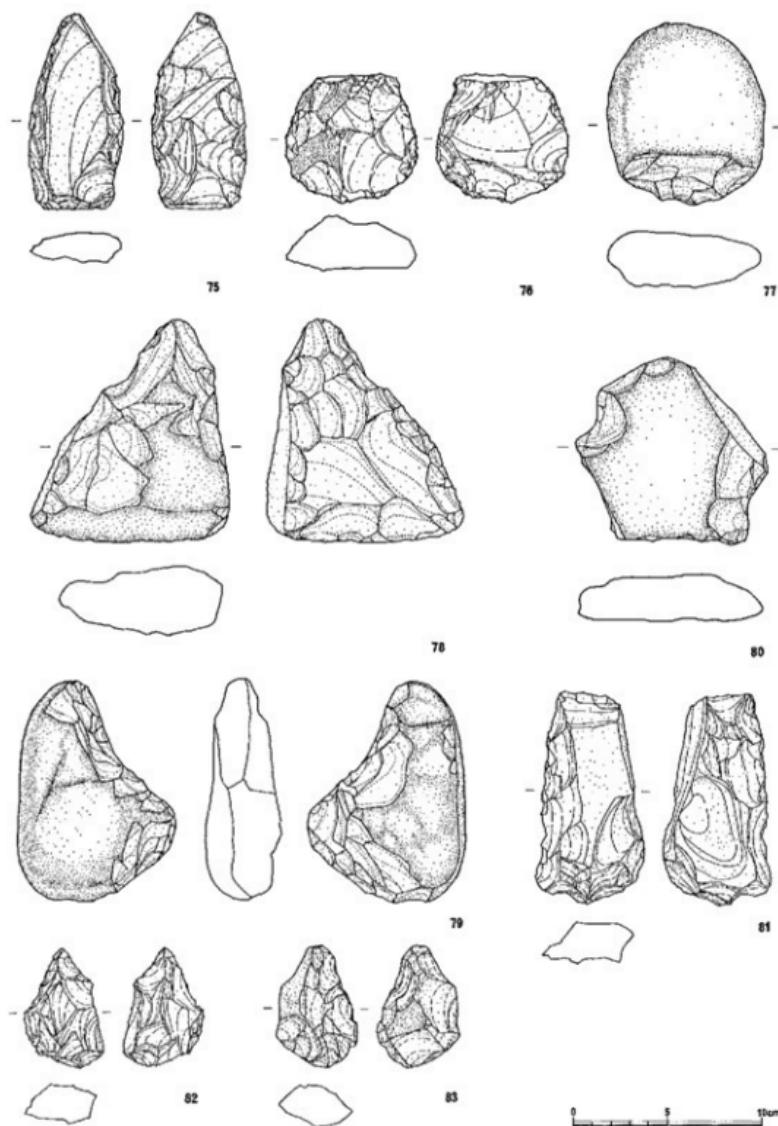


Fig. 33 — 次 調 查 出 土 石 器

第一次調查

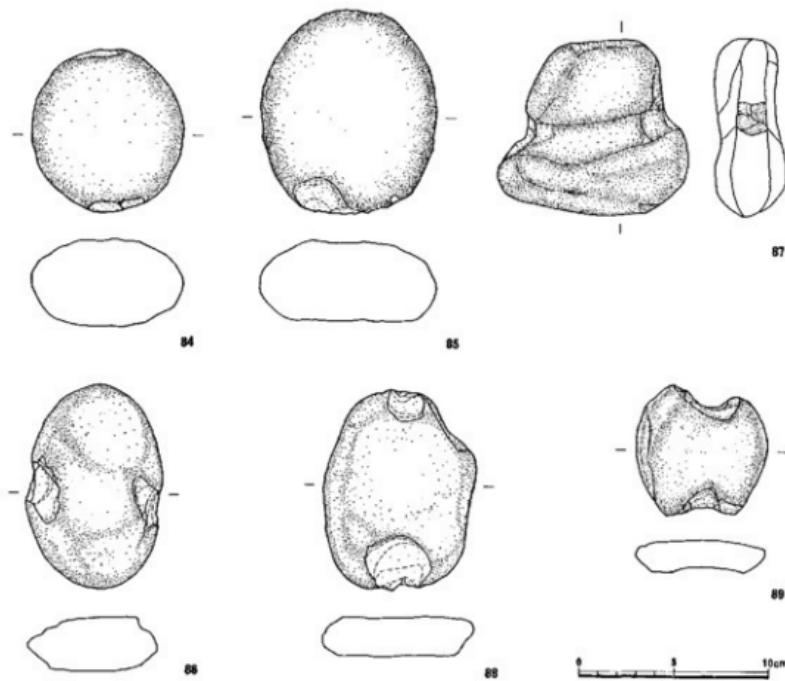
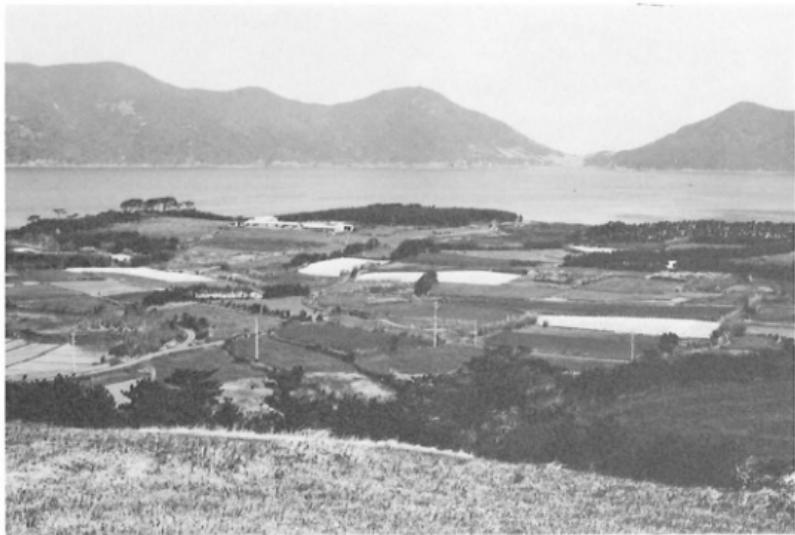


Fig. 34 一次調査出土石器

Tab. 6

特 徴 番 号	出 土 地 点	出 上 場 所	器 種	石 材	形 態 分 類	計 測 値 (cm · g)			備 考
						全 長	最 大 巾	厚 さ	
33.75	TP-1	II	削	碧玉岩		10.35	4.95	1.60	0.08
76	TP-1	#	琢	#		6.95	6.95	2.95	0.15
77	TP-1	#	鑿	碧玉岩	圓盤	9.58	8.24	2.94	0.33
78	TP-1	#	#	花崗岩	I型	11.55	10.40	3.55	0.49
79	TP-1	#	#	玄武岩		11.71	8.20	3.83	0.34
80	TP-1	#	#	#	III型	10.30	9.34	2.60	0.43
81	TP-1	#	施狀石器	#		11.25	5.65	2.20	0.18
82	TP-1	#	尖端状石器	#		6.35	4.25	2.10	0.05
83	TP-1	#	#	安山岩		6.50	4.35	2.25	0.05
34-64	TP-1	#	敲	石		8.28	7.75	4.58	0.46
85	TP-1	#	#	#		10.67	9.19	4.22	0.65
86	TP-1	#	石	燧	C	9.22	9.66	3.80	0.42
87	TP-1	#	#	#	B	10.77	6.79	3.20	0.36
88	TP-1	#	#	#	A	10.54	7.80	2.59	0.30
89	TP-1	#	#	玄武岩	#	6.81	6.82	1.75	0.11



遺跡遠景(上) 遺跡近景(下)



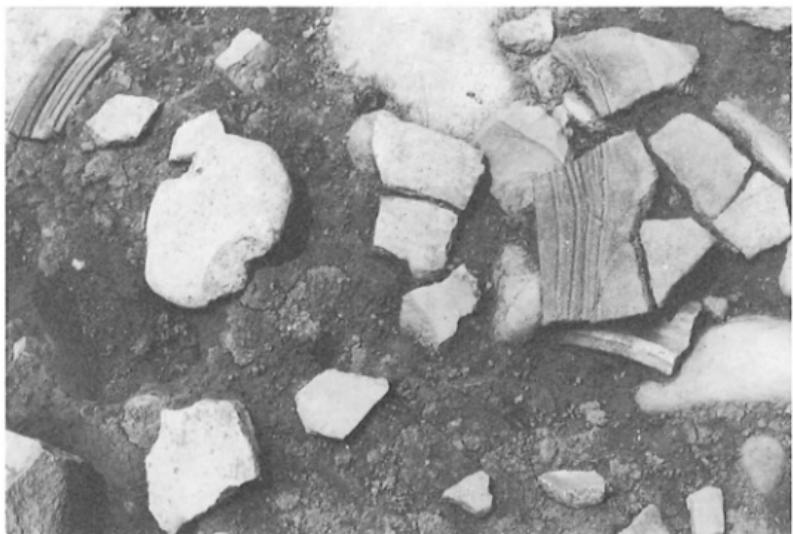
一次調查調査風景



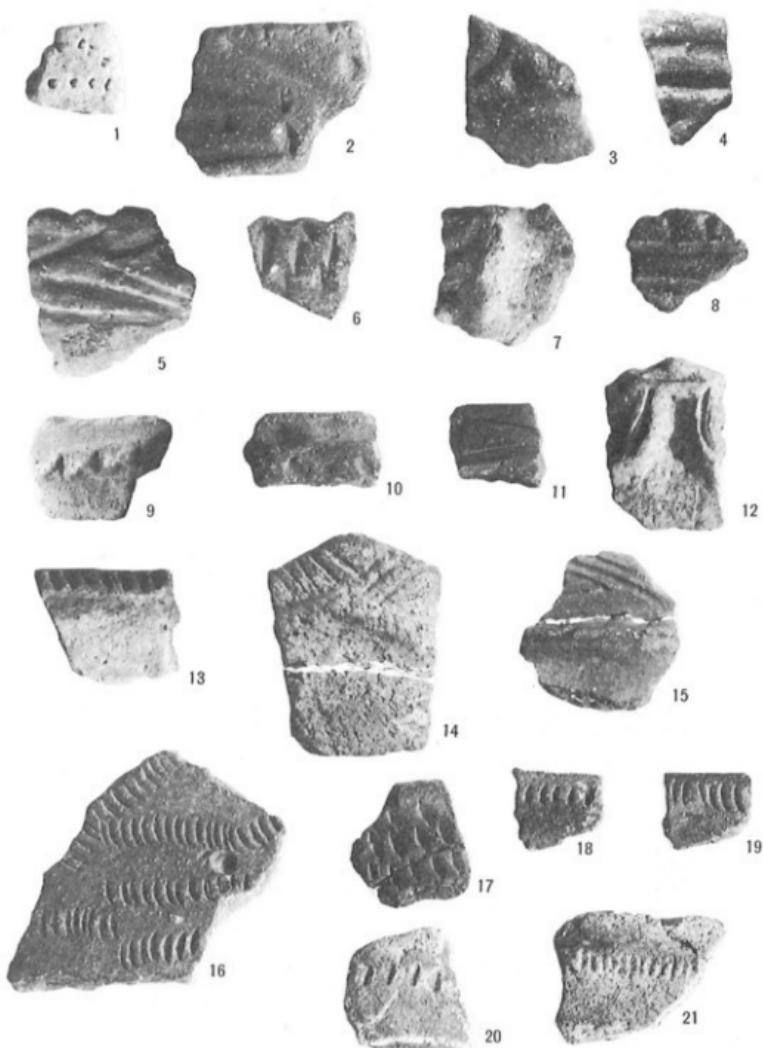
一次調査遺物出土状況 (TP-1)



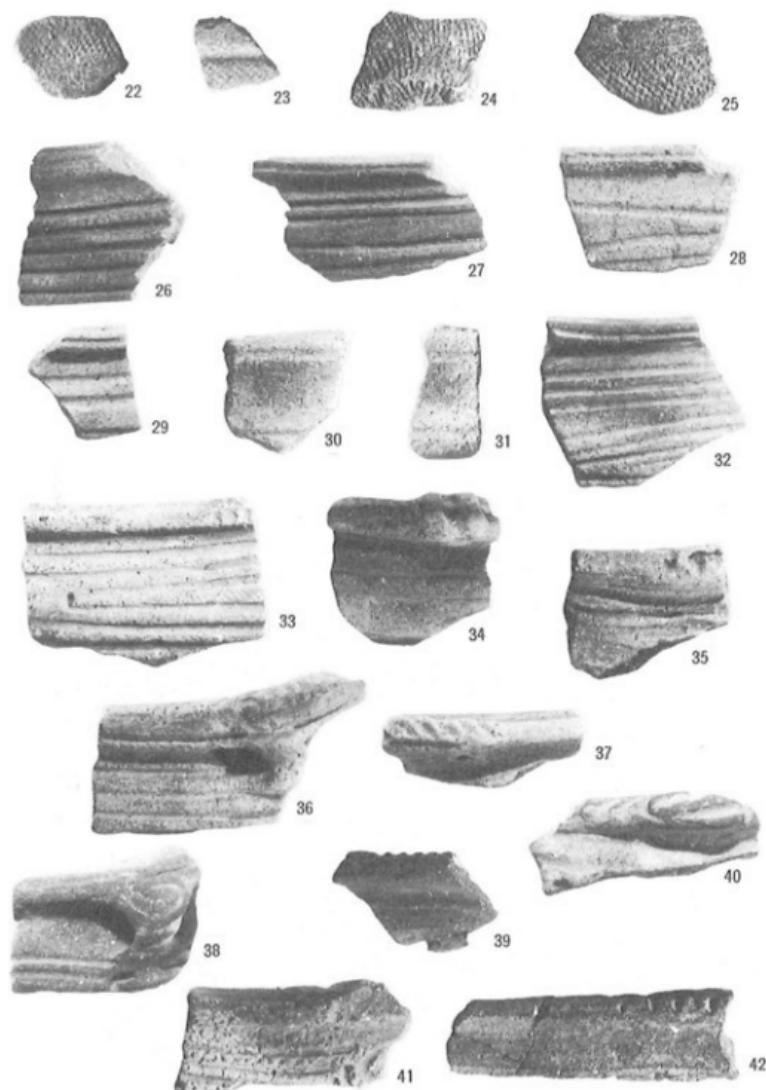
一次調査遺物出土状況 (TP-1)



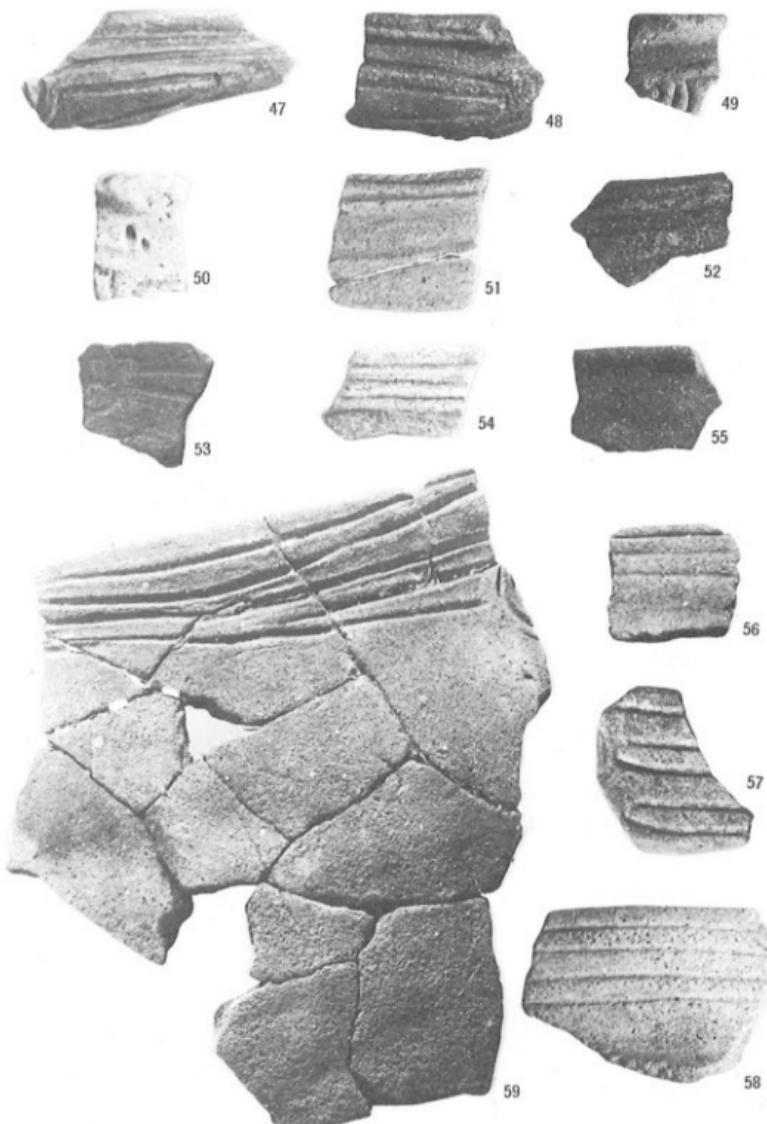
一次調查遺物出土狀況



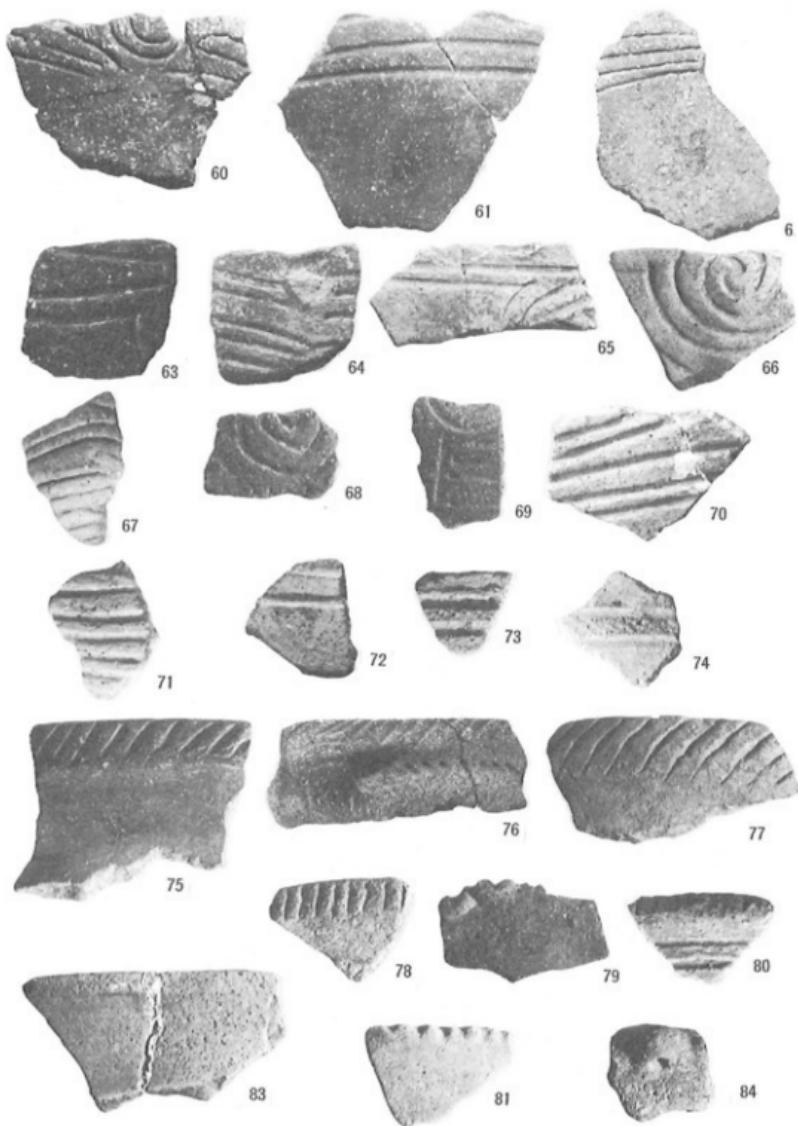
一次調査出土土器 ① (3)



一次調查出土土器 ② (1/2)



一次調查出土土器 ⑧ (32)



一次調查出土土器 ④ (1/2)



86



87



88



89



90



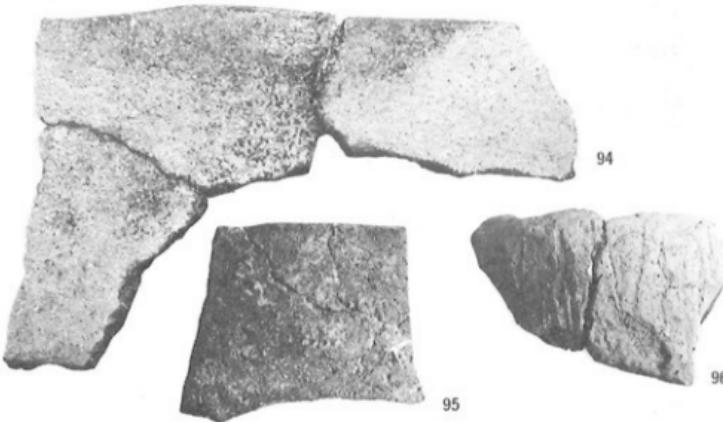
91



92



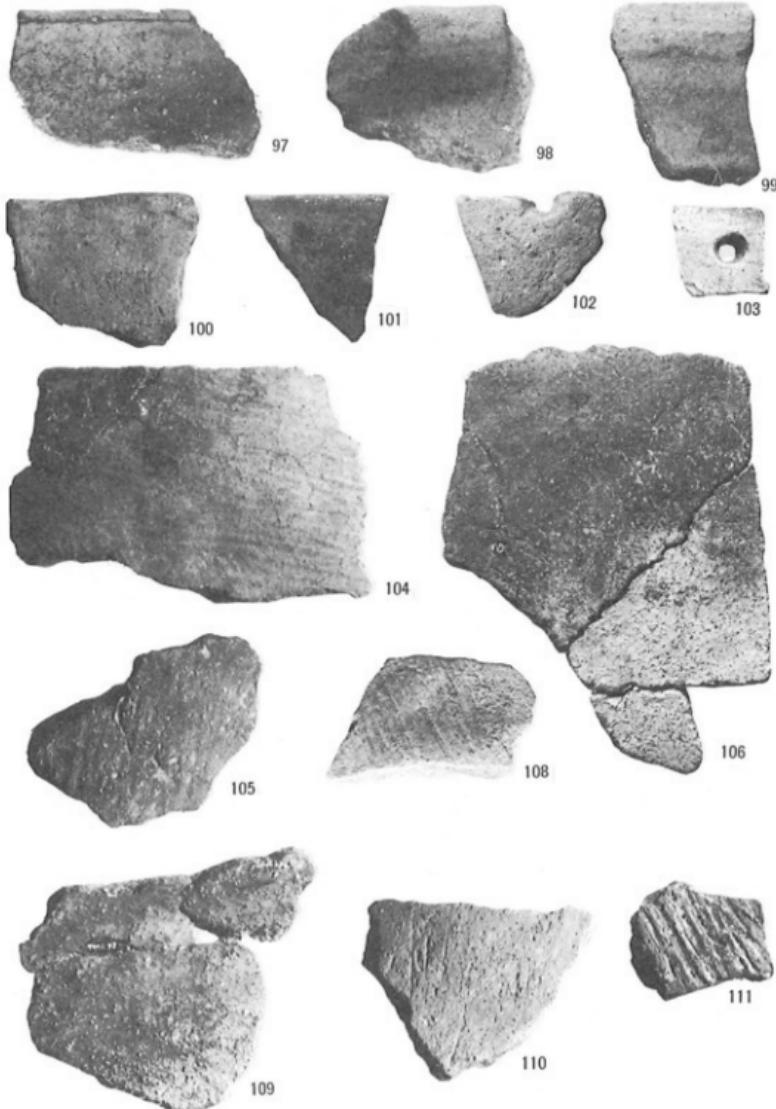
93



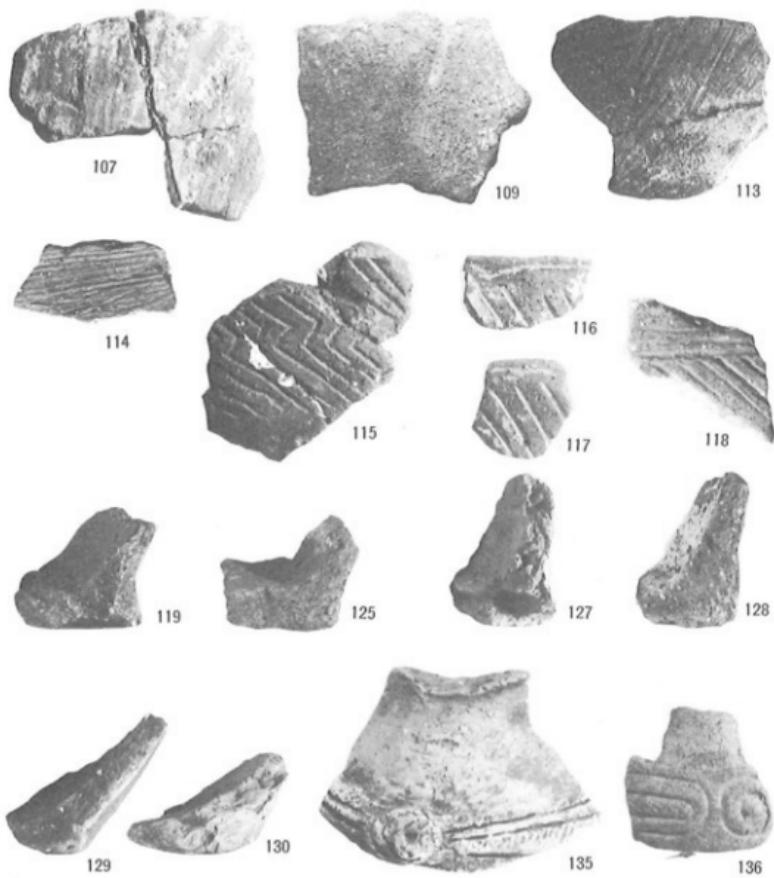
95



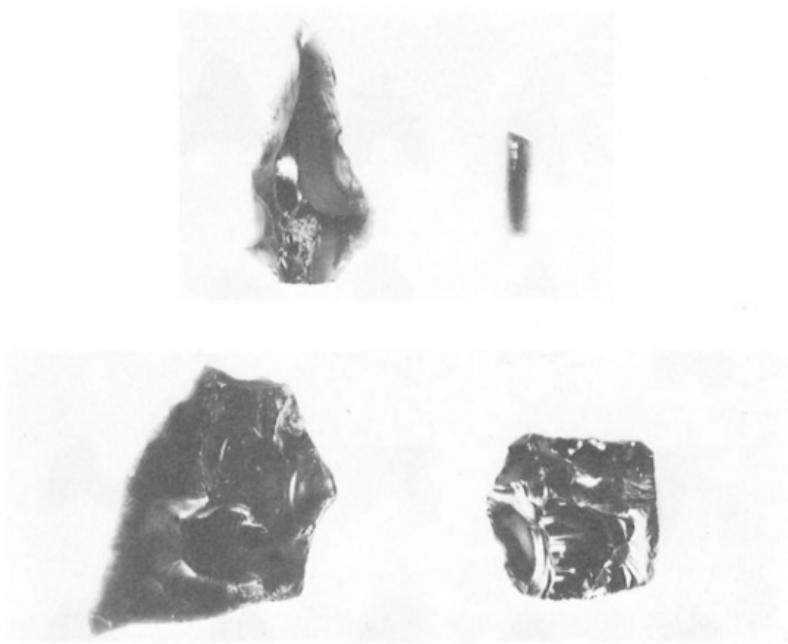
96



一次調查出土土器 ⑥ (1/2)



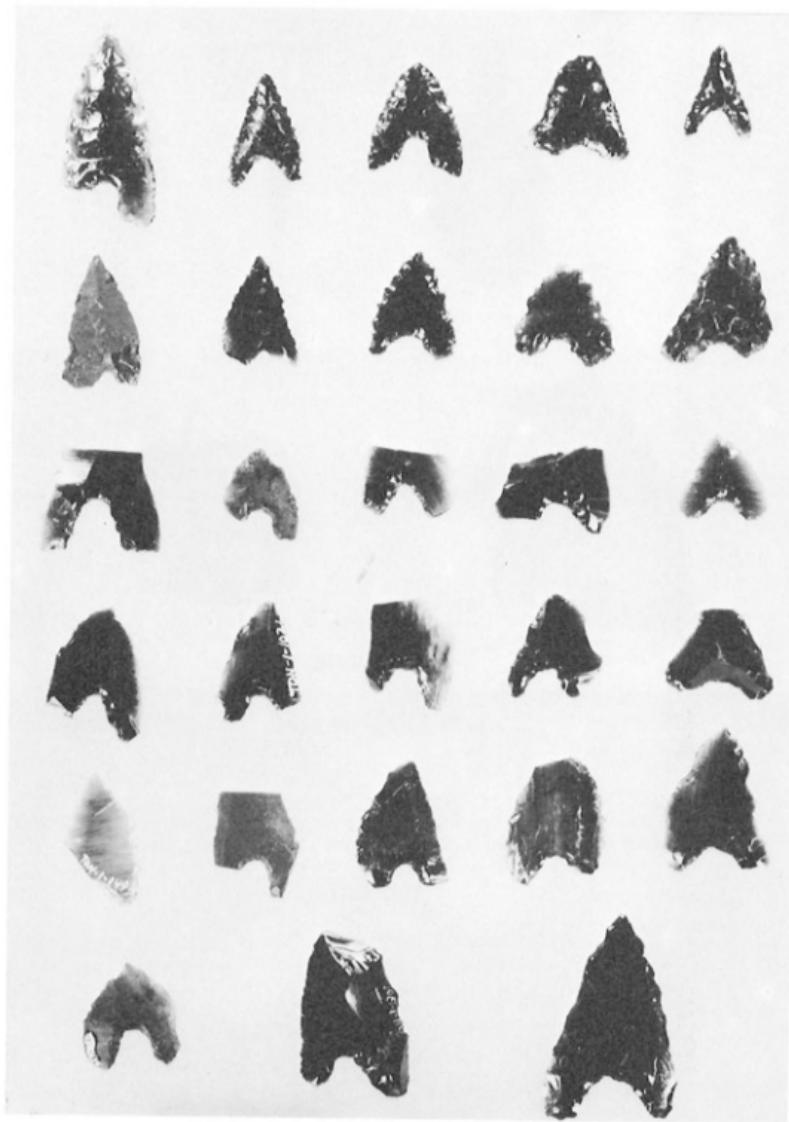
一次調査出土土器 ⑦ (1/2)



一次調查出土石器(4)



石器出土状况



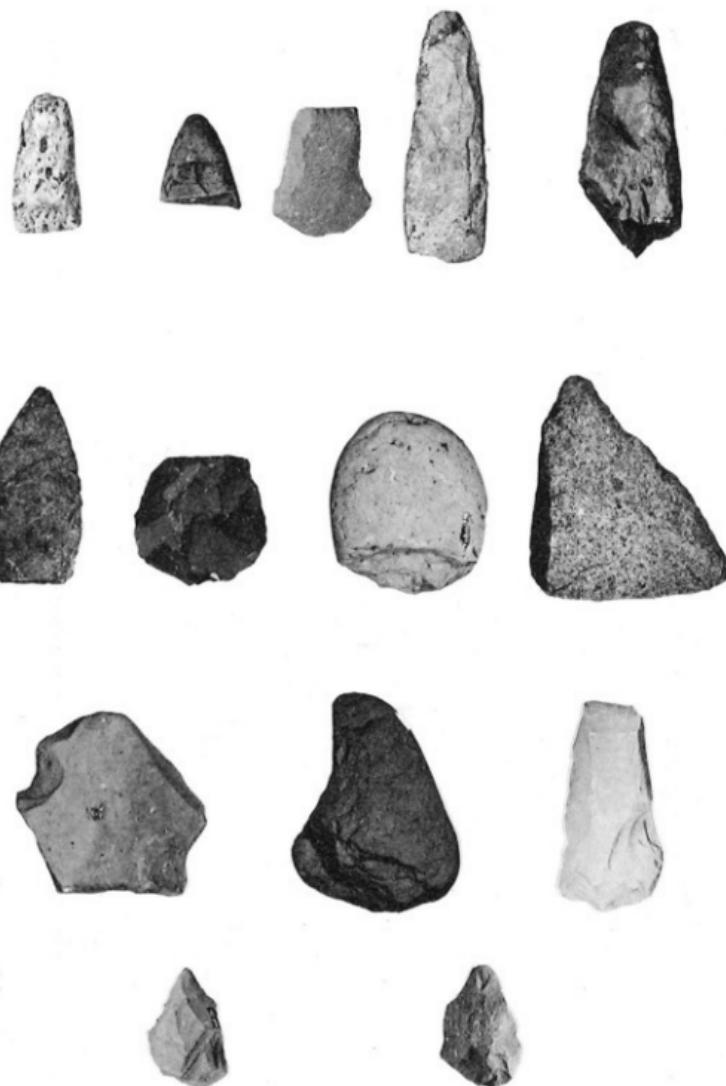
一次調查出土石器(4)



一次調查出土石器(34)



一次調查出土石器(4)



一次調查出土石器(3%)



一次調査出土石器(1/3)



発掘調査状況

二 第二次調査

1. 土層 (Fig. 35, Fig. 36)

第一次調査土層の項でも述べた如く、遺跡北東部と南東部では若干堆積状況が異なる。繰り返すと北東部では基本上層は3層であるのに対して南東部は4つの層に分類し得る。

地形的にはA区が一番高く順に南東に向って低くなりK, L, M区が一番低く、O, P区と又若干高くなる。(Fig. 6) 標高ではA—3区表土面で4m60に対してK—2区表土で3m60とその差は1mである。K—2, K—3区にみられる3・4層はこの低い部分に堆積したもので、特に一面に認められる疊層はこの区域が旧汀線ラインである事と考え合わせると、当時の礫帯と推定する事ができる。K—3区4層を掘り下げる10cm程度湧水ラインに当るものその証左であろう。

2. 遺物出土状況 (Fig. 37)

二次調査における遺物出土状況は、東側に遺物が集中し、西側に希薄という状況にあり、特に東側A～Dの2区に遺物の核を見い出すことができる。土器・石器ともに固まった状況で2層上面から下面まで連続と続き、土器間の上下関係も不明瞭なほどの集中を見せる。西側では散漫とした状況の中で、弥生土器・縄文後期土器などが出土した。特筆すべきことは、遺跡東側には4～5cmの円礫が、H区あたりから西側には角礫が海側に向かって出土したことである。



調査風景

第二次調查

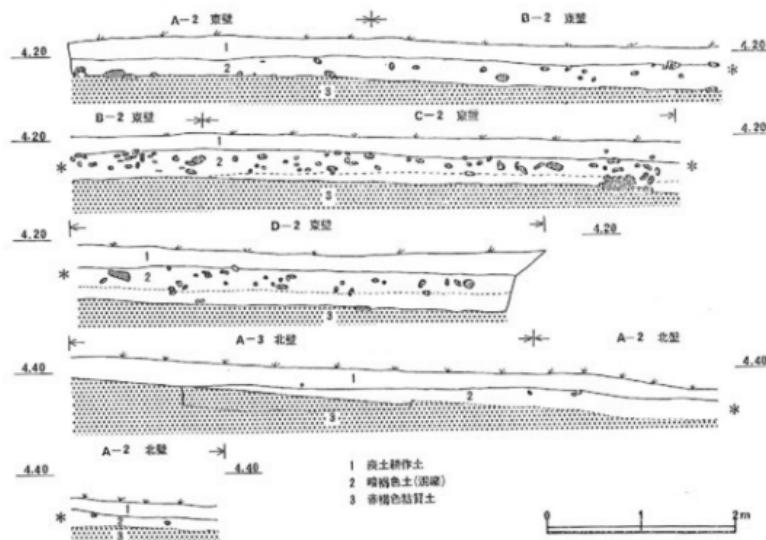


Fig. 35 A-2・B-2・C-2・D-2区東壁, A-2・3区北壁図 (1/40)

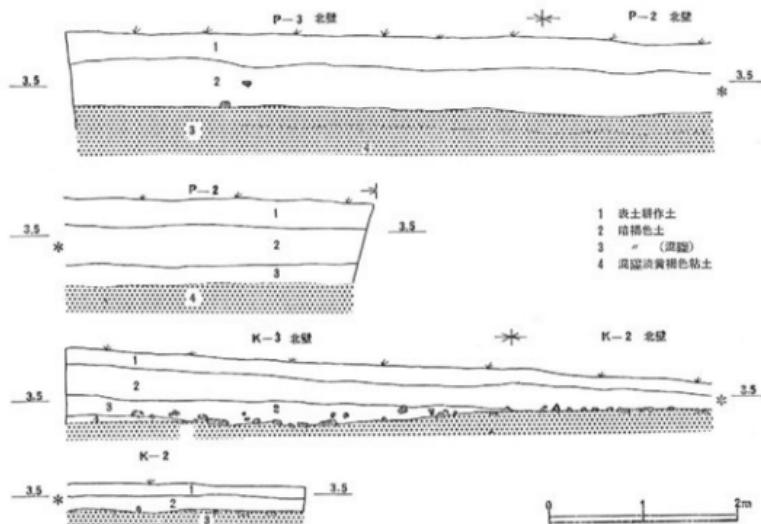


Fig. 36 P-2・3区, K-2・3区北壁図 (1/40)

A B C D E F G H I J K L M N O P

1

2

3

4



Fig. 37 第二次遺物出土狀況圖

3. 第二次調査出土土器 (Fig.38~58, PL.26~37)

所謂歓靖遺跡の中で空港建設にかかる部分の975m²について緊急調査を実施した訳であるが、ドットマップによる遺物取上げ点数は土器片8,974点、石器及び石器片3,869点の計12,843点であった。その出土状況は前項で述べたとおりであるが、遺物を含む層は基本的に1層のみで、その厚さも30~40cm程度であり、層位別による識別が困難であった。従って、ここでも第1次調査出土土器の項と同様まず数種に大別し、しかる後一般的な土器型式の呼称による説明に入りたい。

只、今次の調査では一次調査でみられた貝殻文系土器や無文土器が殆ど見当らないか、又は少なく、この点先で分類したⅢ類貝殻文系土器とⅣ類無文土器を割愛することになる。

第二次調査出土土器は下記の7種に大別される。

I類 阿高式系土器 (a~h)

II類 慶清純文系土器

V類 拗文晚期土器

VI類 底部

VII類 弥生土器

Ⅷ類 その他 (土製円盤)

I類 阿高式系土器

a 並木式土器 (Fig. 38-1~2)

2点出土している。何れも胎土に多量の滑石を含む。1は鉢胴部である。4段にわたって押引きによる連続刺突を行う。2は鉢口辺であろう。凹線と円形刺突による文様構成であるが、かなりローリングを受けている。

b 阿高式土器 (Fig. 38~40)

Fig. 38 は文様構成は基本的に凹点と凹線文の組み合わせであるが、文様が口縁部のみではなく胴部にまで及ぶ資料である。何れも胎土に多量の滑石を含む。3, 4は口唇に深い凹点を施こし、口唇下に曲線による整然とした文様を配する。熊本県阿高貝塚出土資料に近い。5も文様的には上記2例に近いが線が比較的細い。7は口縁を把厚させて3段に凹点をつけ、その下に沈線を配して口縁帯を作出するが、文様は口縁帯にとどまらず胴部にまで至る。凹点、凹線共に深くて明瞭である。9も深鉢口縁である。口唇及び口唇下に2段に凹点を施こし、胴部には凹線文による規律ある文様を配する。内面調整はヘラナデによるが、若干ローリングを受けている為明瞭ではない。10も同様な文様構成をとるが、やはりローリングを受けている為不明瞭な部分がある。

Fig. 38~Fig. 40 の資料は主に凹点文が中心となる。田中氏 (1979) の分類によると凹点文

の形態などから板の下Ⅰ式（阿高Ⅲ式）から板の下Ⅱ式（南福寺式）の資料を含むことになるが、明瞭な差別をつけ難いのでここでは後述する南福寺式とは別に一応阿高式土器として包括しておきたい。胎土には27を除き何れも多量の滑石を含む。

Fig. 38は四点と沈線によって口縁帯を作出する資料である。四点の特徴についてみると、円形か楕円形で断面がU字形を為すもの（16～23, 29, 30）と楕円形で断面がV字形を為す資料（24～35）とに分けられる。この相違は時間的な先後関係として捉えられており、前者は阿高式に、後者はそれ以降に属する例が多いといわれる。^{註3}

21, 22は口縁がゆるく外反する、共に薄手。34は厚手の深鉢で口縁に細長い四点を施こした

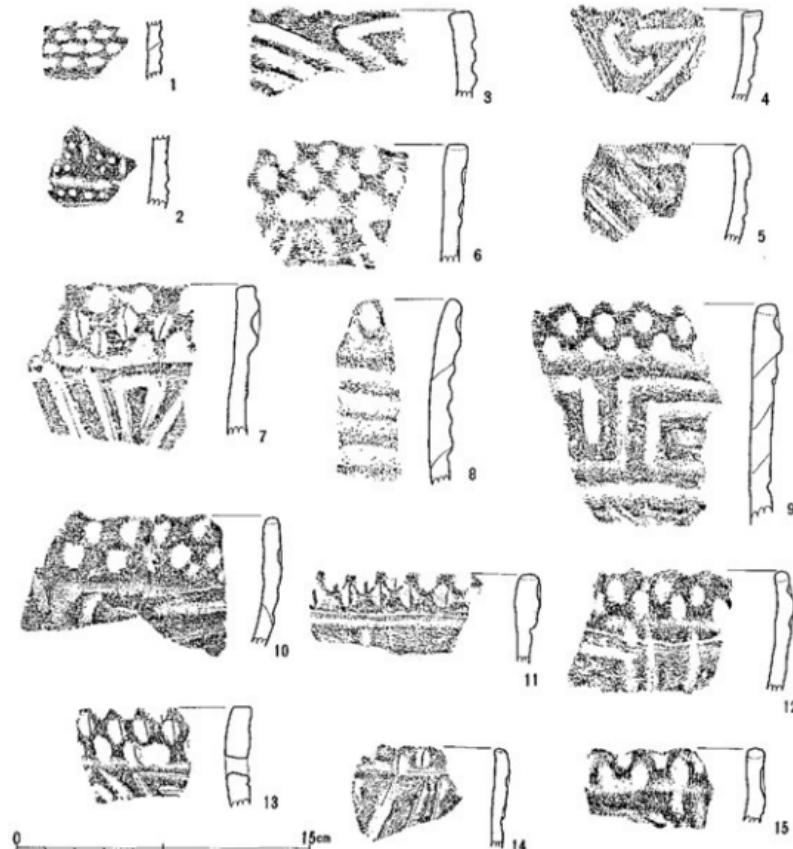


Fig. 38 二次調査出土土器実測図（1/3）

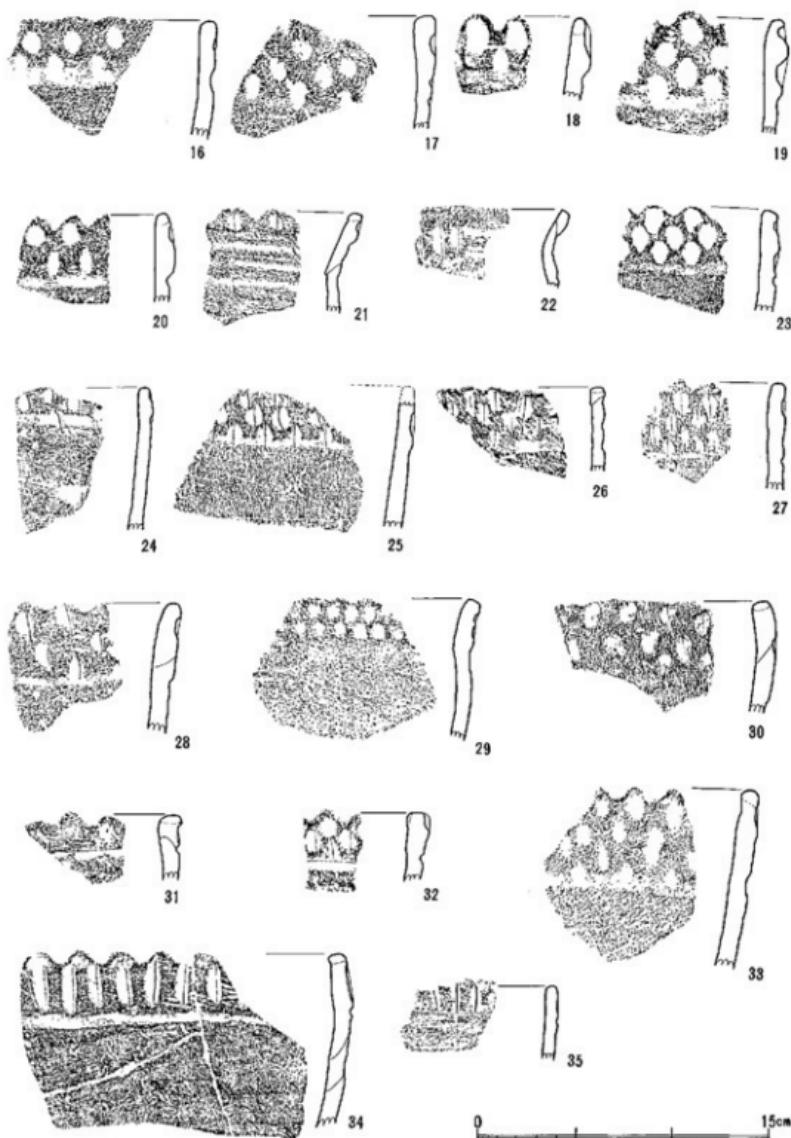


Fig. 39 二次調査出土土器実測図 (1/3)

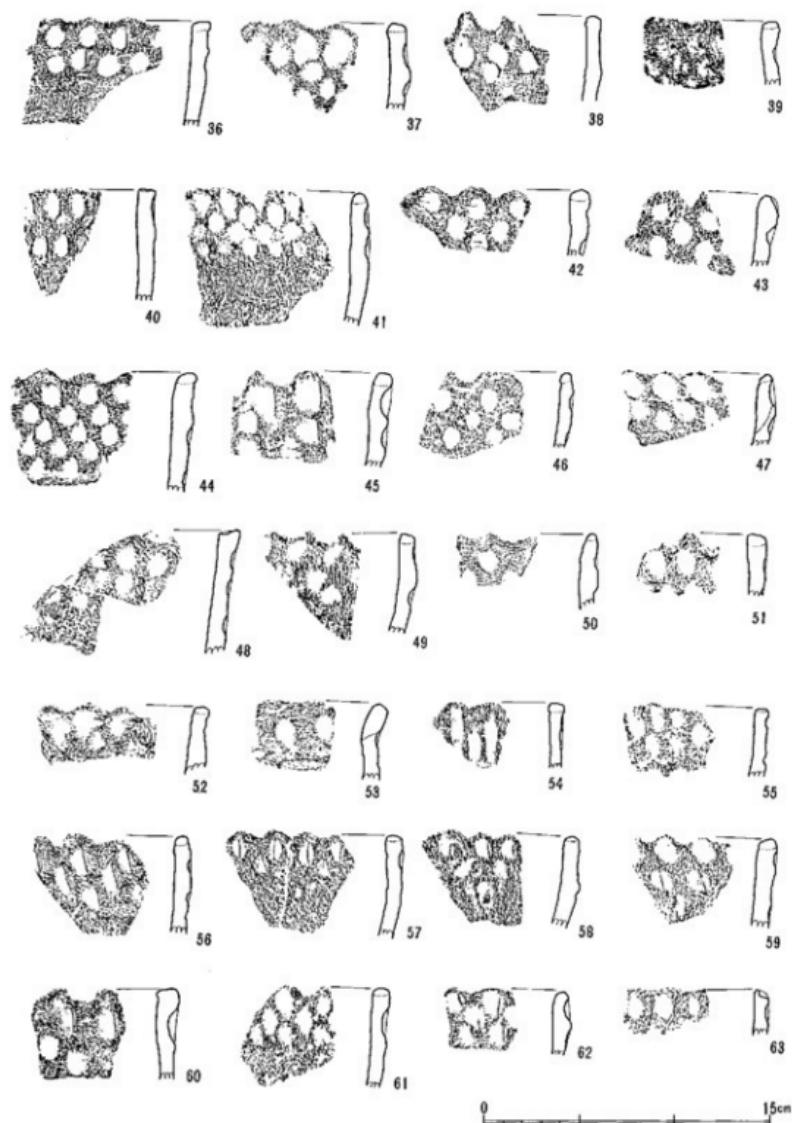


Fig. 40 二次調查出土土器尖洞圖 (1 / 3)

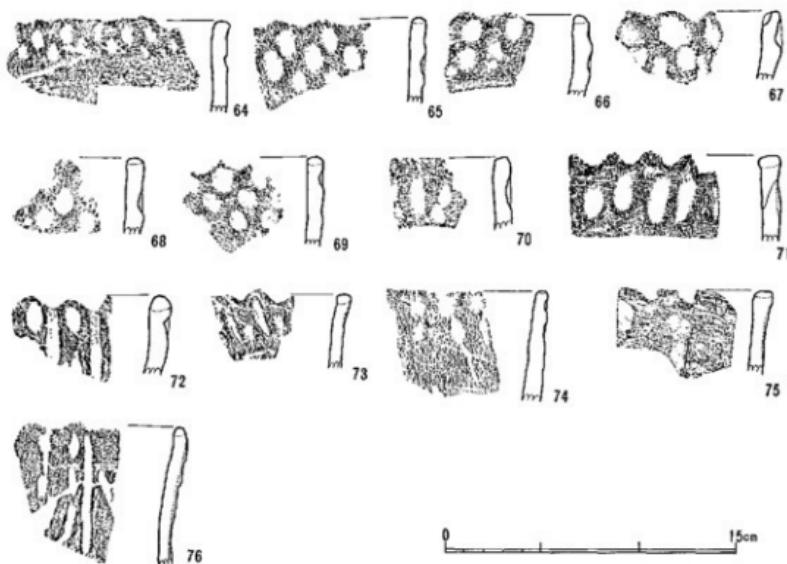


Fig. 41 二次調査出土土器実測図（1/3）

後、口唇部に丸い棒状原体による押圧を行う。器壁は内外面共ヘラナデ調整である。

Fig. 40 は口縁帯の作出が無く口唇部と口縁の凹点のみによって文様が構成される資料である。Fig. 38 と同じく、凹点が円形か楕円形を呈し断面がU字形を成すものと(36~55)、V字形を成すもの(56~63)とに分かれる。胎土には55を除いて全て多量の滑石を含む。

41は口縁に3段の凹点を配する。凹点は浅く力強さに欠ける。器壁は内外面共ヘラナデ調整を行う。

Fig. 41 は Fig. 39 と同じく口縁帯の作出が無く口唇と口縁の凹点のみで器面を飾る資料であるが、凹点の断面がV字形を成すもの(64~69)と凹点が縦に長く凹線が沈線に近いもの(70~76)が見られる。72~76はその顕著な例である。これらの資料の内67, 71, 74はローリングを受けている。

c 南福寺式土器 (Fig. 42)

口縁部に集約された凹線文の文様構成からなる資料をこの型式とする。

先述した如くこれ以外にも、口縁部の凹点の特徴からこの型式に属する資料があると思われるが筆者には識別が困難があるのでここでは省略しておく。

上述した如く、Fig. 42 は何れも短斜線とその組み合わせによって口縁部に文様が集約された資料であるが、凹線によって口縁帯を作出したもの(77~80)と口縁帯の無いものに分けら

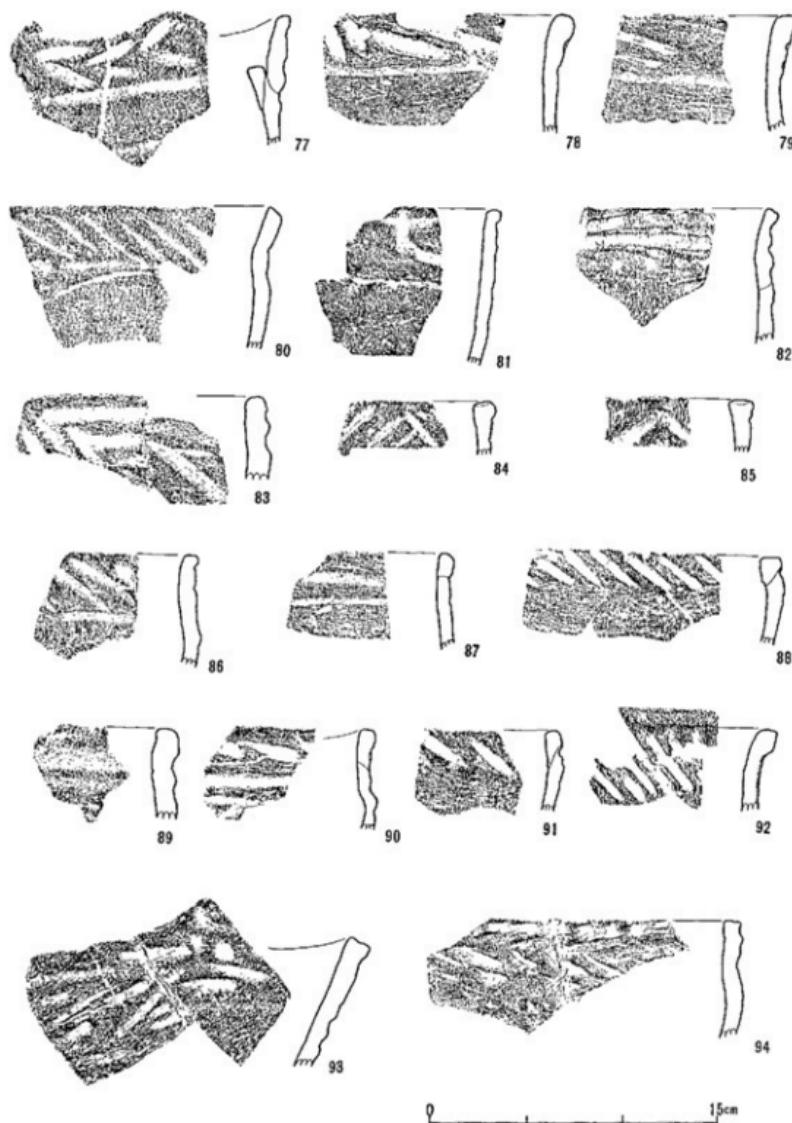


Fig. 42 二次調査出土土器実測図 (1/3)

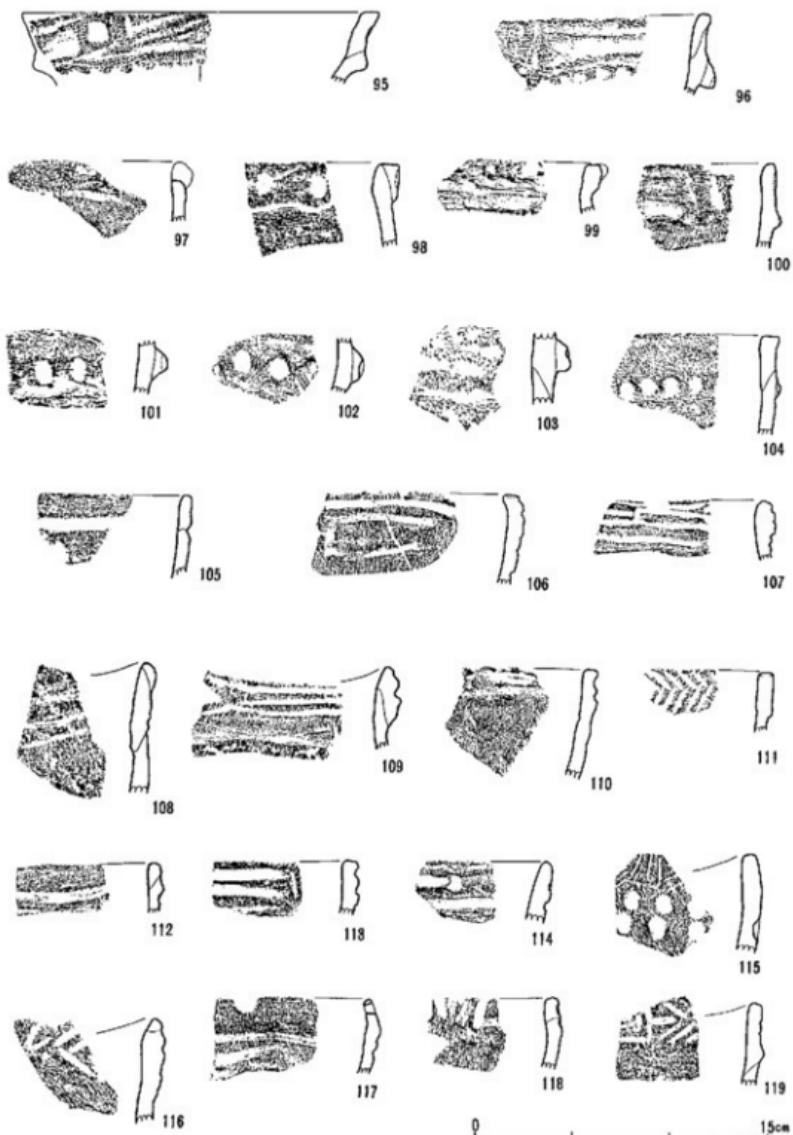


Fig. 43 二次調査出土土器実測図 (1/3)

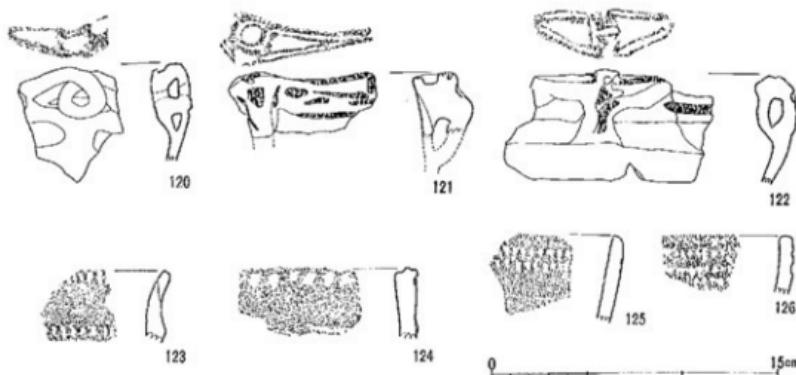


Fig. 44 二次調査出土土器実測図 (1/3)

れる。77は深鉢口縁であるが、単なる波状口縁ではなく装飾的な意味合いが強い。文様は短斜線によって「く」の字を連続して描き、その下方に凹線によって脛部との境を示す。80も深鉢口縁である。凹線によって狭い口縁帯を作り、その部分に平行短斜線文を施す。器壁は内外面共ヘラナデ調整を行う。82は粗製深鉢と思われる。口縁が若干外反する。口唇下に2本の丸い棒状原体による凹線らしきものを施すが、装飾的なものではなく、調整痕をそのまま放置したものと思われる。内外面共ヘラケズリ痕を残す。88は口縁が内凹し、その部分のみに深い平行短斜線を施す。90、93は波状口縁を成す。93は四ヶ所で山形を成すものであろう。文様は直線文の組み合わせであるが、もはや痕跡的である。94は文様が連続した「く」の字文様であるが、ヘラ先状原体によるものか、線自体がやや細くなる。

以上の資料は全て胎土に滑を多量に含む。

d 出水式土器 (Fig. 43, 44, 120~122)

実帶で口縁帯を作出する資料 (95~100, 119) と文様が凹線と異なり沈線によって施されたもの (105~119)、及び装飾的な意向に持つ異形把手をもつもの (120~122) をこの型式に含める。

94は復元口径18.5cmの鉢口縁である。実帶で口縁帯を作出し、実帶上には浅い刻目を施す。狭い口縁帯には円形の刺突文と直線文を配するがローリングを受けている為か線自体明瞭でない。96も95と同一の手法を持つ。実帶上にやはり刻目を施す。98は口縁に幅広の粘土帯を貼付し、その上に断面がV字形に近い凹点をつける。口縁帯以下は無文である。100は鉢口縁であるが実帶上の刻目と口縁帯に鋭利な短斜線を持つ。111や119と合わせて胎土に滑石を入れない資料である。101, 102は鉢口辺であろうが、何れも大きな実帶と実帶上の断面U字形の凹点を特徴とする。103も鉢口辺であるが、実帶の形は台形を為し、その上に横長の凹点を施す。104は実帶が低く刻目も浅い。あるいは後出する御手洗A式に含めるべきかも知れない。

105は口縁に一条の沈線を配するのみで他に文様は無い。106、107は沈線による文様を口縁部のみに集中させる。106には口唇部に刻目を施す。108、109は波状口縁をもつ。109の沈線は細く且つ鋭利であるが、幅が狭い板状原体による施文である。111は口縁外面に段をつけて口縁帯を作出し、その部分に羽状文を連続的に描く。口唇には小さい凹点が認められる。黒褐色を呈し胎土には滑石を含まない。115は山形状の波状口縁を為す。頂上部直下に線刻を描き、その下に2段の凹点文を配する。116も波状口縁であるが、口縁帯には「く」の字の深い沈線を施す。119も波状を為す鉢口縁である。小突帯によって口縁帯を作出し、その部分には沈線による文様を施す。120は鉢口縁であるが、粘土紐を交叉させて口唇と口縁を飾る。口部の上面観は一見小動物の頭を連想させる。121も粘土紐を組み合わせて橋状把手を作り出すが一部欠損する。上面文様は円形刺突文を中心として左右に均一文様を描く。装飾の線は細く鋭い。122も基本的には上記2例と同様である。特に上面観は120と同じモチーフを持つ。以上の3例は何れも胎土に多量の滑石を含む。

e 銚手洗A式土器 (Fig. 44, 123~126)

小突帯文と刻目、及び刺突文からなるタイプをこの型式に含める。

123は口縁に小突帯を貼りつけ、その部分に浅い刻目を施す。124も鉢口縁であるが、口唇下に連続小刺突文を配するのみでその下は無文である。胸部に僅かな突帯が認められるが痕跡的で不明瞭である。口唇部分は元々丸味を持つが、中央部分を残して内側と外側に細い沈線を配する為、結果的にその部分の断面は山形を為す。125も鉢口縁である。口唇下に2段に小さな連続刺突を施す。126も同一文様であるが、この場合は、3段に浅い凹線をひき、その上に刺突を施す。以上の4例は何れも胎土に滑石を含まない。

f 各種把手 (Fig. 45)

127は粘土紐を組み合わせて山形の橋状把手を作り、ヘラ先による深い沈線を加えて文様を構成する。胎土には多量の滑石を含む。

128、129はほぼ同一の手法で橋状把手を作り出す。組み合わせる粘土紐は上面観で横8の字を描く。佐賀県坂の下遺跡、長崎県有喜貝塚など中期末から後期前葉にかけた遺跡に類似資料が見られる。本遺跡では南福寺式から出水式に伴うものである。貝128、129は何れも胎土に滑石を含まない。



Fig. 45 各種把手
(1/2)

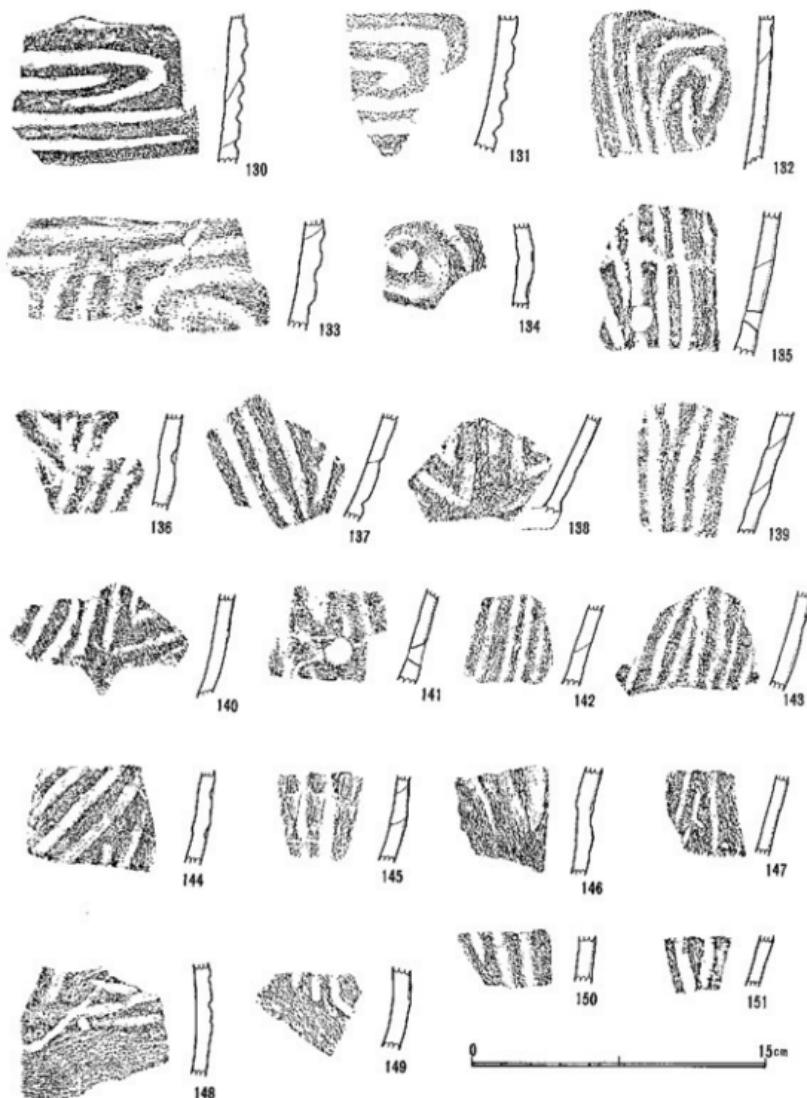


Fig. 46 二次調査出土土器実測図 (1/3)

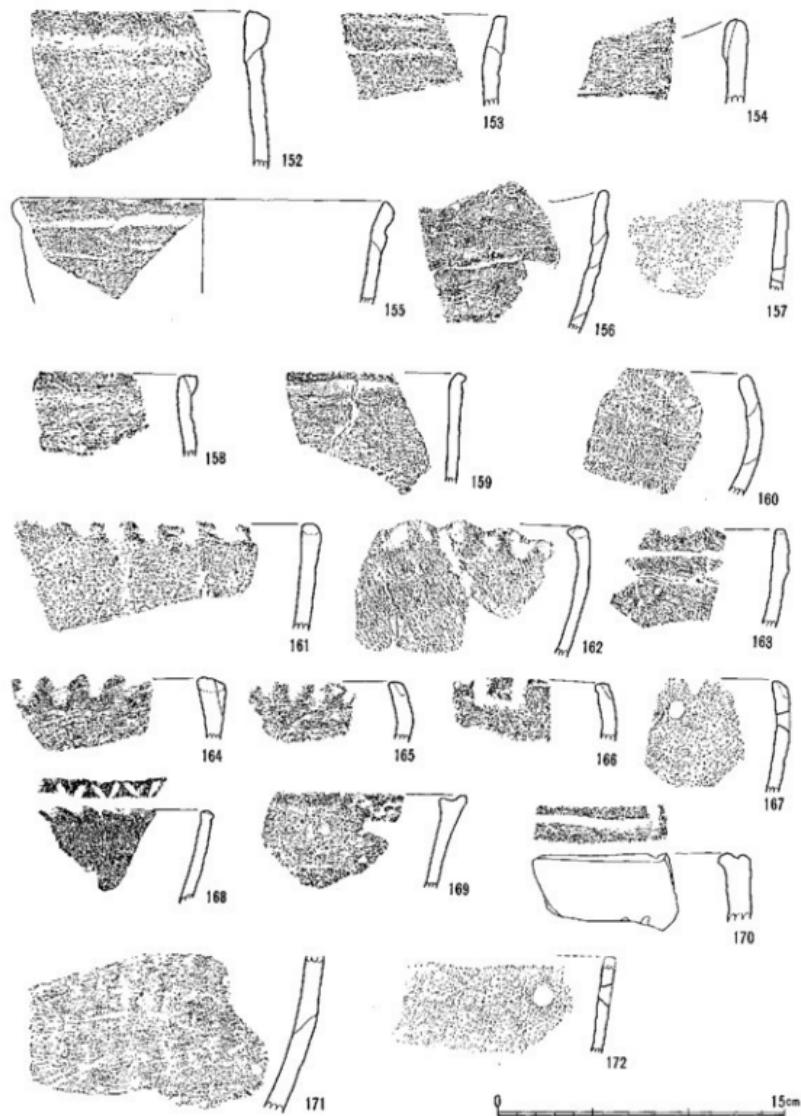


Fig. 47 二次調查出土器物測量圖 (1 / 3)

第二次調查

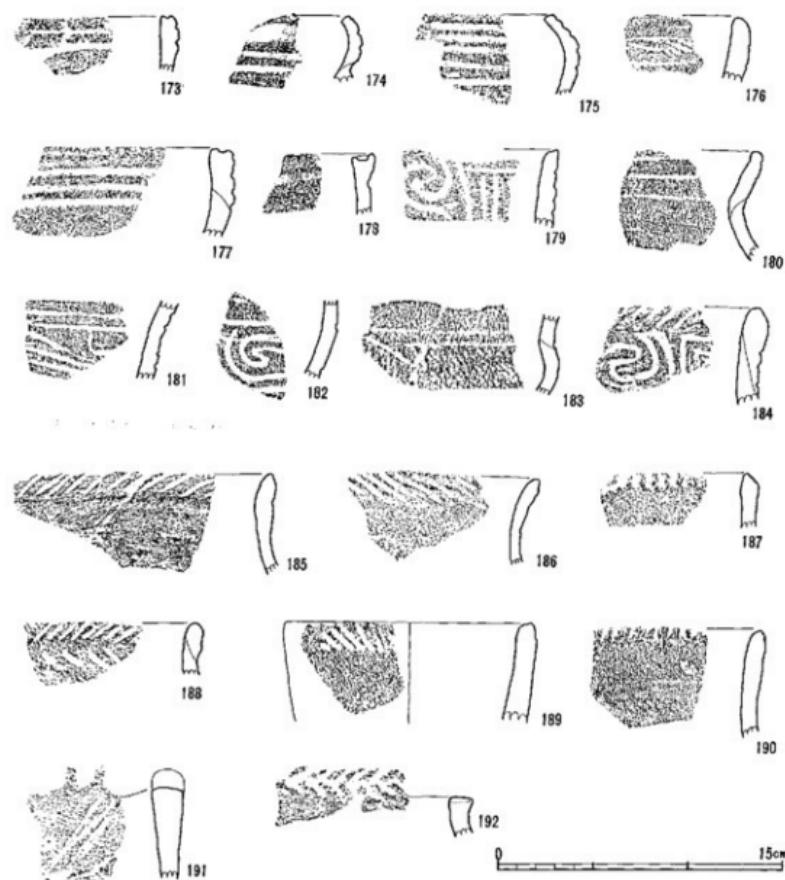


Fig. 48 二次調查出土土器實測圖 (1 / 3)

g 脚部 (Fig. 46)

脚部資料で、胎土に滑石を多量に含み、凹線と沈線によって文様を構成する。破片の数量としては脚部が当然一番多いが、ここでは文様が口縁のみならず脚部にまで及ぶ特徴的な例を中心的に図示する。130, 131は同線を横方向に板彫する共に規格性の強い文様である。Fig. 37-9に対比するものであろう。132は縦方向に蘇手文を有する。133は直線と曲線によって文様を構成する。134は渦文をもつ資料である。135, 138は鉢口辺部である。共に太く明瞭な凹線が底辺まで及ぶ。151は鉢口辺部である。板状原体により断面がV字形に近い凹線を縦に描く。148, 149も鉢口辺部である。この2点は沈線に近い文様が口辺部にのみ限定されている。

以上の資料は130~145, 150, 151が阿高式土器に、その他の資料が南福寺・山水式に属するものであろう。

h 無文上器 (Fig. 47)

ここでいう無文土器とは、胎土に多量の滑石を含むが脚部文様が無い資料で言わば粗製土器の範疇に入る一群であり、口唇に凹点又は刻目があるもの（161~168）、口唇に沈線があるもの（169~170）、そして無文の脚部資料（171~172）に分けられる。

152, 153は口縁を若干把厚させる。器壁調整は縦で、共に粘土の継ぎ目が残る。154は波状口縁で口縁内側に段がつく。155は復元口径19cmの鉢口縁で灰黒色を呈し、ヘラナア調整を行う。156も鉢口縁で波状を為す。器壁調整は縦で指頭痕や粘土の継ぎ目を残す。157は口縁と脚部に2ヶ所の補修孔をもつ。158, 159は直行気味の器形をもつ鉢口縁であるが、口唇部のみ若干外反する。160は内弯する端口縁である。明赤褐色を呈し、内外面共ヘラナア調整を行う。161は大型の深鉢口縁である。口唇外側に凹点を施す。ややローリングを受ける。162は若干内弯する鉢口縁である。口唇部にのみ凹点を施す。163は同様に口唇に凹点をもつが、器壁には指頭痕と調整の為の横線を残す。165~167は全く同色調を呈する。口唇外側への押捺文様は凹点というよりむしろ刻目に近い。167は口唇下に補修孔をもつ。168は薄手の鉢口縁である。口唇への文様は刻目による「ハ」の字形である。169, 170は共に口唇に一条の沈線を持つ。171は厚手の脚部資料である。黄褐色を呈し、器壁調整後ヘラナアを行なう。172は薄手の口辺部資料で補修孔を持つ。なお、補修孔をもつ3例は何れも外側からの穿孔である。

^{重6} 以上の上器には、例えば口唇部文様の変化などから時間的な先後関係を指摘されようが、ここでは阿高式系上器として包括しておきたい。

II類 磨消繩文系土器 (Fig. 48)

1次調査資料と同じく、鐘ヶ崎式土器、北久根山式土器をII類に含める。只、1次調査と異なり数量的にはかなり少ない。

i 鐘ヶ崎式土器 (Fig. 48-173~184)

TP 1では主体となる土器であるが、2次調査では客体となる。174は口縁が内弯し、頸部がしまり脚部が張り出すタイプである。口縁に平行沈線を施す。176は口縁の側面に小

逸具による網繩文を施す。179は溝文と直線文の組み合わせで口縁部を飾る。183は頸部から張り出し胴部に到る資料であり、くずれた入組文を配する。184は口唇に短斜線文を、頸部に溝文を施す。北久根山式との折衷様式をとる。

以上の資料は何れも胎土に滑石を含まない。

j 北久根山式 (Fig. 185~192)

185~187は口唇を若干肥厚させ、その部分に短斜線文を施す。188も同一手法であるが、口唇部の間隔の狭い刻目とは別に口縁部にも口唇刻目とは逆方向に短斜線を配する。194は復元口径13.2cmの小型の鉢口縁である。口縁にのみ短斜線文を施す。明黄灰色を呈し焼成良好である。191も鉢口縁であるが、山形の波状を為し、その頂上部には巾広の刻目を施す。文様は全くない。192は口唇だけの資料である。連續した「ハ」の字文様を施す。

V類 網文晚期 (Fig. 49, 50)

C区からG区にかけて7点のみ出土しているが、3点図示する。何れも比較的上部からの出土である。

193, 194は浅鉢胴部である。共に口縁を欠く。195は深鉢胴下半部である。この組織麻土器は1点のみである。

VI類 底部 (Fig. 51~55)

底部の資料も細片を入れると多いが、ここでは次の基準で細分しておく。

まず胎土に滑石を含むもの (Fig. 51~54) と含まないもの (Fig. 55) とに大別されるが、圧倒的に多いのは前者である。次に胎土に滑石を含む資料では、底部の張り出しが強いもの (Fig. 51), 底部の張り出しが弱いもの (Fig. 52), 張り出しが無く胴部からの移行がストレートなもの (Fig. 53), 底が若干上げ底のものと台状のもの (Fig. 54) とに分けられる。

以下簡単に説明を加えておく。

196, 197は底部まで文様が及ぶ例であるが、文様自体は196は明瞭な凹線、197は細く沈線様



Fig. 49 二次調査出土
土器実測図 (1/3)

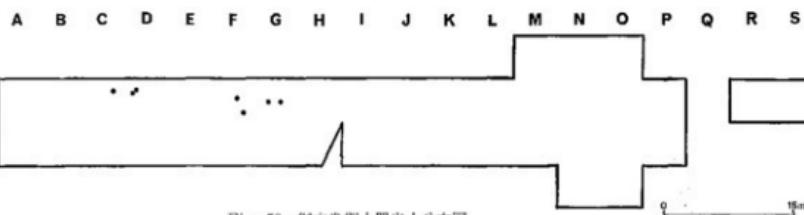


Fig. 50 網文鹿野土器出土分布図

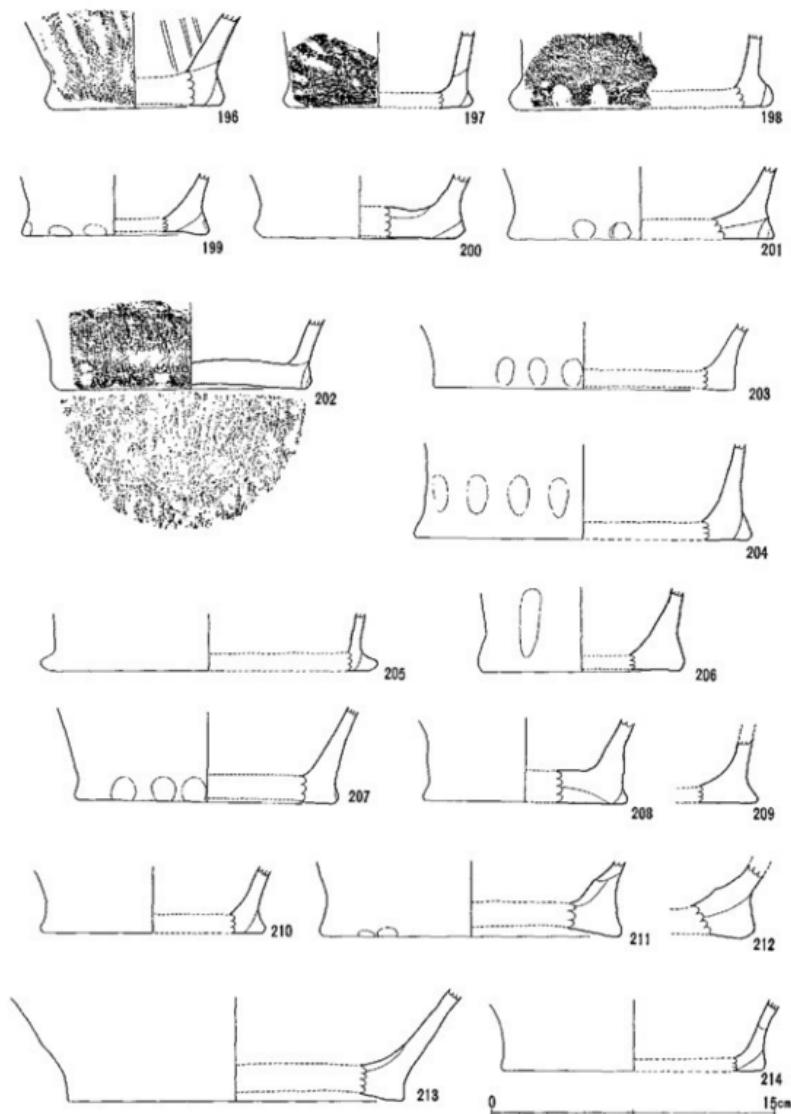


Fig. 51 二次調查出土土器尖測圖 (1 / 3)

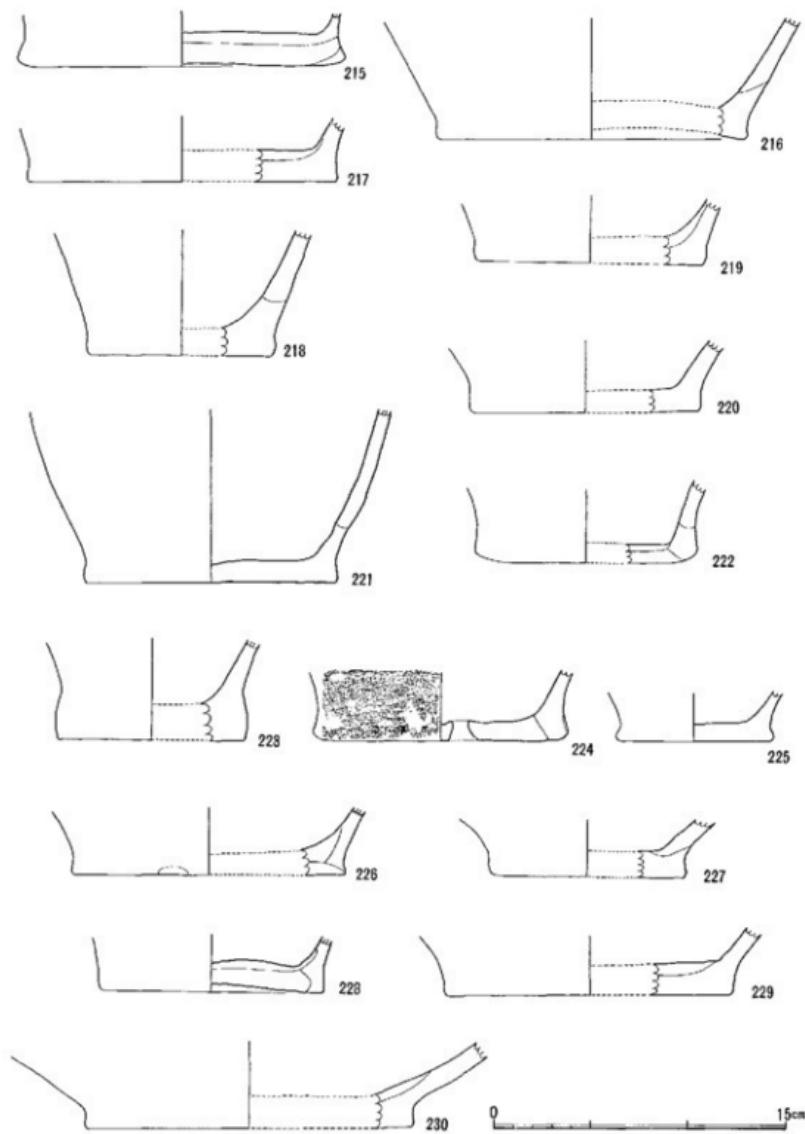


Fig. 52 第二次調查出土土器畫面圖 (1/3)

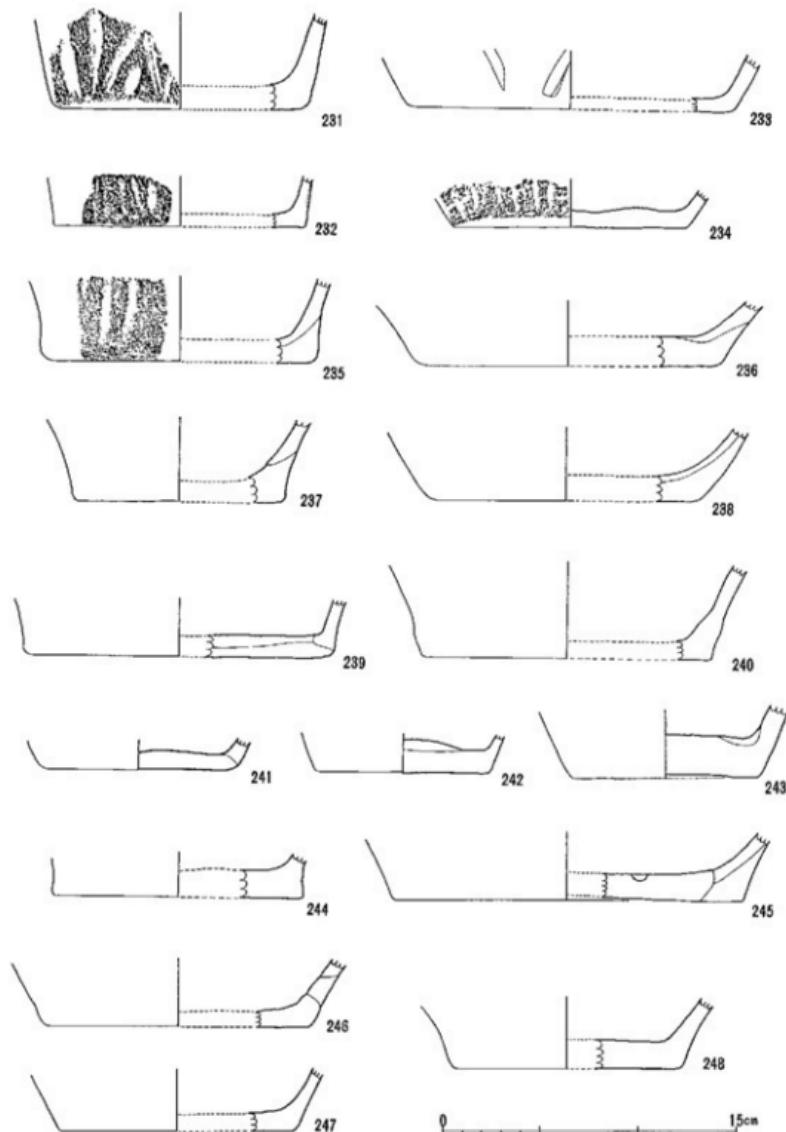


Fig. 53 二次調査出土土器実測図 (1/3)

である。198～202は底部外側に凹点をつけるが、203、204、206、207に見えるスタンプは指頭による押圧痕で文様ではない。205、209、210は底部張り出しが特に強い。202は底部のみ完形資料で径14cmを計る。胴部と底の境は内外面に指頭による押圧を行う。底面に鰐骨の脊椎らしき痕跡がみえるが明瞭でない。224はほんの底面の形が判る資料である。底径13.1cm、胴部と底の接合部は内外面とも指頭押圧を行い、内面はその上を横方向にナデ消し、外面は押圧痕をそのまま残す。底面中央部には外側からの径7%の孔を穿がつ。225は径8cmの小型の鉢底部である。黒褐色を呈し焼成は良好である。230は浅鉢の底部と思われる。推定径15cmで胴部は底から急激に外へ広がる。

先述した如く、Fig. 53 は底部の張りが無い資料である。231～235は底部まで文様が及ぶ。231と235は凹線が太く、他は細い。242は底面内側が漫頭芯状にふくらむ。243は底部が完形資料である。径は9.5cmと小型の方であるが底面はぶ厚く2.1cmを計る。全体的にローリングを受ける。245は復元径18cmのかなり大型の部類に入る。焼成が悪く内外壁共剥落が激しい。

249～254は上げ底気味の例である。249は径15.3cmの大型深鉢の底部である。底と胴部の接合面には、内面では粘土を継ぎ足して強化し、その土をナデ消して調整しているが、ナアが不十分な為継ぎ目が残っている。250の底面には鰐骨の圧痕らしきものが認められるが判然としない。一体にこの遺跡では土器製作台に鰐骨を利用することが少ないらしく、顯著ではない。255は高杯の台状資料と思われる。丸味をおびて外側へ開いて安定する。四ヶ所に方形のすかしが入る。長崎県富江町宮下貝塚に類似資料がある。

以上の資料は何れも阿高式系土器のものであるが、時間的には底部まで文様が及ぶ196～198 231～235が一段古く位置づけられよう。

Fig. 55 は胎上に滑石を含まない資料で、且つ時期的には绳文後期（256～261）、櫛文晩期（262）、弥生中期（263）を含む。後期のものは鐘ヶ崎式から北久根山式に属する資料と思われるが、量的に乏しい。これは当然ながら胴部が少いのに対比する。262は晩期末葉の深鉢の円盤貼りつけ資料である。暗赤褐色を呈し、胎土に砂粒・長石を多く含む。焼成は良好である。263は弥生中期の甕底部資料である。底部はこの1点のみで、出土地点は0—2区である。表面直下からの出土である。

Fig. 56 は弥生式土器である。何れも表土直下より6点程出土している。3点図示する。何れも甕口縁である。264～265は口縁が逆L字状をなす。黄褐色で胎土に砂粒・石英粒を含む。焼成は良好である。265は口唇下に突唇をもつ。266は口縁がくの字状を呈する。胎土に荒い石英粒を含む。焼成は良好である。

以上の資料は何れも弥生中期後半に比定されよう。

土製円盤の資料を Fig. 58 に図示しておく。他にも若干それらしき資料もあるが、ローリングを強く受けている為確実性に欠ける。267は底面を利用する。直径6cm、厚みは8%である。271は有孔円盤である。中央部に径8%の孔を穿がつ。272は貝殻条痕をもつ鉢胴部片を利用する

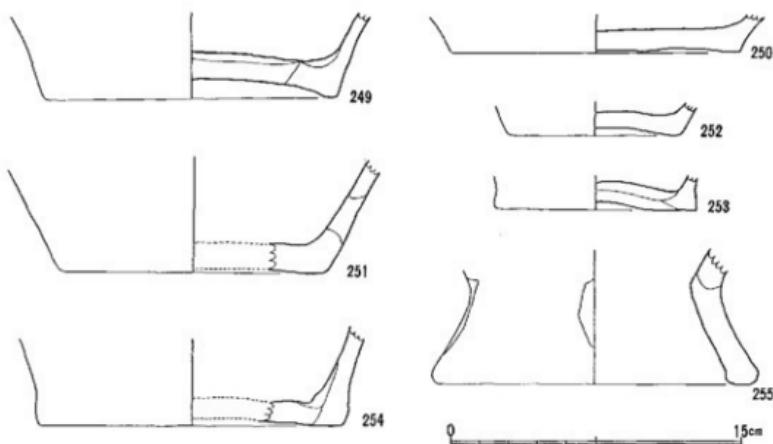


Fig. 54 二次調査出土土器実測図 (1/3)

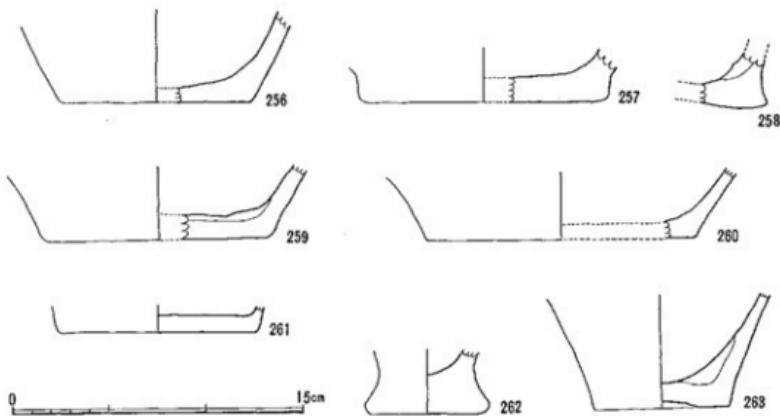


Fig. 55 二次調査出土土器実測図 (1/3)

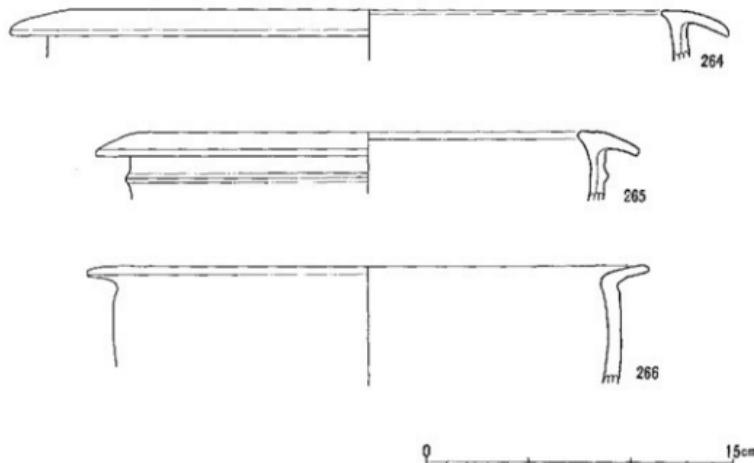


Fig. 56 二次調査出土土器実測図 (1/3)

る。長径 5 cm を計る。

以上の資料中、272を除いて胎土に多量の滑石を混入する。

- 註1 城南町教育委員会「阿高貝塚」城南町文化財調査報告書 1978
- 2 田中良之「中期・阿高式系土器の研究」古文化論叢 第6集所収 1979
- 3 註2論文
- 4 佐賀県立博物館「坂の下遺跡の研究」佐賀県立博物館調査研究書 第2集 1979
- 5 鹿児島市教育委員会「有喜貝塚」鹿児島市文化財調査報告書 第5集 1984
- 6 田中良之「磨消繩文土器伝播のプロセス」古文化論集 上巻所収 1984
- 7 前川惑洋「九州後期繩文土器の諸問題—磨消繩文土器の展開—」九州繩文文化の研究所収 1979

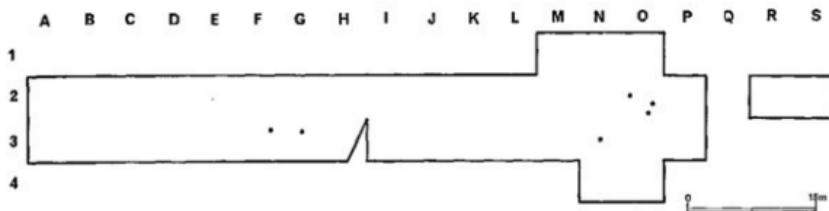


Fig. 57 弥生土器出土分布図

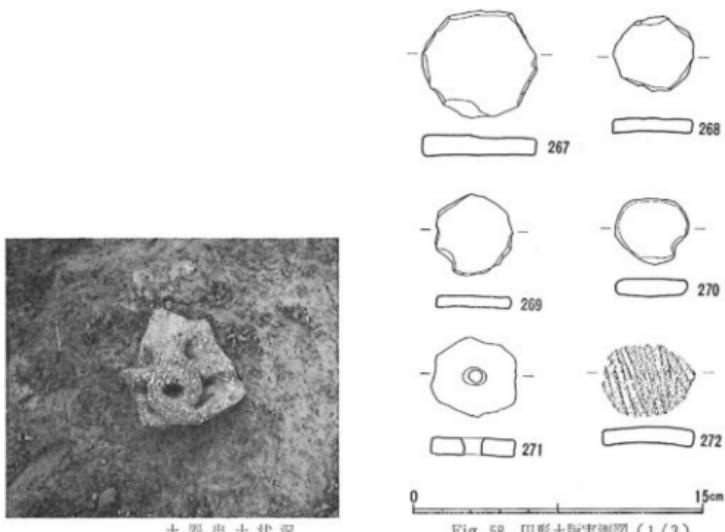


Fig. 58 円形土版実測図 (1/3)



土器出土状況



土器出土状況

第二次調査

Tab. 7 土器観察表

団番号	遺物番号	出土区	器種	厚(%)	色調	胎土	調整		備考
							外	内	
1	2TON-B2-805	B-2	鉢 脚部	7	灰褐色	滑 石		ヘラナデ	押引き刺突
2	2TON-12-2121	I-2	〃	10	赤褐色	〃		〃	円錐・刺突・ローリング
3	2TON-B2-374	B-2	鉢 LI縁	10	暗黃灰色	〃	ヘラナデ	四線・口唇に凹点	
4	TON-T2-108	T2	〃	9	暗褐色	〃	ヘラナデ・ケンマ	ヘラナデ	凹唇に刺目
5	2TON-E2-191	E-2	〃	9	暗赤褐色	〃	ヘラナデ	〃	
6	2TON-C3-5	C-3	〃	9	灰褐色	〃		〃	凹点と浅い四線
7	2TON-A2-282	A-3	〃	9	明赤褐色	〃	ヘラナデ	〃	深い凹点と四線
8	2TON-E3-6	E-3	〃	10	〃	〃		〃	凹点・中広四線
9	2TON-E3-28	E-3	〃	12	〃	〃	ヘラナデ	凹点・西線	
10	2TON-D2-122 D2-65	D-2-3	〃	9	暗灰褐色	〃	ヘラナデ	接合部指頭痕	浅い凹点と凹唇・複合
11	2TON-C2-700	C-2	〃	8	〃	〃	〃	ヘラナデ	深い凹点と沈線
12	2TON-D2-320	D-2	〃	8	〃	〃		〃	凹点・西線
13	2TON-A2-514	A-2	〃	13	暗赤褐色	〃		ヘラナデ	補修孔
14	2TON-E2-554	E-2	〃	7	明赤褐色	〃	ヘラナデ・ケンマ	〃	浅い凹点・沈線
15	2TON-O3-37	O-3	〃	8	灰褐色	〃	〃	〃	
16	2TON-E2-396	E-2	〃	9	暗灰褐色	〃		ヘラナデ	凹点・四線
17	2TON-B2-340	B-2	〃	7	淡褐色	〃		〃	
18	2TON-C2-907	C-2	〃	10	暗褐色	〃		〃	
19	2TON-F2-596	F-2	〃	9	暗灰褐色	〃		番頭痕・ヘラナデ	浅い凹線
20	2TON-B3-136	B-3	〃	9	灰褐色	〃	ヘラナデ		
21	2TON-E2-338	E-2	〃	8	〃	〃		〃	浅い凹点・四線
22	2TON-C2-1309	C-2	〃	6	暗灰褐色	〃	ヘラナデ	〃	口唇わらい「くの字」
23	2TON-E2-306	E-2	〃	9	〃	〃	ヘラナデ・ケンマ	ヘラナデ・ケンマ	浅い凹線
24	2TON-C2-259	C-2	〃	7	明赤褐色	〃	ヘラナデ	〃	
25	2TON-B3-107	B-3	〃	9	灰褐色	〃	柱目・ヘラナデ	〃	凹点を四線で消す
26	2TON-B2-102	D-2	〃	6	暗赤褐色	〃	ヘラナデ	ヘラナデ	
27	2TON-D2-804	F-2	〃	9	〃	砂粒・石英粒	〃	ヘラナデ・ケンマ	
28	2TON-F2-636	G-2	〃	11	暗灰褐色	滑 石	〃	〃	
29	2TON-G2-148	E-2	〃	8	明赤褐色	〃	〃	〃	浅く小さい凹点
30	2TON-E2-480	B-2	〃	8	暗灰褐色	〃	〃	番頭痕・ヘラナデ	
31	2TON-B2-1090	C-3	〃	8	〃	〃	〃	〃	口唇部のみ凹点
32	2TON-C3-127	C-2	〃	10	明赤褐色	〃		〃	
33	2TON-C2-971	D-2	〃	10	淡赤褐色	〃		〃	浅い凹点と四線
34	2TON-D2-230	F-2	〃	8	灰褐色	〃	ヘラナデ	柱目・ヘラナデ	
35	2TON-F2-690	C-2	〃	8	暗灰褐色	〃		ヘラナデ	
36	2TON-C2-954	D-3	〃	9	灰褐色	〃	ヘラナデ	〃	
37	2TON-D3-581	C-2	〃	9	〃	〃	〃	〃	
38	2TON-C2-743	A-2	〃	9	〃	〃	〃	柱目・ヘラナデ	
39	2TON-A2-359	B-3	〃	9	〃	〃		ヘラナデ・ケンマ	
40	2TON-B3-198	B-2	〃	9	〃	〃		ヘラナデ	
41	2TON-B2-1175	B-2	〃	8	淡赤褐色	〃	ヘラナデ	番頭痕・ヘラナデ	
42	2TON-B2-22	B-2	〃	9	灰褐色	〃		〃	
43	2TON-B2-513	D-2	〃	11	灰黑色	〃		ヘラナデ	
44	2TON-D2-881	D-2	〃	10	灰褐色	〃	ヘラナデ	柱目・ヘラナデ	
45	2TON-D2-750	B-2	〃	8	淡赤褐色	〃	〃	〃	
46	2TON-B2-515	C-2	〃	8	灰褐色	〃		柱目・ヘラナデ	浅い凹点
47	2TON-C2-422	C-2	〃	8	明赤褐色	〃	〃	〃	ローリング
48	2TON-C2-389	D-2	〃	9	〃	〃	ヘラナデ	ヘラナデ	
49	2TON-D2-871	C-3	〃	9	灰黑色	〃	〃	〃	
50	2TON-C3-124	C-2	〃	9	灰褐色	〃	〃	〃	

Tab.8 土器觀察表

図番号	遺物番号	出土区	器種	厚(%)	色調	胎土	調整		備考
							外	内	
51	2TON-C2-767	C-2	鋸口縁	9	明赤褐色	滑石		ヘラナデ	
52	2TON-C2-880	C-2	II	9	II	II		ヘラナデ	
53	2TON-E2-588	E-2	II	9	II	II	ヘラナデ	指頭痕・ヘラナデ	
54	2TON-C2-1010	C-2	II	8	II	II			縦長凹点
55	2TON-T2-1	T-2	II	8	黒褐色	砂粒・雲母		ヘラナデ	浅い四点
56	2TON-F2-536	F-2	II	9	淡赤褐色	滑石		II	
57	2TON-C2-320	C-2	II	9	明赤褐色	II		指頭痕	
58	2TON-B2-232	B-2	II	8	II	II		II	
59	2TON-D2-745	D-2	II	9	灰褐色	II		ヘラナデ	
60	2TON-B2-109	B-2	II	8	淡褐色	II		指頭痕	
61	2TON-B3-89	B-3	II	8	II	II		指頭痕・ヘラナデ	ローリング
62	2TON-C2-1246	C-2	II	9	明赤褐色	II		ヘラナデ	
63	2TON-A2-103	A-2	II	9	灰褐色	II		II	
64	2TON-E2-380	E-2	II	9	明赤褐色	II	ヘラナデ	II	浅い四点
65	2TON-F2-601	F-2	II	9	II	II		II	
66	2TON-C2-1269	C-2	II	II	II	II		指頭痕・ヘラナデ	
67	2TON-C2-1249	C-2	II	II	灰褐色	II		ヘラナデ	
68	2TON-B3-59	B-3	II	II	II	II		II	
69	2TON-E2-29	E-3	II	II	暗灰褐色	II		II	
70	2TON-F2-473	F-2	II	8	灰褐色	II		II	口唇に四点無
71	2TON-E2-225	E-2	II	9	灰黑色	II	ヘラナデ	指頭痕	
72	2TON-B2-535	B-2	II	9	II	II	II	ヘラナデ	四点+縦長凹線
73	2TON-B2-1237	B-2	II	8	灰褐色	II	II	横目・ヘラナデ	
74	2TON-C2-10	C-3	II	9	灰黑色	II	II	ヘラナデ	浅い四点
75	2TON-C2-567	C-2	II	8	灰褐色	II	II	II	口唇に筋目+浅い凹線
76	2TON-B2-469	B-2	II	9	II	II	II	II	縦長い四線
77	2TON-A2-8	A-2	II	10	II	II	II	II	山形口縁
78	2TON-B2-3	B-2	II	10	灰黑色	II	II	II	
79	2TON-C2-1308	C-2	II	9	II	II	横目・ヘラナデ	横目・ヘラナデ	浅い凹線
80	2TON-C2-1054	C-2	II	8	明赤褐色	II	ヘラナデ	ヘラナデ	斜線文
81	2TON-B2-1009	B-2	II	8	灰褐色	II	ヘラナデ	横目・ヘラナデ	横目四線
82	2TON-E2-143	E-2	II	12	灰黑色	II	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
83	2TON-C2-490	C-2	II	9	II	II	ヘラナデ	ヘラナデ	板目斜線文
84	2TON-B2-574	B-2	II	II	淡灰黑色	II	II	II	口唇に胡目+凹点
85	2TON-T2-116	T-2	II	II	II	II	II	II	II
86	2TON-D2-468	D-2	II	8	明赤褐色	II	II	II	浅い短斜線
87	2TON-A2-297	A-2	II	8	灰黑色	II	II	II	板目・ヘラナデ
88	2TON-B2-1286	B-2	II	9	明赤褐色	II	II	ヘラナデ	斑斜線文
89	2TON-F2-157	F-2	II	8	II	II	II	II	太く浅い凹線
90	2TON-C2-3196	C-2	II	9	II	II	II	II	波状口縁
91	2TON-B2-1077	B-2	II	9	II	II	II	II	短斜線文
92	2TON-E2-467	E-2	II	10	暗赤褐色	II	II	II	深い短斜線文
93	2TON-B2-198	B-2	II	9	淡灰褐色	II	II	II	波状口縁・文様が複
94	2TON-B2-549	B-2	II	8	灰黑色	II	II	II	ヘラ先沈線

第二次調査

Tab. 9 土器観察表

調査番号	遺物番号	出土区	器種	厚(%)	色調	胎土	調整		備考
							外	内	
95	ZTON-E2-898	E-2	鉢口縁	8	明赤褐色	滑石	ヘラナデ	指頃痕	刻目帯、径18.5cm
96	ZTON-F2-351	F-2	#	#	#	#	#	#	#
97	ZTON-E2-459	F-2	#	7	灰褐色	#	#	ヘラナデ	口唇に粘土塊
98	ZTON-G2-41	G-2	#	8	明赤褐色	#	#	#	口輪に粘土層貼付
99	ZTON-F2-501	F-2	#	7	#	#	板目・ヘラナデ	ヘラケズリ	
100	ZTON-T2-318	T-2	#	8	#	砂粒・雲母・石英粒	ヘラナデ	ヘラナデ	刻目突帯
101	ZTON-N2-255	A-3	鉢口沿	8	灰褐色	滑石	#	#	#
102	ZTON-B2-302	B-2	#	8	明赤褐色	#	#	#	#
103	ZTON-D2-1045	D-2	#	11	#	#	#	#	粘土帯
104	ZTON-B2-766	B-2	鉢口縁	8	淡赤褐色	#	#	#	低い刻目突帯
105	ZTON-C3-46	C-3	#	9	灰黑色	#	#	#	#
106	ZTON-A3-492	A-2	#	#	明赤褐色	#	#	#	口唇に浅い刻目
107	ZTON-F3-159	F-2	#	#	#	#	#	#	平行沈線
108	ZTON-F3-164	F-2	#	#	#	#	#	#	波状口縁
109	ZTON-F3-513	F-2	#	9	#	#	板目・ヘラナデ		
110	ZTON-E3-387	E-2	#	8	黒褐色	#	#	#	
111	ZTON-T4-50	T-4	#	#	#	砂粒・石英粒			口掠帶に羽状文
112	ZTON-C2-369	C-2	#	7	灰褐色	滑石	ヘラナデ	ヘラナデ	
113	ZTON-B3-705	B-3	#	8	#	#	#	#	
114	ZTON-F2-22	F-2	#	10	暗赤褐色	#	#	#	
115	ZTON-E2-354	E-2	#	10	明赤褐色	#	#	#	波状口縁
116	ZTON-D2-863	D-2	#	11	暗褐色	砂粒・長石			#
117	ZTON-B2-824	B-2	#	7	灰褐色	滑石	板目・ヘラナデ	ヘラナデ	
118	ZTON-B2-324	B-2	#	6	#	#	板目・ヘラナデ		
119	ZTON-C2-585	C-2	#	8	暗赤褐色	砂粒・雲母	ヘラナデ		ローリング
120	ZTON-N3-4	N-3	#	6	#	#		#	
121	ZTON-E2-714	E-2	#	#	#	#		#	
122	ZTON-A2-H	A-2	#	8	#	砂粒・雲母・石英粒	ヘラナデ	#	
123	ZTON-C2-1057	C-2	#	#	暗褐色	砂粒・雲母・長石	ヘラナデ・ケンマ		ローリング
124	ZTON-A2-591	A-2	#	10	#	#	ヘラナデ	ヘラナデ	口縁に刻文突
125	ZTON-C2-189	C-2	#	8	#	砂粒・雲母	ヘラナデ・ケンマ	#	深い薺葉文・ローリング
126	ZTON-B2-458	B-2	#	#	赤褐色	#	ヘラナデ	#	
127	ZTON-C2-33	C-2	把手	5	明赤褐色	滑石	ヘラナデ	板目・ヘラナデ	沈線で文様
128	ZTON-A-1302	A-3	#	8	明赤褐色	砂粒・石英粒	板目・ヘラナデ		粘土揉組み合わせ
129	ZTON-C2-460	C-2	#	#	#	#			
130	ZTON-F2-563	F-2	鉢胴部	#	灰黑色	滑石	#	板目・ヘラナデ	太く深い凹線
131	ZTON-F3-10	F-3	#	11	灰褐色	#	#	ヘラナデ	
132	ZTON-C2-692	C-2	#	8	赤褐色	#	#	#	ワラビ手文
133	ZTON-E3-6	E-3	#	11	明赤褐色	#	#	#	大型凹文
134	ZTON-B3-136	B-2	#	7	#	#	#	指頃痕	ワラビ手文
135	ZTON-A3-H	A-3	鉢底面部	8	#	#	#	ヘラナデ	大型凹文
136	ZTON-B2-245	B-2	鉢胴部	#	淡赤褐色	#		#	
137	ZTON-A2-H	A-2	鉢底面部	#	灰褐色	#	板目・ヘラナデ	#	太型凹文
138	ZTON-A3-890	A-3	#	#	明赤褐色	#	ヘラナデ	#	
139	ZTON-C2-287	C-2	#	#	淡赤褐色	#	#	#	
140	ZTON-B2-174	B-3	鉢胴部	#	#	#	#	#	補修孔
141	ZTON-B2-272	B-2	#	9	#	#	#	#	
142	ZTON-C2-1218	C-2	#	8	灰褐色	#	#	#	
143	ZTON-C2-1479	C-2	#	8	#	#	#	ヘラナデ・ケンマ	
144	ZTON-C2-516	C-2	#	7	淡赤褐色	#	#	板目・ヘラナデ	
145	ZTON-C2-6	C-2	#	8	灰褐色	#	#	ヘラナデ	
146	ZTON-B2-792	B-2	#	8	暗赤褐色	#	#	#	

Tab. 10 土器観察表

団番地	遺物番号	出土区	器種	厚(%)	色調	胎土	調 整		備 考
							外	内	
147	2TON-C2-1563	C-2	鉢 岩 部	7	淡灰褐色	滑	石	板目(テ)・ヘラナデ	板目(ヨコ)・ヘラナデ
148	2TON-E2-598	E-2	鉢 口 迂	8	暗褐色	#	板目(ヨコ)・ヘラナデ	ヘラナデ	
149	2TON-D2-148	D-2	"	10	赤褐色	#		ヘラナデ	#
150	2TON-A2-418	A-2	鉢 制 部	8	淡赤褐色	#	#	#	文様帯以下無文
151	2TON-C2-1532	C-2	"	8	明赤褐色	#	#	#	
152	2TON-E3-43	E-3	鉢 口 枝	11	"	#	#	番板目・ヘラナデ	口縁肥厚
153	2TON-F3-21	F-3	"	8	灰褐色	#	#	ヘラナデ	"
154	2TON-D3-105	D-3	"	9	暗赤褐色	#	板目・ヘラナデ	"	底凹口縁・内側肥厚
155	2TON-C2-65	C-2	"	6	灰褐色	#	ヘラナデ	板目・ヘラナデ	径19cm
156	2TON-B2-473	B-2	"	6	"	#		指痕痕	波状口縁
157	2TON-F2-360	F-2	"	7	灰褐色	#	板目・ヘラナデ	ヘラナデ	補修孔
158	2TON-F2-210	F-2	"	7	明赤褐色	#	ヘラナデ	"	口縁肥厚
159	2TON-A2-65	A-2	"	8	灰黑色	#	板目・ヘラナデ	"	"
160	2TON-C5-1119	C-2	鉢 口 緑	9	明赤褐色	#	ヘラナデ	"	
161	2TON-C2-987	C-2	鉢 口 緑	8	淡赤褐色	#		指痕痕	口唇に凹点
162	2TON-C2-1518	C-2	"	7	暗赤褐色	#	ヘラナデ	板目・ヘラナデ	"
163	2TON-B2-723	B-2	"	7	暗褐色	#	番板目・ヘラナデ	ヘラナデ	"
164	2TON-C2-50	C-2	"	10	灰黑色	#	ヘラナデ	"	"
165	2TON-D3-47	D-3	"	8	淡赤褐色	#	"	ヘラケズリ	板目に窓凹点
166	2TON-D2-662	D-2	"	8	"	#	"	指痕痕	"
167	2TON-D2-728	D-2	"	8	"	#	"	ヘラナデ	補修孔
168	2TON-E2-258	E-2	"	6	灰黑色	#	ヘラナデ・ケンマ	板目・ヘラナデ	口唇に鷺目
169	2TON-G2-165	G-2	"	8	暗灰黄色	#	ヘラナデ	番板目・ヘラナデ	口唇に沈線
170	2TON-C2-751	C-2	"	10	"	#	板目	板目	"
171	2TON-F2-564	F-2	鉢 制 部	9	赤褐色	#	板目・ヘラナデ	板目・ヘラナデ	
172	2TON-C2-662	C-2	鉢 口 迂	7	灰黑色	#	ヘラナデ	ヘラケズリ	補修孔
173	2TON-A2-755	A-2	鉢 口 緑	10	"	砂粒・石英粒・雲母		ヘラナデ	平行沈線
174	2TON-F3-136	F-3	"	8	"	#	ヘラナデ・ケンマ	板目・ヘラナデ・ケンマ	"
175	2TON-T2-34	T-2	"	8	暗黄褐色	砂粒・雲母・長石	ヘラナデ	ヘラナデ	"
176	2TON-G2-85	G-2	"	10	暗褐色	#	ヘラナデ・ケンマ	ヘラナデ・ケンマ	無縫文
177	2TON-C2-844	C-2	"	9	明赤褐色	砂粒・雲母・長石・石英		ヘラナデ	平行凹線
178	2TON-A3-377	A-3	"	8	暗灰褐色	砂粒・石英粒・雲母			ローリング
179	2TON-B2-1185	B-2	"	8	暗褐色	砂粒・雲母・長石		ヘラナデ	溝文
180	2TON-A2-553	A-2	"	8	暗灰褐色	砂粒・雲母	ヘラナデ	ヘラナデ	ローリング
181	2TON-A2-325	A-2	鉢 岩 部	9	"	砂粒・雲母・長石		板目・ヘラナデ	沈線による文様
182	2TON-C2-1516	C-2	"	8	赤褐色	#	ヘラナデ	ヘラナデ・ケ	ローリング・溝文
183	2TON-A2-156	A-2	"	8	暗赤褐色	砂粒・石英粒・雲母	板目・ヘラナデ	ヘラナデ	入組文・擬縫文
184	2TON-O2-30	O-2	鉢 口 緑	12	"	砂粒・雲母		ヘラナデ・ケンマ	無縫文・溝文
185	2TON-A2-175	A-2	"	9	暗褐色	砂粒・石英粒・雲母	板目・ヘラナデ・ケンマ	ヘラナデ	短斜縫文
186	2TON-C3-34	C-3	"	7	暗灰褐色	砂粒・雲母・長石			"
187	2TON-B2-536	B-2	"	8	"	砂粒・石英粒			"
188	2TON-A2-387	A-2	"	10	灰黑色	砂粒・石英粒・雲母	ヘラナデ	ヘラナデ	無縫線による羽状文
189	2TON-A2-594	A-2	"	12	明灰褐色	#		"	径13.2cm
190	2TON-B2-519	B-2	"	8	暗褐色	砂粒・雲母・長石	ヘラナデ・ケンマ	ヘラナデ・ケンマ	短斜縫文
191	2TON-Z2-2	T-2	"	12	明褐色	砂粒・石英粒・雲母			
192	2TON-C2-1088	C-2	"	8	灰黑色	砂粒・石英粒・雲母	ヘラナデ		口唇に刻印

Tab. 11 土器観察表

図番号	遺物番号	出土区	器種	厚(%)	色調	胎土	調整		備考
							外	内	
193	2TON-D2-90	D-2	浅鉢口盃	6	灰黒色	砂粒・雲母	ヘラナデ	ヘラナデ	晚期
194	2TON-G2-168	G-2	"	6	灰灰褐色	"	"	"	"
195	2TON-D2-790	D-2	鉢 脚部	8	"	"	ヘラナデ	ヘラナデ	晚期組織底
196	2TON-B2-891	B-2	鉢 底部	16(底)	明黄灰色	滑	石	指頭痕	胚目・ヘラナデ 底部まで残す。径9.5cm
197	2TON-E2-57	E-2	"	10(×)	灰黑色	"	ヘラナデ	ヘラナデ	"、径9cm
198	2TON-B2-102	B-2	"	13(×)	明赤褐色	"	指頭痕	"	縦に凹点。径14cm
199	2TON-C2-979	C-2	"	9(×)	"	"	ヘラナデ	"	径10cm
200	2TON-D2-1503	D-2	"	16(×)	暗灰黑色	"	指頭痕	指頭痕	径11cm
201	2TON-B2-684	B-2	"	10(×)	"	"	"	"	径14cm
202	2TON-D2-1630	D-2	"	14(×)	明赤褐色	"	胚目・ヘラナデ	指頭痕・ヘラナデ	縦に凹点。径14cm
203	2TON-B2-456	B-2	"	10(×)	灰白色	"	指頭痕・胚目・ヘラナデ	ローリング	径16cm
204	2TON-C2-664	C-2	"	14(×)	明赤褐色	"	"	ヘラナデ	"、径18cm
205	2TON-B2-293	B-2	"	9(×)	暗灰黄色	"	ヘラナデ	"	"、"
206	2TON-E2-73	E-2	"	15(×)	明赤褐色	"	"	"	径11cm
207	2TON-F2-480	F-2	"	15(×)	"	"	ヘラナデ	指頭痕・ヘラナデ	径14cm
208	2TON-P2-699	D-2	"	16(×)	"	"	指頭痕	ヘラナデ	径11cm
209	2TON-D2-783	D-2	"	13(×)	"	"	指頭痕・ヘラナデ	"	"
210	2TON-B2-99	B-2	"	13(×)	"	"	"	"	径12cm
211	2TON-D2-696	D-2	"	13(×)	"	"	指頭痕	指頭痕・ヘラナデ	径16cm
212	2TON-D2-18	D-2	"	19(×)	暗赤褐色	"	ヘラナデ	ヘラナデ	厚手
213	2TON-A3-111	A-3	"	13(×)	明赤褐色	"	"	"	径18cm
214	2TON-F2-582	F-2	"	8(×)	暗灰灰色	"	胚目・ヘラナデ	"	径14cm
215	2TON-D2-914	D-2	"	16(×)	明赤褐色	"	指頭痕・胚目・ヘラナデ	指頭痕・ヘラナデ	径17cm
216	2TON-D2-1389	D-2	"	15(×)	"	"	胚目・ヘラナデ	"	径16cm
217	2TON-2-59	T-2	"	15(×)	"	"	ヘラナデ	"	径16cm
218	2TON-D2-1107	D-2	"	14(×)	"	"	指頭痕	ヘラナデ	ローリング、径9.8cm
219	2TON-C2-972	C-2	"	12(×)	灰赤色	"	指頭痕	指頭痕	径12cm
220	2TON-B3-41	B-3	"	13(×)	"	"	ヘラナデ	"	ローリング。径13.3cm
221	2TON-F3-14	F-3	"	8(×)	明赤褐色	"	"	指頭痕	"
222	2TON-D2-1819	D-2	"	12(×)	暗赤褐色	"	ヘラナデ	指頭痕・胚目・ヘラナデ	径11.5cm
223	2TON-B2-127	B-2	"	19(×)	明赤褐色	"	"	"	径10cm
224	2TON-F2-410	E-2	"	11(×)	明赤褐色	"	指頭痕・ヘラナデ	指頭痕・胚目・ヘラナデ	底部に孔。径13.1cm
225	2TON-E3-26	E-3	"	7(×)	黑褐色	"	胚目・ヘラナデ	ヘラナデ	径8cm
226	2TON-D2-516	D-2	"	14(×)	灰赤色	"	"	"	径14.2cm
227	2TON-E2-149	E-2	"	13(×)	褐灰色	"	指頭痕・ヘラナデ	"	径10.4cm
228	2TON-D2-273	D-2	"	9(×)	明赤褐色	"	胚目・ヘラナデ	指頭痕・胚目・ヘラナデ	ローリング。径11.5cm
229	2TON-F2-391	F-2	"	15(×)	"	"	"	ヘラナデ	"
230	2TON-F2-3955	F-2	"	18(×)	"	"	胚目・ヘラナデ	"	径15cm
231	2TON-B2-390	B-2	"	13(×)	明赤褐色	"	"	"	ローリング。径13.8cm
232	2TON-F2-237	F-2	"	7(×)	灰褐色	"	ヘラナデ	"	径13cm
233	2TON-F2-534	F-2	"	7(×)	灰褐色	"	"	"	径16.8cm
234	2TON-C2-940	C-2	"	7(×)	明赤褐色	"	"	"	径12cm
235	2TON-D2-123	D-2	"	10(×)	"	"	"	"	径14.2cm
236	2TON-D2-87	D-2	"	11(×)	暗赤褐色	"	胚目・ヘラナデ	胚目・ヘラナデ	径13.6cm
237	2TON-F2-131	F-2	"	11(×)	"	"	"	"	"
238	2TON-D2-1219	D-2	"	11(×)	暗赤褐色	"	胚目・ヘラナデ	胚目・ヘラナデ	6と同一個体。径13.6cm
239	2TON-F2-605	F-2	"	11(×)	赤褐色	"	ヘラナデ	"	径16cm
240	2TON-C2-468	C-2	"	10(×)	"	"	胚目・ヘラナデ	指頭痕・ヘラナデ	径14.8cm
241	2TON-E2-904	E-2	"	8(×)	黑褐色	"	指頭痕	"	径10cm
242	2TON-C2-21	C-2	"	14(×)	明赤褐色	"	"	"	径9cm

Tab. 12 土器観察表

器番号	造物番号	出土区	器種	厚(%)	色調	胎土	開 線		備 考	
							外	内		
243	2TON-B3-44	B-3	鉢 底部	21(底)	灰褐色	滑	石	指痕痕	ヘラナデ	ローリング、径9.5cm
244	2TON-B2-765	B-2	"	11(±)	明赤褐色	"	"	ヘラナデ	板目・ヘラナデ	径14cm
245	2TON-C2-1075	C-2	"	13(±)	暗赤褐色	"	"	"		内部剥落、径18cm
246	2TON-O2-37	O-2	"	8(±)	"	"	板目・ヘラナデ	ヘラナデ		径14cm
247	2TON-F2-11	F-2	"	"	"	"	"	"		
248	2TON-F2-590	F-2	"	12(±)	極暗赤褐色	"	"	ヘラナデ	ヘラナデ	径12cm
249	2TON-G3-12	G-3	"	12(±)	明赤褐色	"	板目・ヘラナデ	"		あげ底、径13cm
250	2TON-B2-728	B-2	"	11(±)	暗赤褐色	"	"	ヘラナデ	"	径15cm
251	2TON-E2-999	E-2	"	14(±)	黒褐色	"	"	"	板目・ヘラナデ	径14cm
252	2TON-C2-177	C-2	"	10(±)	赤褐色	"	"	"	ヘラナデ	径9cm
253	2TON-G2-3	G-2	"	11(±)	明赤褐色	"	指痕痕	"		径10.5cm
254	2TON-B3-22	B-3	"	11(±)	赤褐色	"	"	ヘラナデ	"	径16cm
255	2TON-E2-60	E-2	鉢 高台	15	"	"	板目・ヘラナデ	板目・ヘラナデ		透かしあり、径17cm
256	2TON-F2-65	E-2	鉢 底部	11(奥)	"	砂粒・青白・板目・長石	"	ヘラナデ	ローリング、径10cm	
257	2TON-G2-70	G-2	"	14(±)	明赤褐色	"	板目・ヘラナデ	板目・ヘラナデ		径12cm
258	2TON-E2-9	E-2	"	11(±)	暗赤褐色	砂粒・青白・長石	ヘラケズリ	ヘラケズリ		
259	2TON-E2-29	E-2	"	11(±)	"	砂	砂粒・青白・板目・長石	板目・ヘラナデ	ヘラナデ	径12cm
260	2TON-B2-20	B-2	"	9(±)	明赤褐色	"	"	ヘラナデ	"	径14cm
261	2TON-D2-324	D-2	"	11(±)	植	砂粒・石英粒・雲母	"	"		径10.5cm
262	2TON-C2-83	C-2	深鉢底部	20(±)	暗赤褐色	砂粒・青白・長石	板目・ヘラナデ			晚期、径6.5cm
263	2TON-O2-8	O-2	縁 底部	10(±)	明赤褐色	"	ハケ目	ハケ目	劣生、径7cm	
264	2TON-O2-28	O-2	縁 口縁	7	橙	砂粒・石英粒・云母	"	"		劣生、径26.5cm
265	2TON-O2-3	O-2	"	7	"	"	"	"	"	
266	2TON-F3-17	F-3	"	7	"	"	"	"		
267	2TON-D2-303	D-2	円 瓢	9	暗灰褐色	滑	石			底部利用
268	2TON-F2-562	F-2	"	9	赤褐色	"	ヘラナデ	板目・ヘラナデ	頭部 "	
269	2TON-B2-555	B-2	"	7	灰褐色	"	"	"	"	
270	2TON-F2-287	F-2	"	8	明赤褐色	"			"	ローリング
271	2TON-B2-432	B-2	"	8	淡灰黑色	"				有孔
272	2TON-1-967	T-1	"	8	暗褐色	砂粒・石英粒・雲母・長石	板目	ヘラナデ		

4. 第二次調査出土石器 (Fig. 57~77, PL. 38~51)

二次調査出土の剥片石器として154点を図化した。1~10は旧石器時代の遺物で、1・2は台形石器。特に1は、素材剥片の打面部にプランティングを加え、もう一端は表面から主要剝離面側へ加工することが特徴的である。3・4は、Fig. 27 の三棱尖頭器よりも調整は粗く、4については後に彫刻として再生されている。5は白ヒスイを使用した、スクレイパーと思われるもので、先端部は欠損し、両側刃の加工部分を除いて表裏面共に白い自然面を残す。11~158の石器は、第二次調査出土土器の主体である阿高~南福寺式土器の中に包括されようが、出水・北久根・鏡ヶ崎式土器も出土しているため、石器組成自体も幾分注意を払わなければならない点をも考慮しなければならない。

11~13は安山岩製の石錠、笠状石器である。石錠は、縄文前期~後期にかけて検出されており、その石器自体の特殊性、又海浜部の遺跡に多いなど海洋性の石器として注目されるところである。11は最大長10.5cm、幅4.1cmを測り、12は最大長8.4cm、幅5.1cmを測る。14~103は石錠であるが、14・15については石錠としての機能を持ちうる。15は、先端部が丸く作られ、側刃が鋸歯を呈するため、大型の石錠としても考えられる。遺跡における石錠の特徴は、16~34の比較的大型のもの、35~55の小型のもの、55~103までの中型のものに大きく分類される。又、腹自体の大きさは、大型から小型まではほぼ同じで、側刃を鋸歯線にする資料が同様に見られるなど、同一時期内における変化と見なせる資料である。第一次調査出土の石錠との大きな相違は、剥片錠よりも通常の両面加工の石錠が多量であるということである。104~118は石錠を取り上げたが、この石錠においても、104~109のような三角形を呈するもの、110~116のよう

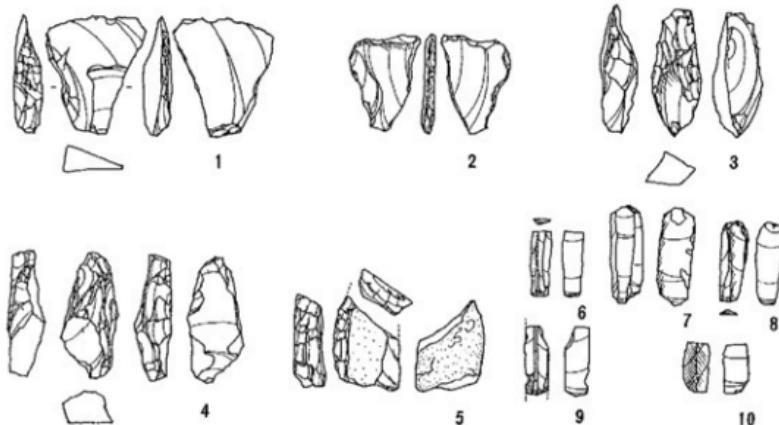


Fig. 59 二次調査出土石器尖頭器図 (2/3)

に方形状のもの、117・118のように刃部が孤状になるものなどがある。先に掲げた15なども、あるいはこのタイプにあてはまるものかも知れない。これらの形態の相違は歎然としており、各々機能的に変化を持つのではないかだろうか。119～126はサイドブレード、スクレイパー、石錐など縄文中期～後期に見られる石器である。127～151は縦長削片を圓化したものであるが、一次調査同様、剥片の中ににおける絶対量は少ない傾向にある。又、石核も縦長削片石核と思える資料の出土はない。155～158は石製垂飾、及び石製円盤である。155は緑色のヒスイ製で、鳥帽子状に作り出されている。156は暗緑色で、四角形状に作り出されており、中央の孔は蚕である。157は滑石製で長柄円形を呈し下部の方がややふくらみ氣味である。158の石製円盤は片製岩を使用し、周縁は磨かれている。

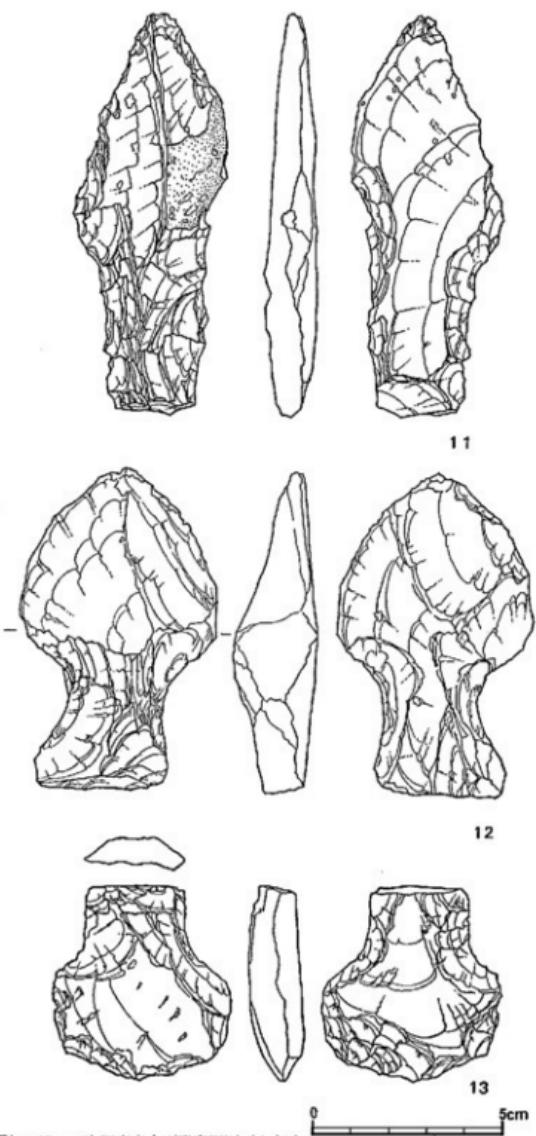


Fig. 60 二次調査出土石器実測図 (2/3)

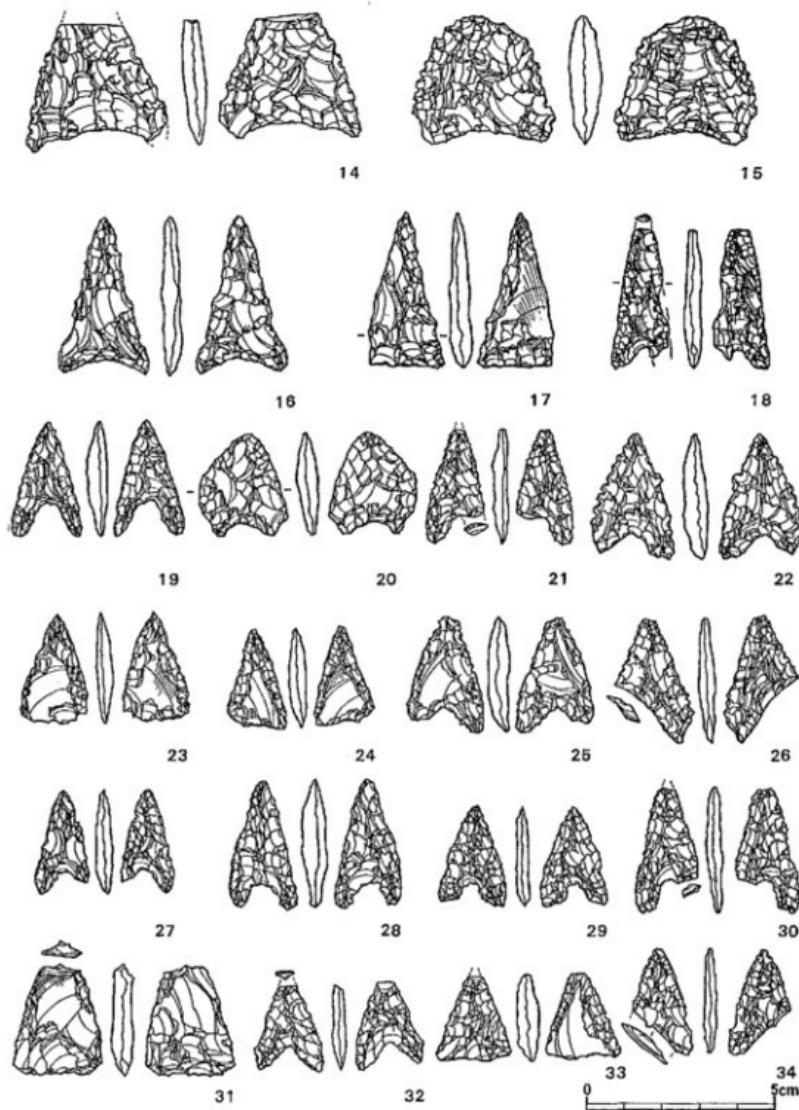


Fig. 61 二次調查出土石器實測圖 (2/3)

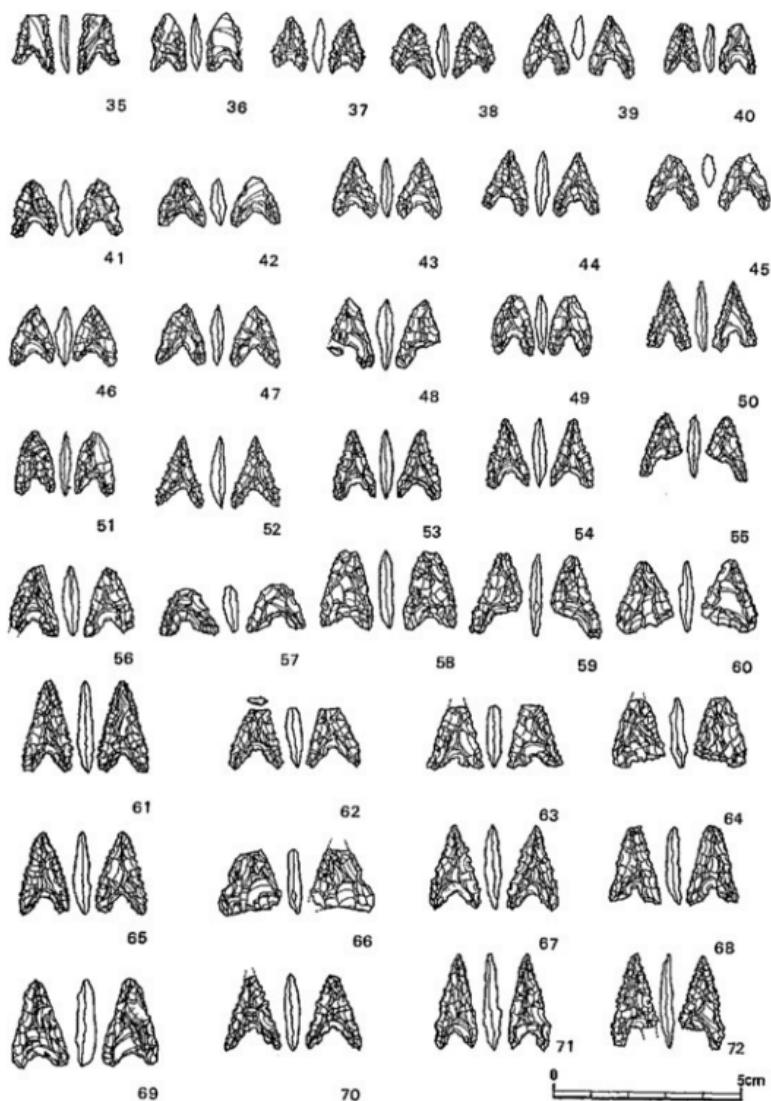


Fig. 62 二次調查出土石器尖頭圖 (2 / 3)

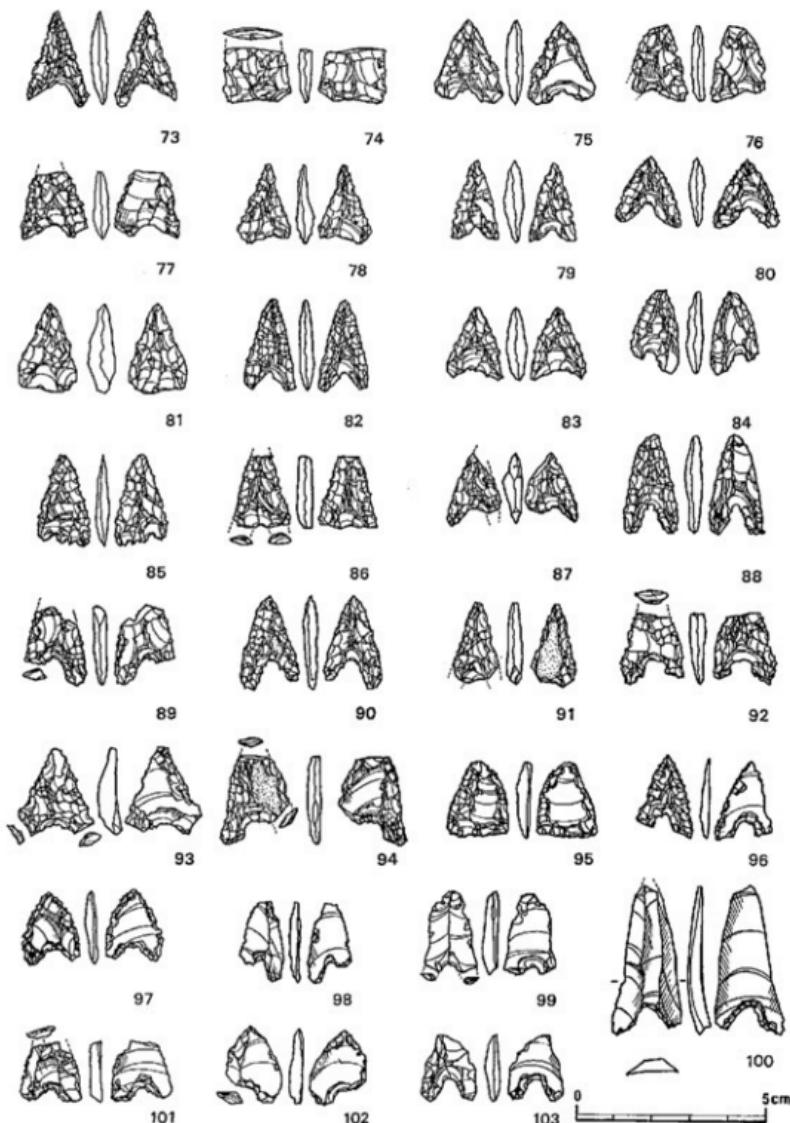


Fig. 63 二次調査出土石器実測図 (2/3)

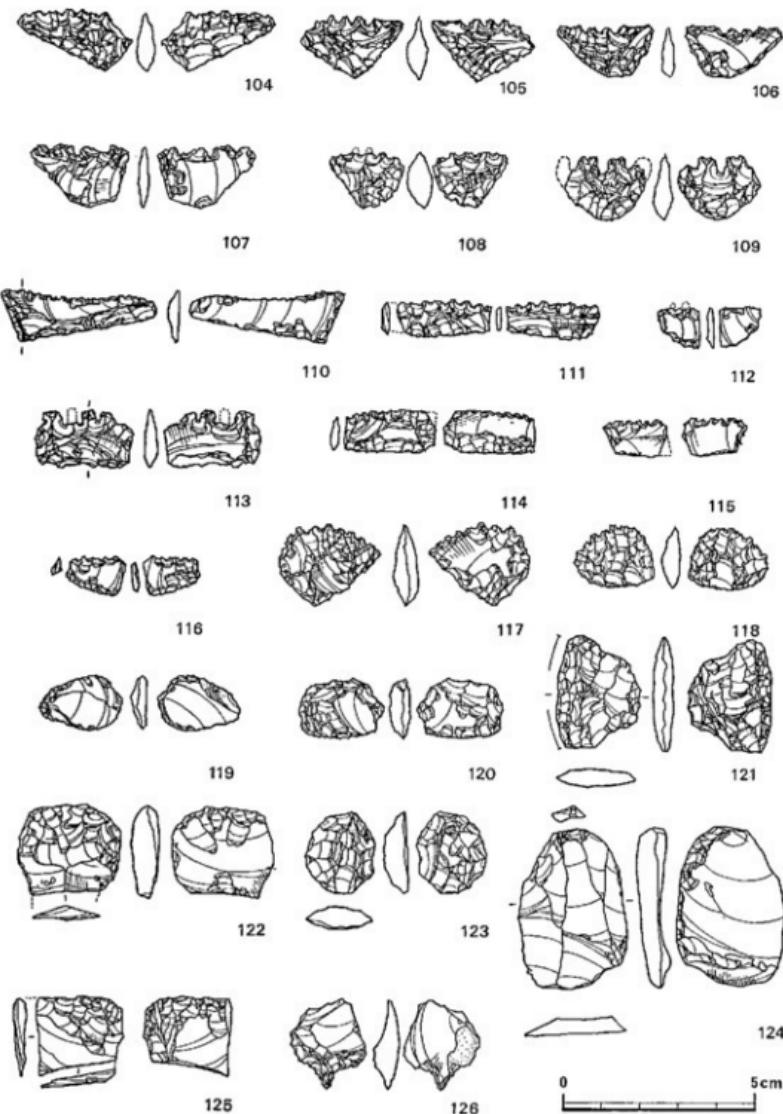


Fig. 64 二次調査出土石器実測図 (2/3)

第二次調查

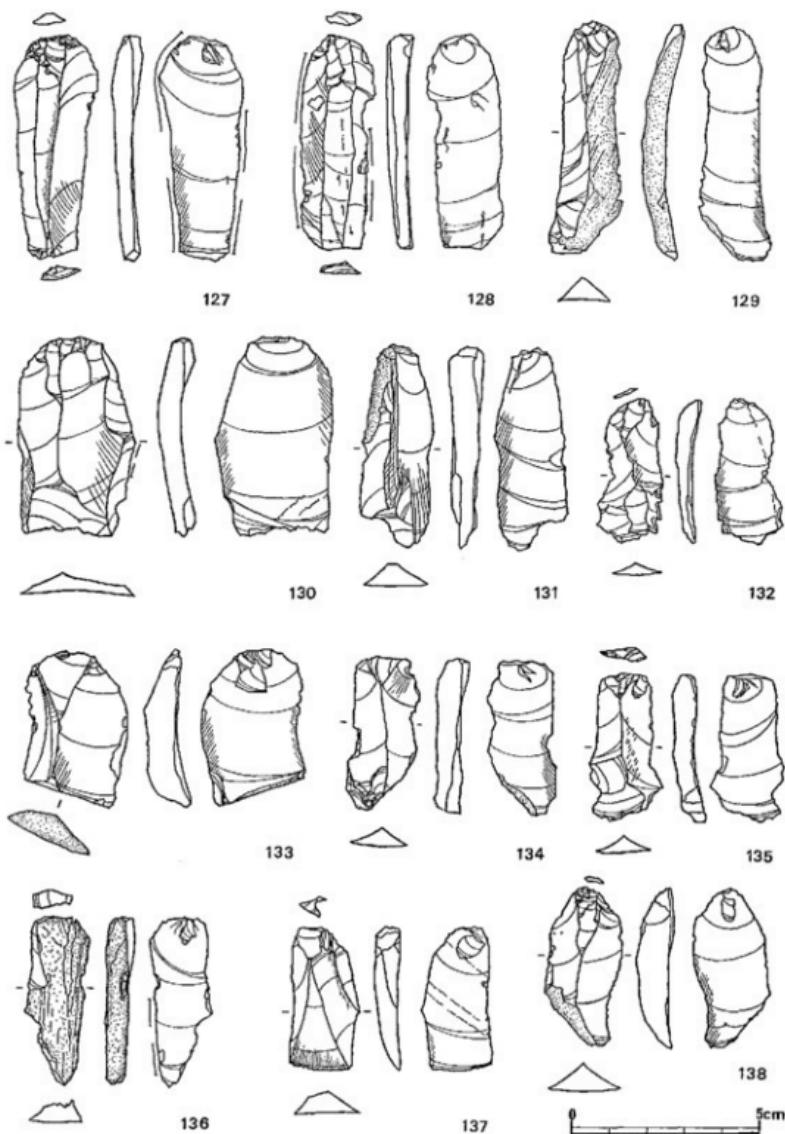


Fig. 65 二次調查出土石器實測圖 (2/3)

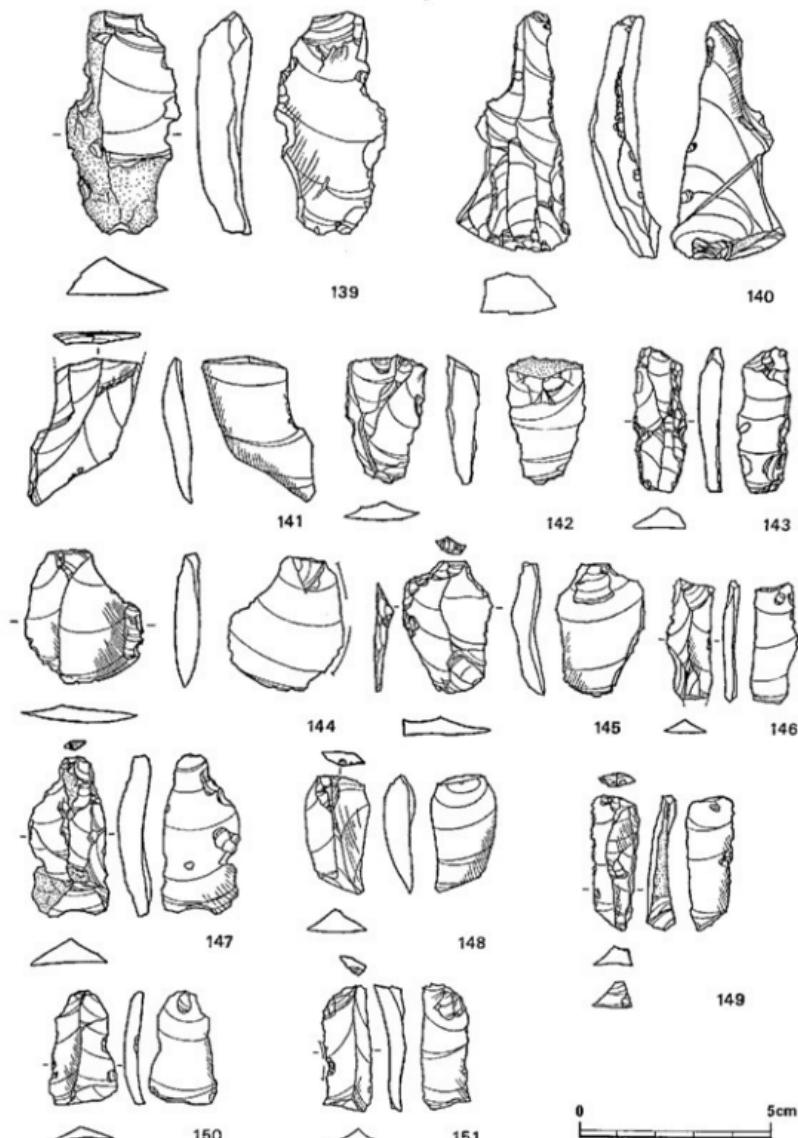


Fig. 66 二次調查出土石器実測図 (2/3)

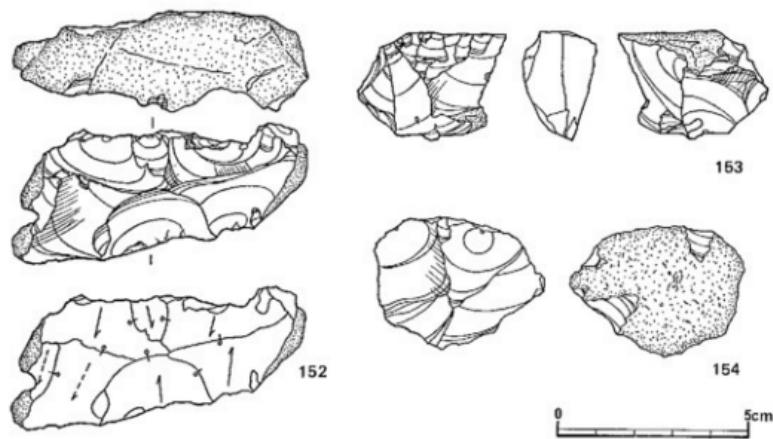


Fig. 67 二次調查出土石器実測図（2/3）

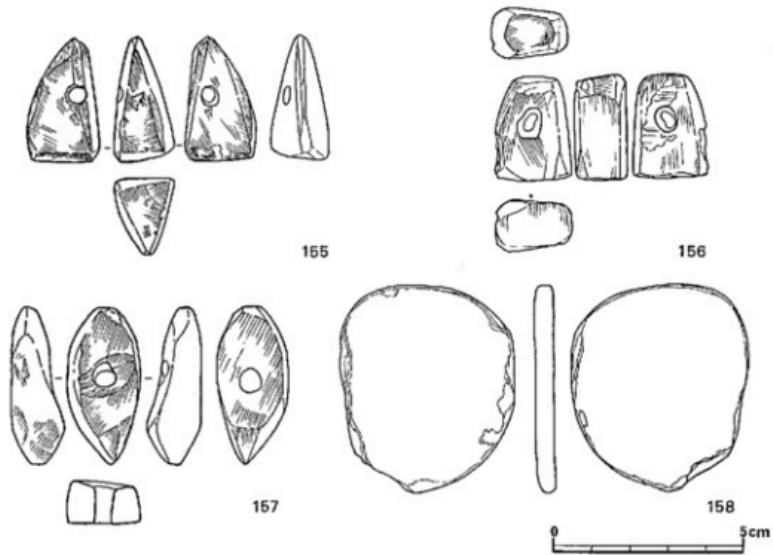


Fig. 68 二次調査出土石器実測図（2/3）

石斧 (Fig. 69~71, PL. 47)

長崎遺跡本調査において出土した30点中19点を図示した。磨製石斧が15点、打製石斧2点、その他4点である。縄文岩、玄武岩、安山岩、硬質砂岩、粘板岩、凝灰岩質があり石質は豊富である。20cm近くの大形のものから10cm内外の小形のものまである。刃部は両刃のものがほとんどで片刃状のものは1点のみである。

I類 大形で長さが20cm近くのもの

a 扁平なもの 159, 161

b 厚手のもの 165, 169, 171

II類 中形のもので刃部が左右対象とならないもの

a 大形始刃状のもので中形である 167, 170

b 刃部の片側が大きく内弯し左右対象とならない 173

III類 小形のもので断面は扁平となるもの

a 刃部が直線的なもの 172, 173, 174

b 刃部が円形のもの 175, 176

IV類 自然礫(自然面を残す)を利用しているもの 160, 162, 164, 166, 177

V類 片刃状の刃部をもつもの 168

以上5つに大別したが、石質・形態と本遺跡の石斧はバラエティーに富んでいる。特にV類の168は、弥生時代の代表的な石斧とされる柱状片刃石斧に酷似している。しかし本遺跡では、縄文時代中期～晩期の遺物が集中しており、この1点だけを弥生時代の遺物として取り上げにくい。そこで、縄文時代の遺跡である長崎県邑岐郡の名切遺跡出土の柱状片刃石斧や同県南高来郡の朝日山遺跡出土の扁平片刃石斧とも、酷似するし、朝日山遺跡出土の石斧も両頭である点などから、柱状片刃石斧は、弥生時代以前の石斧である可能性が十分あると思われるが断定はしがたい。今後の研究に期待したい。

参考文献

註1 長崎県教育委員会「名切遺跡」長崎県文化財報告書 第71集 1985

註2 長崎県小浜町教育委員会「朝日山遺跡」小浜町文化財報告書 第1集 1981

撫器・削器 (Fig. 72--1~5, PL. 48)

1, 2共に横に細長く、扁平で梢円形状を呈した撫器で、片側を欠損している。器種の縁辺に入念に2次加工を施している。

3~5は継長削片を利用した削器で、素材の一側斜部に2次加工を施し刃部を作り出している。1~5共に安岩製。

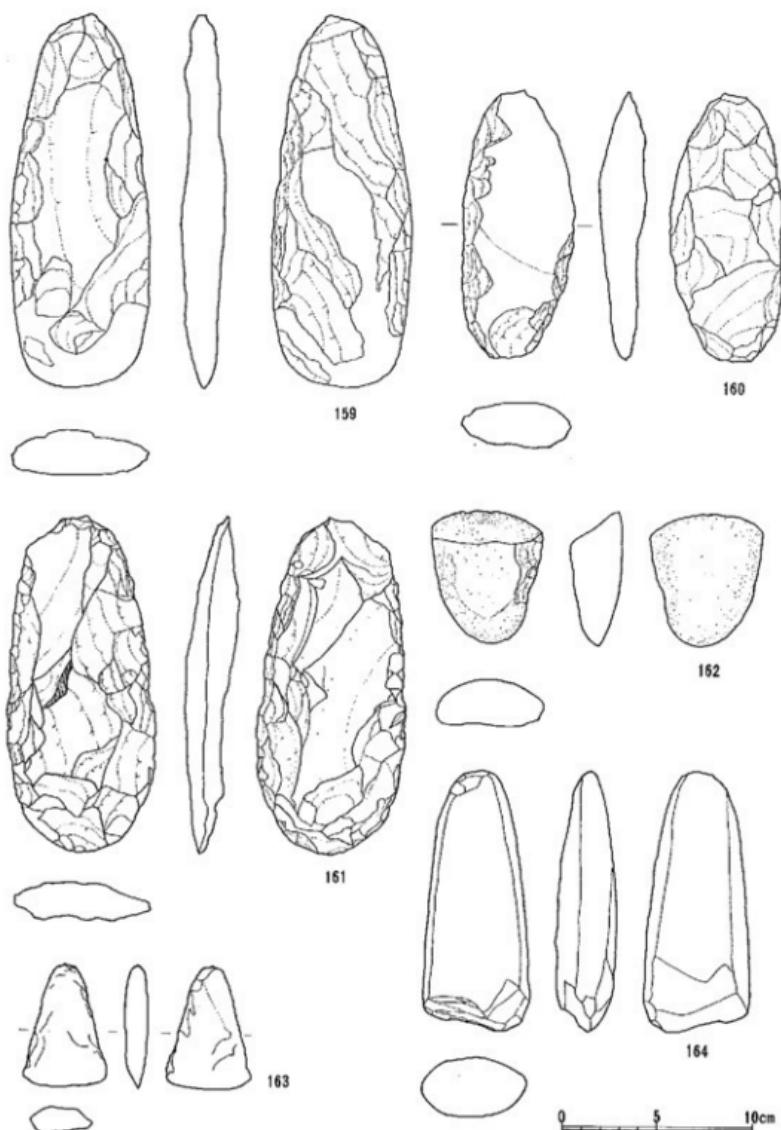


Fig. 69 第二次調查出土尖頭圖 (1/3)

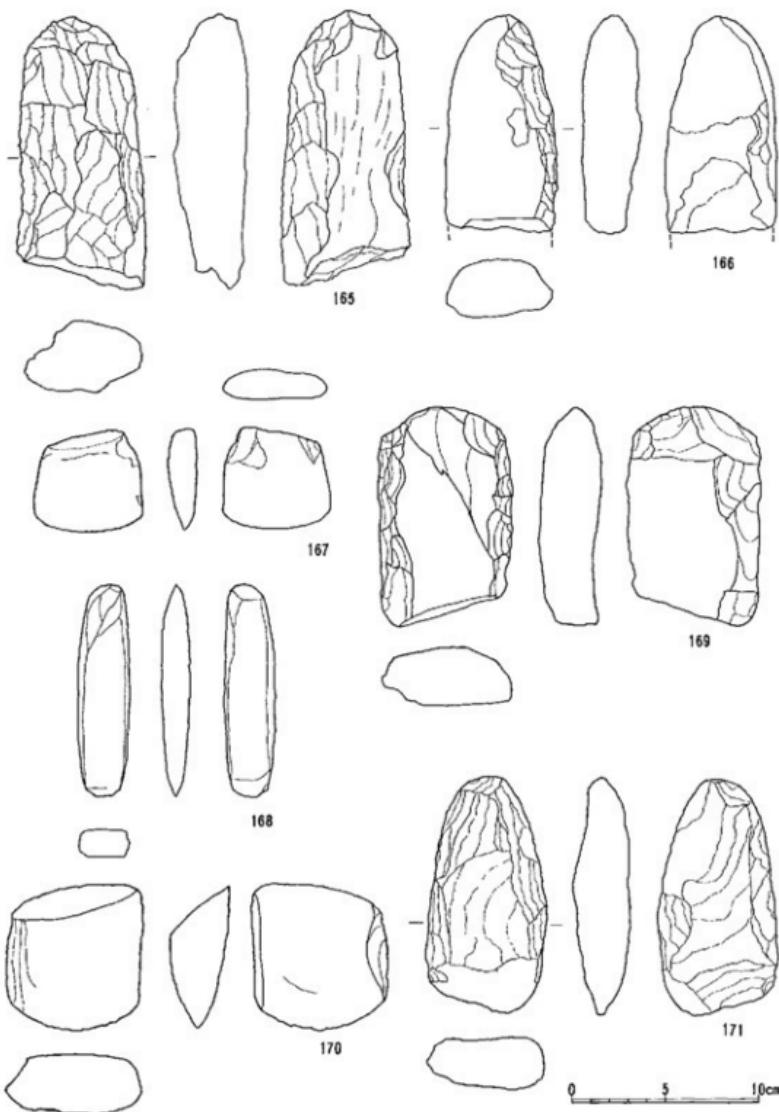


Fig. 70 二次調查出土実測図 (1/3)

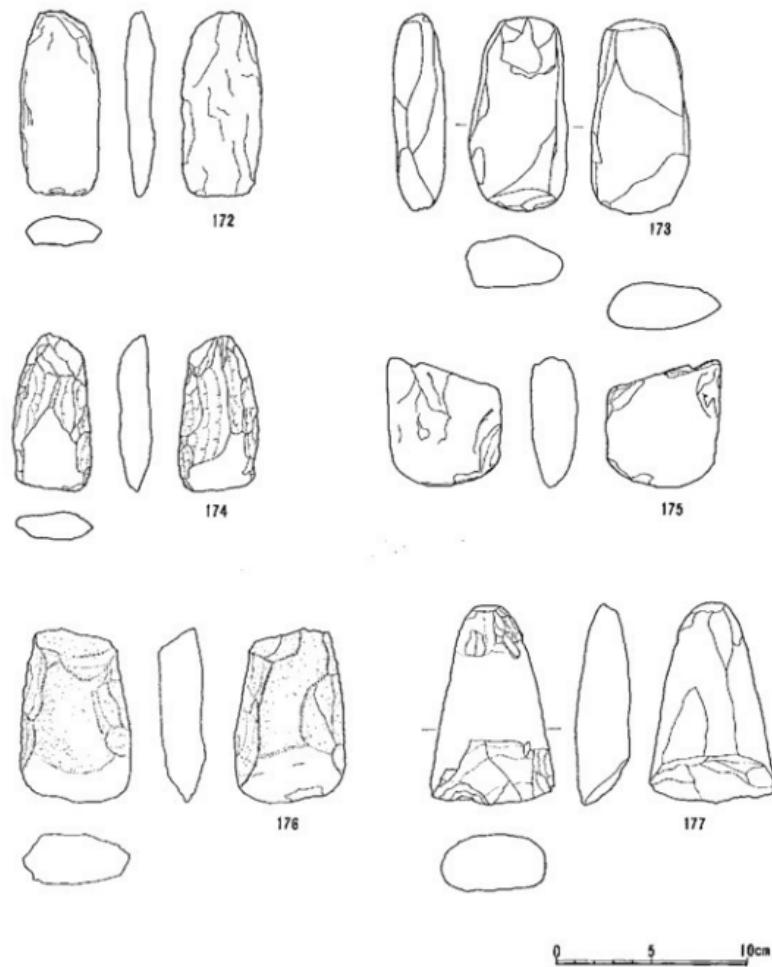


Fig. 71 二次調查出土石器圖 (1/3)

Tab. 13

番号	出土場所	法量 単位	石質	特徴	備考
159	II-2 136	19.4 42.0	凝灰岩	偏平な碑利用。刃部、胴部の一部に研摩痕。他の摩製石斧に比して著しく扁平で断面においてやや円角する。	凝製石斧
160	E-2 362	18.6 24.5	凝灰岩	自然面を片面に残し、他面より全周にわたって剥離整形。刃部に研摩痕。使用により刃部に欠損。	摩製石斧
161	H-3 13	17.9 4.8	玄武岩	胴部一部に研摩痕が認められるが全周にわたって剥離整形。刃部附近では、厚さがぐらくなりや内窓する。	局部摩製石斧
162	C-2 194	12.1	玄武岩	刃部のみ残存。両刃の刃部を丁寧に仕上げている。	摩製石斧
163	C-2 154	6.9 4.5	凝灰岩	バチ形を呈し、比較的小形の礫を利用。両刃で刃部を研摩し、縞が認められる。	摩製石斧
164	A-2 表接	12.2 3.1	安山岩	自然縞を利用し、刃部に使用による欠損。	
165	D-2 783	14.7 4.6	蛇紋岩	摩製石斧の未製品。	
166	A-2 45	11.6 2.0	硬質砂岩	片面に自然面を残し、他面より全周に剥離整形。	打製石斧
167	C-2 146	12.2 1.8	玄武岩	摩製石斧の刃部。両凸刃で刃縁は丸くなっている。	摩製石斧
168	G-2 188	11.2 7.6	粘板岩	断面は長方形を呈し、刃部に縞が認められる。両頭である。全面よく研かれており、刃部の一部欠損。	摩製石斧
169	N-4 表接	11.3 4.0	玄武岩	自然面を残し、全周にわたって剥離整形。基部を欠損	打製石斧
170	O-3 9	7.6 2.0	粘板岩	蛤刃、基部を欠損。	摩製石斧
171	B-3 19	13.6 2.0	蛇紋岩	刃部に研摩痕と使用による剥離が認められる。また胴部の一部にも研摩痕が認められる。	摩製石斧
172	D-2 203	7.6 2.0	玄武岩	小形の礫を利用。整形は片面に一次剥離面を残し、他面より剥離調整を行っている。	打製石斧
173	E-2 表接	10.1 2.0	蛇紋岩	基部の一部を欠損。刃部は両刃で斜めに縞が認められる。比較的早い整形。	摩製石斧
174	F-2 322	4.1 7.2	安山岩	刃部に研摩痕。他の部分は全周に剥離整形。小形の礫利用。	摩製石斧
175	T-1 32	6.7 1.2	蛇文岩	刃部のみ残り、蛤刃で両刃である。	摩製石斧
176	P-2 1	1.9 0.2	凝灰岩	刃部は研摩、他は全周にわたり剥離調整。	摩製石斧
177	N 3 2	10.8 2.6	玄武岩	刃部を研摩、研摩は胴部の一部まで施されているが他は、自然面である基部欠損	摩製石斧

笠状石器 (Fig. 72-183~186, PL. 48)

刃部の形態に特徴をもつ石器が 5 点出土している。2 次加工は器表裏面より鋭利な刃部と側縁部を作り出すように施され、胴部は刃部に比べて細くなり、刃部の両端が張り出して逆台形状で、断面は菱形を呈す。183~186 共に安山岩製。

この器種は機能面で漁具類を獲得するための切裁・起す・剝ぎ取る等の道具の一種であろう。

尖頭状石器 (Fig. 72-187, PL. 49)

小形の幅広な石器で、器表裏面より粗い 2 次加工を施し、先端および基部が尖るように作り出され、断面が梢円形状を呈す。他に 1 点出土。安山岩製。

錐状石器 (Fig. 72-188, PL. 49)

小形の剥離片を利用して、先端部が尖るように 2 次加工が施されている。安山岩製。

礫器 (Fig. 73-190~194, Fig. 74-195~198, PL. 49)

形態的に I ~ III 型に分類される。

第二次調查

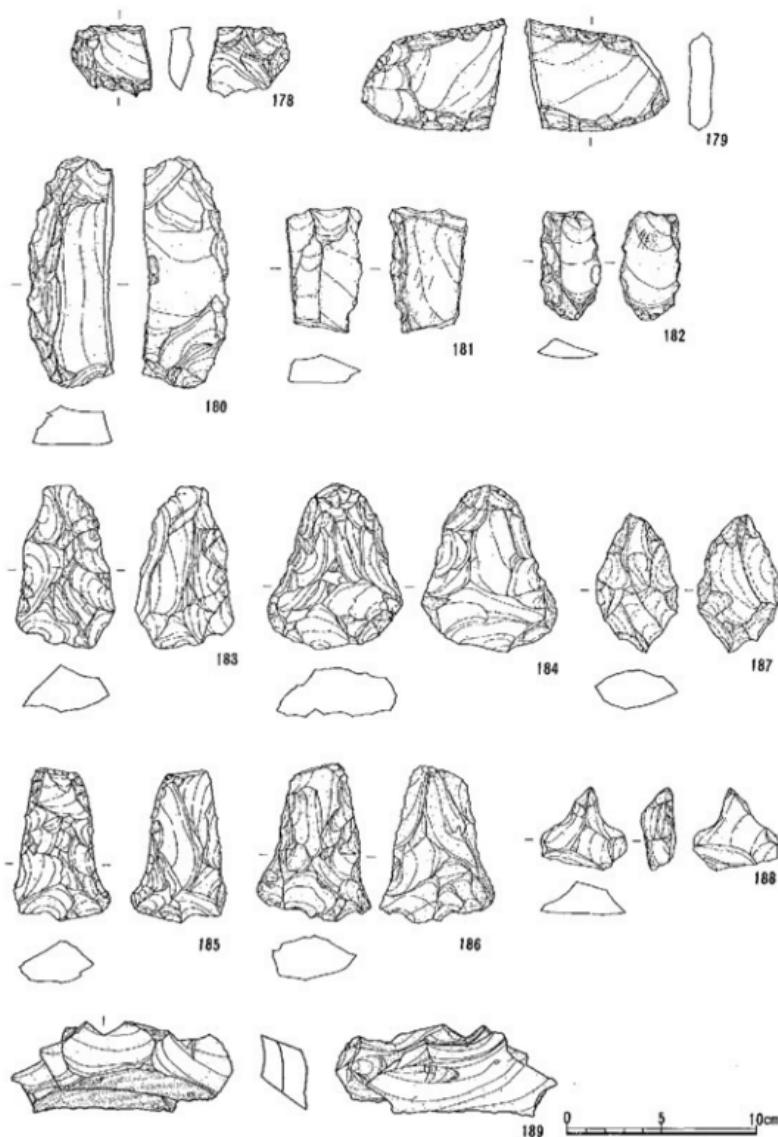


Fig. 72 二次調查出土石器實測圖

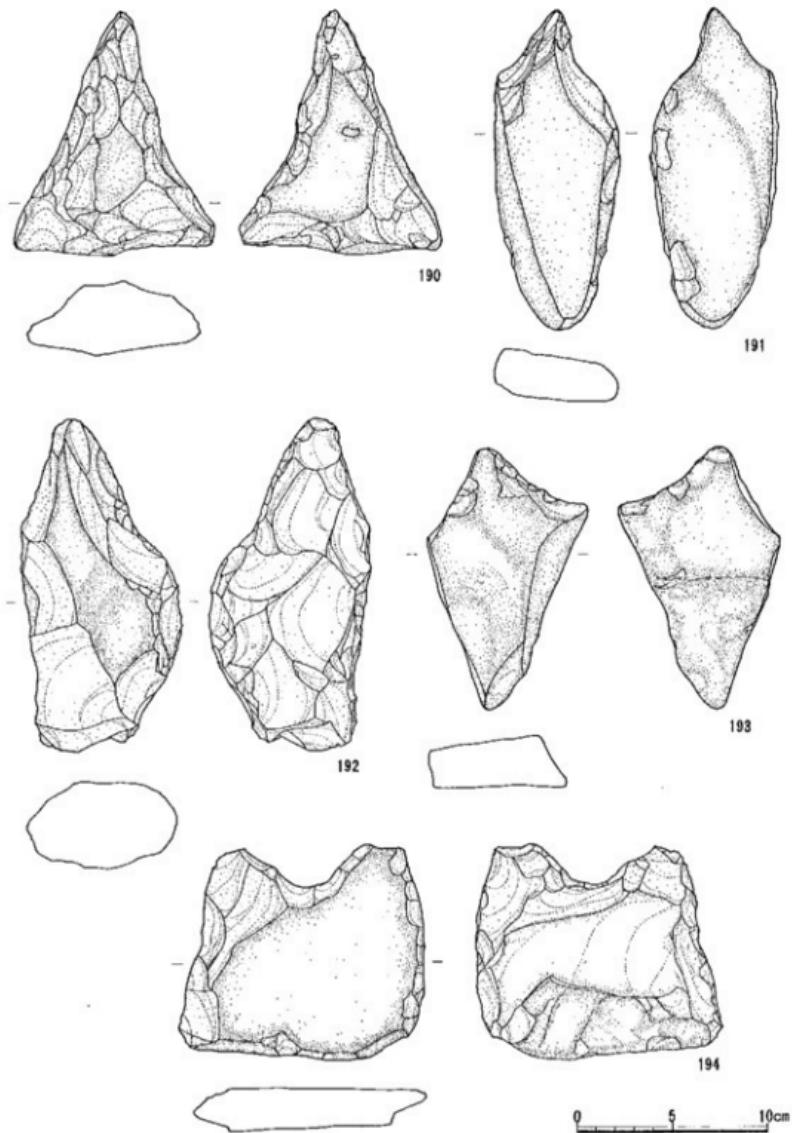


Fig. 73 二次調査出土石器実測図

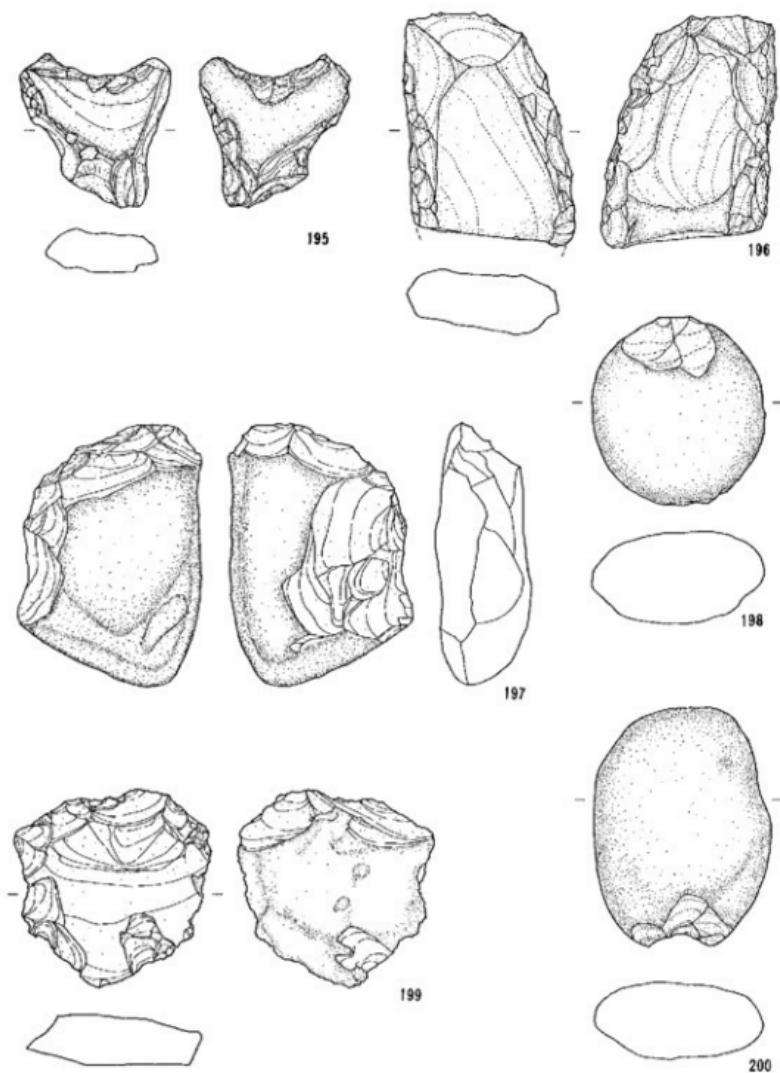


Fig. 74 二次調查出土石器夾測圖

0 5 10cm

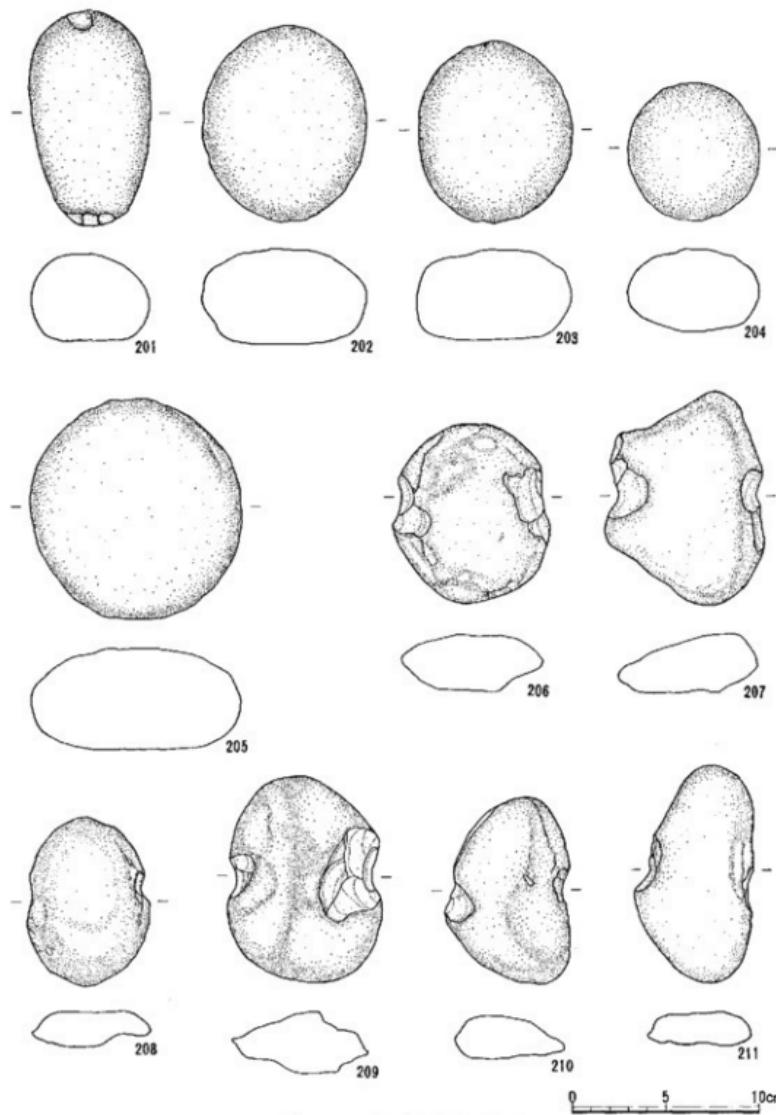


Fig. 75 二次調查出土石器尖測圖

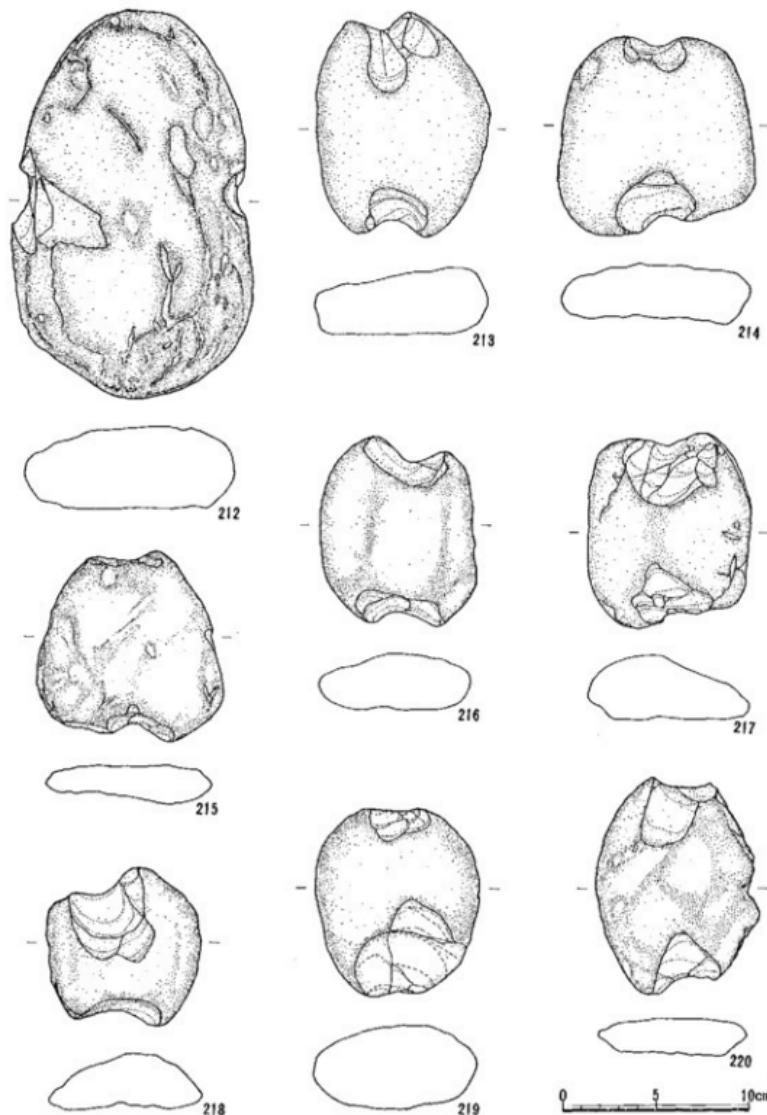


Fig. 76 二次調查出土石器實測圖

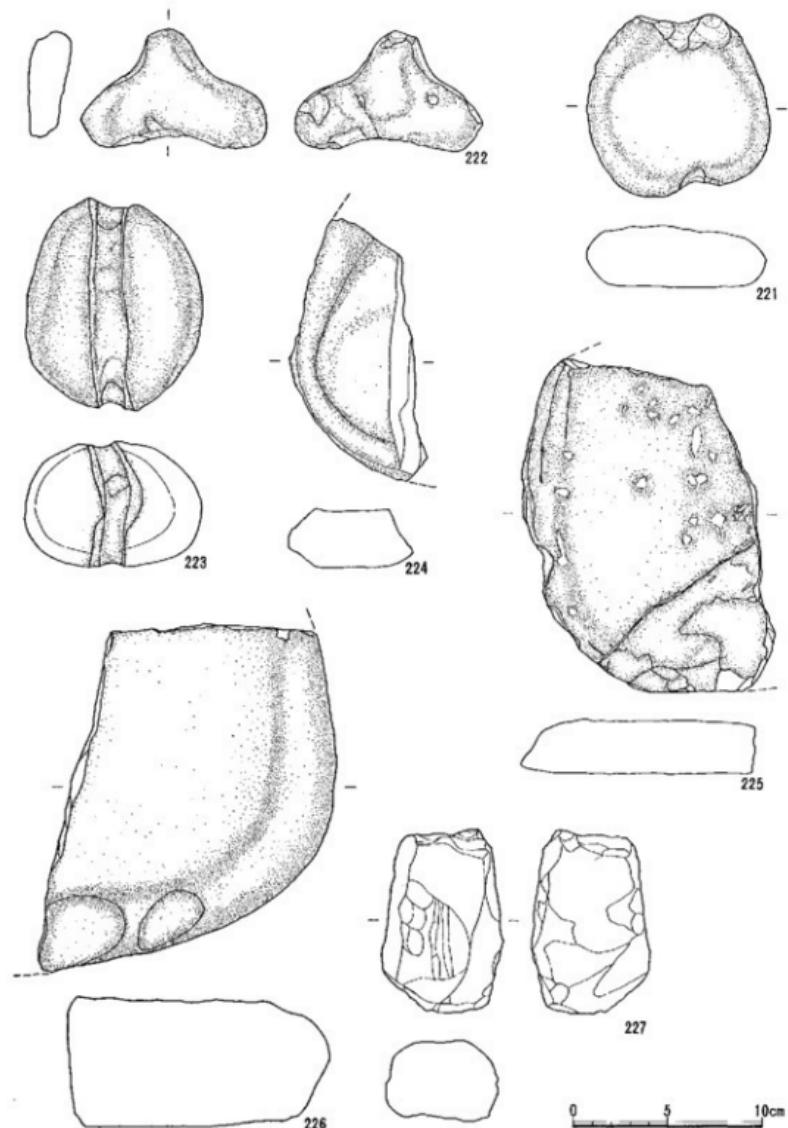


Fig. 77 二次調查出土石器實測圖

第二次調査

Tab. 14

擇 番 号	出 土 地 区	出 土 月 位	器 種	石 材	形 態 分 類	計 測 値 (m.m.)				備 考
						全 長	最 大 巾	厚 さ	重 量	
72-178		II	攝 鏽	安山岩		4.30	3.70	1.25	0.02	
179		II	"	"		7.65	5.90	1.25	0.07	
180		II	削 器	"		12.25	4.30	2.10	0.14	
181		II	"	"		6.65	3.95	1.50	0.05	
182		II	"	"		5.65	3.20	0.95	0.02	
183		II	笠 状 石 器	"		8.55	5.15	2.45	0.09	
184		II	"	"		8.35	7.00	3.09	0.16	
185		II	"	"		8.35	6.05	2.40	0.09	
186		II	"	"		8.05	5.05	2.25	0.07	
187		II	尖頭狀石器	"		7.30	4.30	2.00	0.05	
188		II	錐 状 石 器	"		4.05	4.45	1.66	0.03	
189		II	剝 片	"		11.75	4.6	2.50	0.12	
73-190		II	疊 器	"	I型	12.75	1050	3.95	0.40	
191		II	"	砂 岩	"	16.66	6.51	2.56	0.32	
192		II	"	"	"	17.40	8.05	4.60	0.68	
193		II	"	安山岩	"	13.65	8.40	2.75	0.30	
194		II	"	花崗岩	II型	12.42	11.18	2.83	0.47	
74-195		II	"	安山岩	"	7.61	7.98	2.65	0.14	
196		II	"	玄武岩	III型	11.19	8.43	3.81	0.51	
197		II	"	"	"	13.19	11.19	4.83	0.87	
198		II	截 石	安山岩	"	9.81	8.97	4.79	0.33	
199		II	礪 器	"		9.95	9.10	4.80	0.59	
200		II	截 石	玄武岩		12.64	9.37	3.96	0.68	
75-201		II	"	安山岩		11.15	6.18	4.61	0.50	
202		II	磨 石	玄武岩		10.31	8.75	5.06	0.66	
203		II	"	安山岩		9.56	8.20	5.05	0.56	
204		II	"	"		7.22	6.96	4.44	0.33	
205		II	"	玄武岩		11.59	11.13	5.31	1.02	
206		II	石 鑄	"	B	9.54	3.06	3.06	0.34	
207		II	"	安山岩	"	11.29	8.18	3.24	0.37	
208		II	"	玄武岩	"	8.88	6.31	2.56	0.15	
209		II	"	"	"	10.78	8.11	3.45	0.38	
210		II	"	"	"	9.77	6.31	2.48	0.21	
211		II	"	砂 岩	"	11.46	6.15	2.38	0.21	
76-212		II	"	玄武岩	"	20.59	12.80	4.35	1.73	
213		II	"	砂 岩	A	11.92	9.09	3.66	0.45	
214		II	"	安山岩	"	10.32	10.07	2.96	0.51	
215		II	"	玄武岩	"	10.20	10.01	2.31	0.29	

Tab. 15

探 団 番 号	出 土 地 区	出 土 部 位	器 種	石 材	形 态 分 類	計 測 値 (cm. g.)				備 考
						全 長	最 大 巾	厚 さ	重 量	
76-216		II	石 鍤	砂 石	A	9.70	8.17	2.90	0.36	
217		#	#	玄武岩	#	10.15	8.60	3.69	0.45	
218		#	#	安山岩	B	8.21	8.19	3.15	0.23	
219		#	#	#	A	9.95	8.71	4.46	0.51	
220		#	#	玄武岩	C	11.52	8.35	2.23	0.25	
77-221		#	#	安山岩	A	9.49	9.43	3.30	0.46	
222		#	#	玄武岩	C	9.82	5.71	2.10	0.11	
223		#	#	安山岩	C	11.20	9.45	6.65	0.84	
224		#	砾 石	砂 岩		14.28	6.57	3.55	0.38	
225		#	#	#		17.20	12.36	3.02	1.08	
226		#	台 石	安山岩		18.27	13.53	6.80	2.99	
227		#	不明石器	滑 石		9.70	6.35	4.30	0.42	

礫に2次加工を施し、尖頭状の突出部分を作り出すもので、尖頭状礫器のI型。

礫の一端に2次加工を施し、凹み部分を作り出すもので、双角状礫器のII型。

円礫にI・II型程の齊一性をもたず2次加工を施したものIII型。

以上でI型は190~193を含め7点、II型は194~195を含め3点、III型は196、197、199を含め16点の総数26点を数える。

器種の形態的な特徴がそれぞれ型式分類されたもので、海の漁貝類を捕る・割る行為に使用する道具の一種と考えられ、機能面での差違が器種形状の相異をもたらしたのであろう。

敲石 (Fig. 74-198, 200, Fig. 75-201, PL. 50)

敲石は総数26点が出土。この3点共に器種長軸の両端に数次の打撃痕が認められる。

磨石 (Fig. 75-202~205, Fig. 75-202~205, PL. 50)

磨石は総数25点を数える。図示したのは4点で玄式岩・安山岩の円礫を利用している。

石鍤 (Fig. 75-206~211, Fig. 76-212~220, Fig. 77-221~223, PL. 50, 51)

石鍤は素材礫石に2次加工を施す部位により分類した。

A類は素材礫石の長軸の両端に2次加工を施したもの16点。

B類は素材礫石の短軸の両端に2次加工を施したもの24点。

C類はその他の不規則なものと、223の様に縦で縛って磨耗痕跡が著しいものも含め8点。

以上のように石鍤は総数48点を数え、石材は砂岩、玄式岩、安山岩の円礫を利用している。

砥石 (Fig. 77-224, 225, PL. 51)

砂岩製の砥石が3点出土しているが、大部分を欠損しているが、器表面に磨耗痕が顕著にみられる。

台石 (Fig. 77-226, PL. 51)

226は大半を欠損しているが、扁平で大きな安山岩礫を利用したものである。擦裂痕は観察出来なかったが、台石中央部分は磨滅した痕跡がみられる。総数4点出土。

不明石器 (Fig. 77-227, PL. 51)

滑石製で方柱状を呈し、器表裏面および先端部に加工痕がみられる。滑石は石材としてはやわらかく、敲く・磨くという機能面は考えられず、不明である。

5. 遺構 (Fig. 78)

不明遺構 I 基を D—2 区北側に確認した。長軸約 1 m, 短軸 70cm, 深度 25cm を測るもので、充填土は茶褐色を呈する二段構造のもの。充填土は茶褐色を呈し、遺物は含まれていなかった。

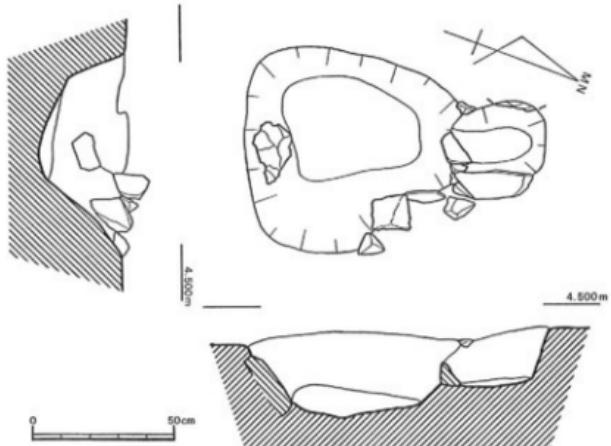


Fig. 78 遺構実測図



遺構写真

III 総 括

一 殿崎遺跡出土の土器について

土器からみた殿崎遺跡の変遷をまとめると次のようにだろう。

殿崎 I 期 楓文中期前・中葉—末葉

II 期 “ 後期前葉

III 期 “ 後期中葉

IV 期 “ 晩期後葉

V 期 弥生中期後葉

殿崎 I 期は並木式と阿高式土器を中心とする時期である。只並木式土器は量的に極めて少なく主体ではない。又、阿高式土器は 2 次調査区域、A, B, C, D-2, 3 区を中心とするが阿高式土器の細分から言えれば後半に属する資料が多いようである。^{註1}

殿崎 II 期は、中津式、南福寺式、出水式を中心とするもので、阿高式系土器としては量的に最も多い。2 次調査区域でその中心となる土器である。注意すべきは微量ながらも瀬戸内系土器の混入であろう。南福寺式、出水式土器の中に在って客体的な存続ながら、後続する磨消繩文系土器の萌芽がここに見られる。

以上の土器にはローリングを受けている資料も多く海水に一度洗われた可能性も考えられよう。

殿崎 III 期は御手洗 A 式、鐘ヶ崎式、北久根山式、そして市来式を含む時期である。特に一次調査区域、すなわち TP 1 を中心とする追跡東側部分はこの時期の資料が圧倒的で、中でも鐘ヶ崎式が主体を占めているようである。御手洗 A 式や市来式土器はあくまで客体として併存している。地点によって移動が認められるが、この II 期、III 期が本遺跡の中心である。

殿崎 IV 期、V 期は共に散片のみの出土であるので詳細は不明である。

以上が土器の変遷からみた遺跡の概略である。中期前・中葉から後期中葉までの資料は比較的連続するが、中期後葉～晩期前葉、そして晩期末～弥生中期前葉までの資料が欠落する。後期後葉以降の遺跡の利用が断続的であった事が判る。

次に、本県に於ける中期前・中葉～後期中葉に至る遺跡の変遷を時期的に概観してみたい。(Fig. 79~82)

Fig. 79 は並木式から阿高式（阿高式後半の土器は地域によって坂の下 I 式、阿高 III 式、岩崎下層式分布圖と細分されているが、ここでは阿高式土器として包括しておく。）を含む遺跡で、現在県下で 56ヶ所が知られている。遺跡の規模等、内容に程度の差こそあれ縄文時代の遺跡としては一番多い部類に属する。立地的には海岸部が圧倒的であるが、諫早市川頭遺跡（標高 260m）、大村市大多武堀（標高 330m）、小長井町山茶花遺跡（標高 385m）等、高所に位置

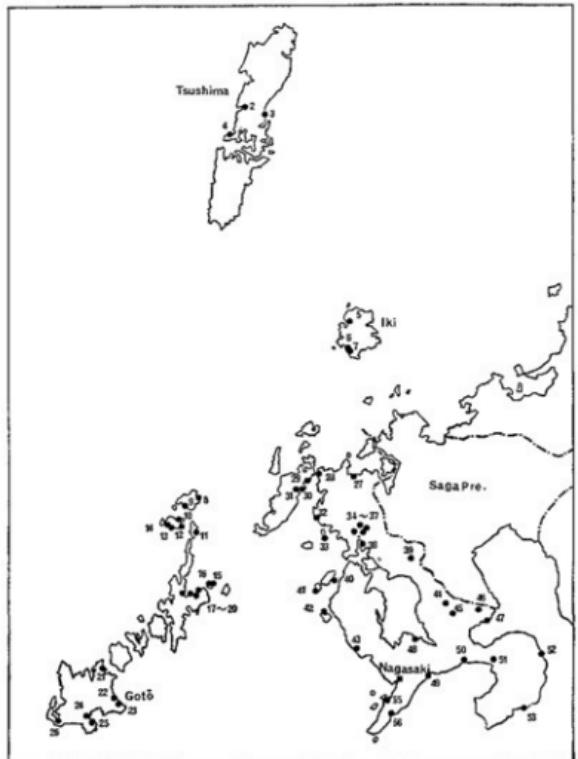


Fig. 79 並木・阿高式土器分布図

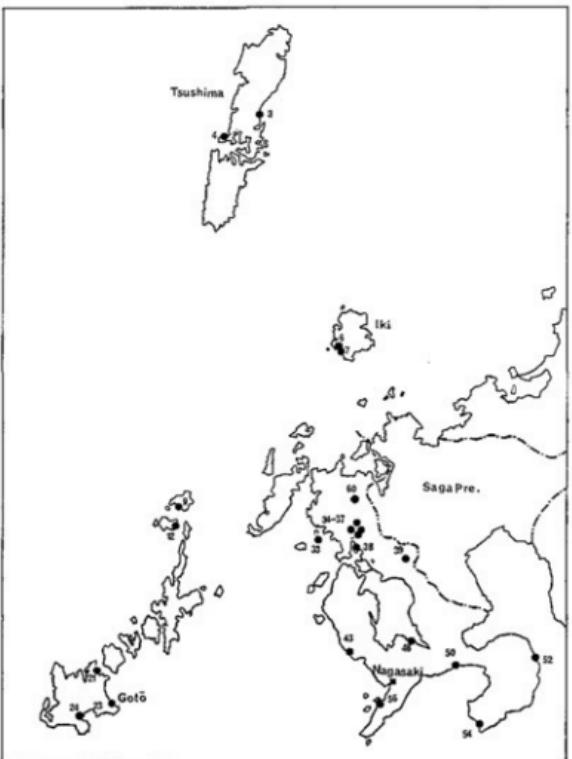


Fig. 80 南福寺・凸水式土器分布図

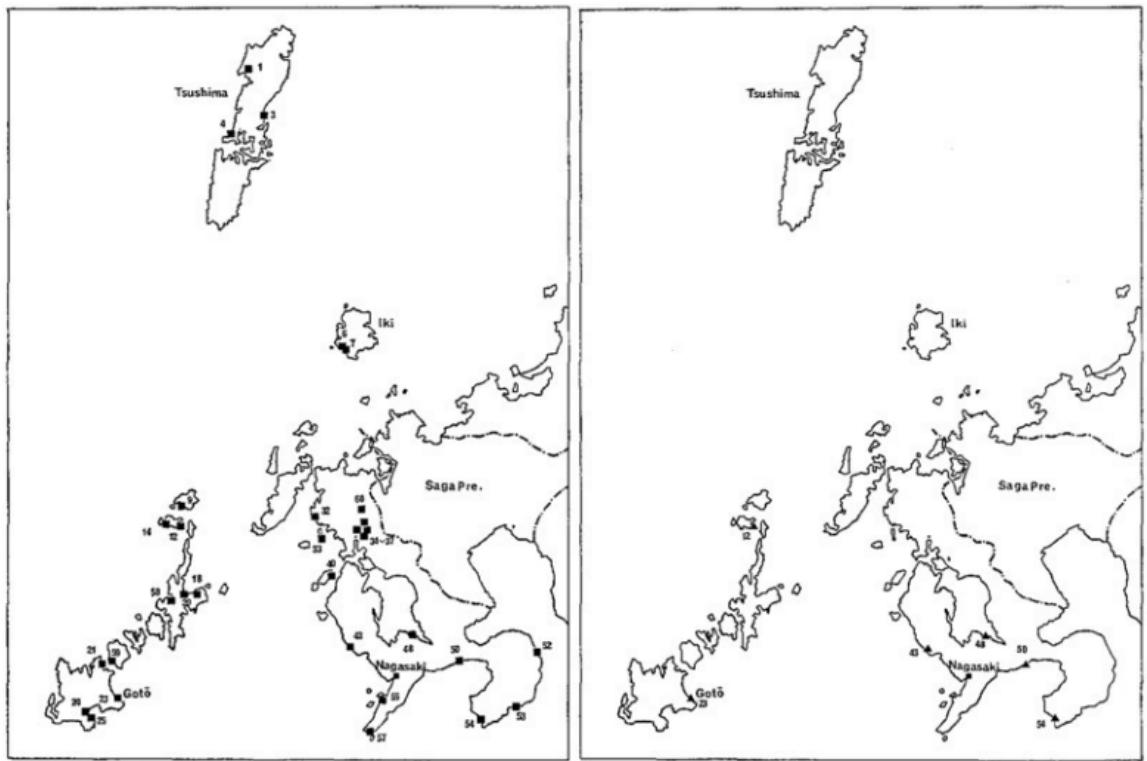


Fig. 81 銚ヶ崎・北久根山式土器分布図

Fig. 82 市来式土器分布図

Tab. 16 繩文中期～後期中葉遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	立地	出土遺物	備考	文献
1	シタル貝塚	上原郡上原町志多宿	標高3m 山状地上	貝殻壳灰文、鍔・縄・結合釣針	300m程度	1
2	吉田貝塚	上原郡神町吉田	標高10m 南岸斜面	阿高、夜白、先住、磨目太		2
3	佐賀貝塚	上原郡神町佐賀				3
4	西加藤山遺跡	上原郡豊玉町豊崎	南高台地土 岩成	阿高、南福寺、有孔円盤		4
5	松崎遺跡	尼岐町松本町南1本	海岸	前期～中期		5
6	鐘ヶ崎遺跡	岩壁有鷺ノ浜片原塚	標高2.5m 海底遺跡	轡、管燈、阿高、南福寺、出土水、鍔・縄他		6
7	名切遺跡	〃	標高2.5m 南庭遺跡	轡、菅燈、茎木、阿高、鍔・縄、船の足、蛇頭	中期中心・ドングリP+I	5
8	長崎鼻遺跡	北松浦郡久賀長崎鼻	標高10m 南岸段丘上	阿高		7
9	宮ノ首城	〃 宮ノ首	海岸部	前期～中期～後期	湘昭泰平氏旗	7
10	相津遺跡	〃 小値賀町前方郡	南高台地斜面	阿高、共生		8
11	野崎遺跡	〃 〃 野崎島	標高3～14m	茎木、阿高、有孔円盤		8
12	殿崎遺跡	〃 〃	標高3～5m	茎木、阿高、南福寺、出土水、鍔・縄他		本物
13	津津遺跡	〃 〃 苗吹跡		中庭		9
14	矢原遺跡	〃 津浦町矢橋	標高3m 潟原部	菅燈、阿高、南福寺、出土水、鍔・縄他		10
15	浜治遺跡	南松浦郡有川町頭ヶ島	海岸部小砂丘上	轡、菅燈、阿高		11
16	白浜遺跡	〃	〃	前期～晚期		11
17	西駿遺跡	〃 新島町駿	緩状地	菅燈、阿高、鍔・縄		12
18	有川港遺跡	〃 有川町	標高4m	阿高		12
19	浜海中遺跡	〃 各原町浜	〃	〃		12
20	立石遺跡	〃 立山	海岸部	轡、菅燈、阿高、鍔・縄、北久根山地		13
21	鶴川貝塚	〃 鶴見町咲宿	標高3m 潟原部	茎木、阿高、南福寺、出土水		14
22	水の庭遺跡	福江市下大津町	標高9m 南岸台地上	阿高、晚期		15
23	白浜貝塚	〃 向町	標高4m 海岸部	茎木、阿高、南福寺、鍔・縄、市来船		16
24	宮下貝塚	南松浦郡新町志摩尾郷	標高5～10m	茎木、茎葉、阿高、鍔・縄、北久根山地		17
25	女鬼遺跡	〃 玉・土取郷	標高10m 海岸段丘上	阿高、鍔・縄、椎	西中英治氏旗	13
26	萬瀬遺跡	〃 玉の瀬島鳥嶺	標高0～10m	茎木		13
27	檜原田遺跡	佐留市白坂尻	標高7m 島高丘陵斜面	菅燈、阿高		18
28	つぐめの鼻遺跡	北松浦郡田平町野田兔	標高5m 南岸部	轡、菅燈、阿高		19
29	千里ヶ浜遺跡	平戸市内町千里ヶ浜	標高0m 海底	菅燈、阿高		13
30	宝亀遺跡	〃 宝亀町宮崎・龟石	標高0～20m 沙浜	阿高		13
31	沖田遺跡	〃 宝亀町沖田	標高0～10m 訓耕地	菅燈、阿高		13
32	古田遺跡	北松浦郡小竹町猪町防免	標高2m 砂浜	阿高、北久根山地		20
33	翁ノ本遺跡	佐世保市翁島町	標高3.5～5m 砂丘	轡、菅燈、阿高、南福寺、晚期他		21
34	下本山石路	〃 下本山町辺野	標高16m 河岸段丘上	轡、菅燈、阿高、南福寺、鍔・縄他	鉄院	22
35	若下削穴	〃 松浦町	標高100m 河岸段丘上	轡、菅燈、阿高、北久根地	測穴	23
36	梶原寺跡	〃 梶原町	標高89.5m 河岸段丘上	豆粒文、陰文、瓜形文、附型文、前・晚	測穴	24
37	大門銘穴	〃	標高69m 河岸丘上	菅燈、阿高、鍔・縄、北久根山地他	測穴	25
38	神ノ穴	〃 東天神町		阿高、鍔・縄	測穴	23
39	山角遺跡	佐賀杵町山角町舟本塚	標高20m 水田	阿高、南福寺		26
40	寺山遺跡	西波杵郡大久保町	標高5m 砂浜	菅燈、阿高		27
41	本郷遺跡	〃 砂原町本郷	砂浜段丘	阿高		27
42	串島遺跡	〃 大瀬戸町串島	標高4m 砂浜	阿高		28
43	出津遺跡	〃 佐賀町出津	標高6m 砂丘	阿高、出土水、鍔・縄、北久根山、市来船		29
44	大多武道遺跡	大村市	標高330m	阿高地		13
45	川頭遺跡	諫早市	標高260m 平坦地	阿高地	上抵	13
46	山茶花遺跡	北高来郡小長井町山茶花	標高400m 平坦地	阿高		30
47	自島遺跡	〃 〃	〃			26
48	熊野神社遺跡	西波杵郡多良見町舟出津	標高2m 旧海岸線	轡、菅燈、阿高、南福寺、由木、御牛曳月、幸運地	後期中心	31
49	瓦町遺跡	豆畠山浅木町	砂丘	阿高		26
50	有喜貝塚	諫早市松葉町	標高4～35m 丘陵北端部	阿高、南福寺、出土水、幸運地、鍔・縄、市来船		32
51	愛津遺跡	南高来郡愛野町愛津		阿高		33
52	三会下町遺跡	嘉瀬市三会下町	海岸段	轡、菅燈、阿高、南福寺、鍔・縄、北久根山	測底	34
53	紫崎遺跡	南高来郡有家町紫崎	標高0m	阿高、北久根山	〃	35
54	加津佐貝塚	〃 加津佐町水月生瀬		出土水、鍔・縄、市来		36
55	麻瀬遺跡	賀茂町麻瀬町	標高4m 砂丘	茎木、阿高、南福寺、出土水		37
56	石遺跡	西波杵郡三町町島石	砂丘	阿高地		25
57	鷺岬遺跡	〃 尾崎町鷺岬	砂丘			13
58	而ノ瀬遺跡	南松浦郡上五島町而ノ瀬	標高0～10m 海岸	鍔・縄		13
59	田ノ瀬遺跡	福江市田ノ瀬町	砂浜	鍔・縄		38
60	若屋口遺跡	北松浦郡佐知原町若屋口	標高65m 岩陰遺跡	轡、菅燈、南福寺、鍔・縄、北久根、御牛汎入		39

する例も少なくない。

次に、同じ阿高式系土器であるが、後期に入るとされる南福寺式、出水式が出土する遺跡は19遺跡と量的には減少する (Fig. 80)。この時期の遺跡の立地は、佐世保市に於ける洞穴遺跡の数例を除くと、ほぼ海岸部に限定される感がある。この時期は、例えば熊本県の場合では、逆に生活面が海岸部のみならず丘陵地まで拡大し遺跡数が増大すると対照的である。^{註3} 只、本県に於ける傾向が、後述する如く即遺跡の衰滅に結びつくものではない。

これに続く磨消繩文系土器である鐘ヶ崎式、北久根山式を伴う遺跡は、前記南福寺式、出水式土器が出土する遺跡とほぼ重複する傾向をもつ (Fig. 81)。これは、同一遺跡内に於いて一部時期的に重複しながらも阿高式系土器から磨消繩文系土器への推移が比較的自然に行なわれた事を示していよう。諫早市有喜貝塚、長崎市深堀貝塚、外海町出津貝塚、そして殿崎遺跡等中期末～後期初頭の段階ですでに磨消繩文系土器の移入は認められるが、あくまで断片資料にすぎず、その時期の主体はあくまで阿高式系土器である事が証左である。只、老岐名切遺跡に於いては、後期土器の資料の中に南福寺式・出水式土器の存在が希薄で、量的には少ないながらも当初より瀬戸内系土器の搬入が認められる。位置的に北部九州に近い為であろうか。

なお、この時期の遺跡の規模は、水月永瀬貝塚、有喜貝塚、深堀貝塚、出津貝塚、白浜貝塚、殿崎遺跡、佐賀貝塚等、それまでの阿高式の時期の遺跡に比して、数量的には減少するものの、規模は増大し、出土遺物の量もはるかに凌駕する傾向をもっている。

本県における阿高式系土器と磨消繩文系土器の関係については、「……この後期中葉は、土器組成の変化等は不明な点が多いものの、長崎地方において磨消繩文土器が一定量を占めるようになる時期である。^{註4} ……」、「……北部九州においては後期初頭にいきなり磨消繩文土器を主体とする土器組成へと変化する。……しかし後期前葉の段階では、外來系土器が作られるのはローレベルのみのようであり……」、後期中葉（鐘ヶ崎式系土器のⅠ期）になると……、阿高式系上器（御手洗A・C式）と磨消繩文土器（鐘ヶ崎式系土器）の両者が完全なセットをなして併存することになる。……そして次の段階（鐘ヶ崎式系土器のⅢ期）になると、磨消繩文土器がハイレベルを独占し、阿高式系上器はレベルダウンすることになるのである。」^{註5} という田中氏の論巧とよく符号する。

南九州を分布の中心とする市来式土器は、現在6遺跡に於いて確認されている (Fig. 82)。何れも海岸部の遺跡で、それ自体が主体となる事は無く、鐘ヶ崎式、北久根山式土器と共に伴する。明確な事例では殿崎遺跡が北限である。

この市来式土器にみる如く、海（対馬海流）を媒介とする各時期に於ける南九州との交流はかなり活発であったらしい。例えば、小値賀町神ノ崎遺跡では弥生～古墳時代に至る墳墓の中に北薩摩に顕著な地下式板石積石室墓が連続と築かれている事が知られている。西海岸を活動の場とする海人族の伝統の所産であり、前期曾畠式土器の広がりをも含めて、その祖型をみる思いである。

第二次調査

- 註 1 田中良之「中期・高式系土器の研究」古文化論叢 第6集所収 1979
- 2 同上論文
- 3 「新熊本の歴史 1. 古代（上）」
- 4 田中良之「磨消绳文土器伝播のプロセス」古文化論集 上巻所収 1982
- 5 同上論文
- 6 対馬島町佐賀貝塚でそれらしき小器が出土しているらしいが現在整理中で明確でないという。正林謙氏教示。
- 7 小値賀町教育委員会「神ノ崎遺跡」小値賀町文化財調査報告書 第4集 1984

表文献

- 1 駒井和愛他「考古学からみた対馬」対馬の自然と文化 所収 1964
- 2 坂田邦洋「対馬の遺跡」長崎県文化財調査報告書 第20集 1975
- 3 正林謙「南北市郷」の島「対馬」韓国文化 9月号所収 1985
- 4 長崎県教育委員会「対馬一浅茅湾とその周辺の考古学調査一」長崎県文化財調査報告書 第17集 1974
- 5 長崎県教育委員会「名切遺跡」長崎県文化財調査報告書 第71集 1985
- 6 穂山順、田中良之「志波・鎌崎海岸遺跡について」九州考古学 No. 54所収 九州考古学会 1979
- 7 長崎県教育委員会「五島遺跡調査報告」長崎県文化財調査報告書 第二集 1964
- 8 小値賀町教育委員会「町内遺跡分布調査・1」小値賀町文化財調査報告書 第5集 1985
- 9 萩原博氏教示。
- 10 小値賀町教育委員会「小値賀町郷土史」 1978
- 11 長崎県教育委員会「浜泊遺跡」長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅱ所収 長崎県文化財調査報告書 第45集 1979
- 12 久原幸二氏教示
- 13 長崎県遺跡地名カード
- 14 長崎県教育委員会「鍋川貝塚」長崎県埋蔵文化財調査集報V 長崎県文化財調査報告書 第57集 1982
- 15 福江市教育委員会「水の窓遺跡」福江市埋蔵文化財調査報告書 第1集 1976
- 16 福江市教育委員会「白浜貝塚」福江市文化財調査報告書 第2集 1980
- 17 長崎県教育委員会「宮下遺跡調査報告一解説篇一」長崎県文化財調査報告書 第9集 1971
- 18 長崎県教育委員会「櫟原遺跡」長崎県文化財調査報告書 第76集 1985
- 19 1986年報書審査刊行予定
- 20 長崎県小佐々町教育委員会「古田遺跡」小佐々町文化財調査報告書 第1集 1985
- 21 佐世保市教育委員会「宮の本遺跡」佐世保市埋蔵文化財調査報告書 1980
- 22 佐世保市教育委員会「下木山岩陰」 1972
- 23 麻生 優「岩下洞穴の発掘記録」佐世保市教育委員会 1968
- 24 麻生 優著「泉福寺洞穴の発掘記録」佐世保市教育委員会 1984 他
- 25 佐世保市教育委員会「大門洞穴縄文発掘調査報告書」 1981
- 26 長崎県教育委員会「山角遺跡」長崎県埋蔵文化財調査集報 IV所収 長崎県文化財調査報告書 第55集 1981
- 27 大島町教育委員会「寺島遺跡予備調査報告書」大島町文化財調査報告書 第1集 1981
- 28 長崎県教育委員会「串島遺跡」長崎県文化財調査報告書 第51集 1980

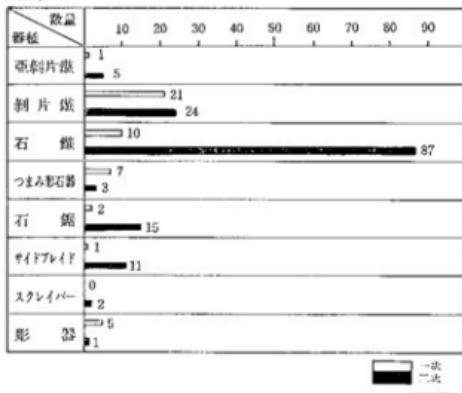
- 29 外海町教育委員会「山津遺跡」外海町文化財調査報告書 第2集 1983
- 30 正林 譲「小長井町の先史・古代」小長井町郷土誌所収 小長井町 1976
- 31 多良見町教育委員会 同志社大学考古学研究室編「伊木力・熊野持社遺跡」 1985
- 32 銚子市教育委員会「有喜貝塚」銚子市文化財調査報告書 第5集 1984
- 33 下川連彌「島原半島（長崎県）の先史文化研究について」長崎県高等学校社会科教育研究集録 1970
- 34 古田正隆「島原市の海中干潟遺跡（因縁）」百人委員会埋蔵文化財報告 第2集 1974
- 35 長崎県教育委員会「堂崎遺跡」長崎県文化財調査報告書 第58集 1982
- 36 前川成洋「九州後期绳文土器の諸問題」九州縄文文化の研究所収 1979
- 37 長崎県教育委員会「深瀬遺跡調査報告」長崎県文化財調査報告書 第5集 1966
- 38 長崎県立美術博物館「田ノ浦遺跡」久賀島、野母崎の文化所収 1982
- 39 世知原町教育委員会・古代学協会「岩谷口遺跡群の発掘調査」 1976

二 殿崎遺跡出土の石器について

殿崎遺跡は、その出土土器から一次調査区が縄文後期（鐘ヶ崎式土器）を主体とし、二次調査区が縄文中期後葉～後期初頭であることが判明した。西北九州における縄文中期～後期の石器については、縄文時代全般を通じて一番変化に富んだ時期であり、その器種構成の多様さ、例片剝離技術の安定性は、この時期の石器の一つの特徴となっている。石器については、剝片鐵、石鋸、つまみ形石器、サイドブレイド、縦長剝片等であるが、各々時期的に同一時期に出現したものか、あるいは、各々いくらかの時間的前後関係を持って出現し、又消滅していったのか、など現在においても多くの問題を残している。一つには、層位の中における土器の変化量に対して、石器がそれらについて行かない、又、土器一型式という単純遺跡が少ないことなども、一つの要因となっている。殿崎遺跡では、一次調査区(TPI)と二次調査との間に時間的に相前後するかたちで土器が出土しているため、石器の上からも、いくらかの変化を持つであろうとの観点の上で、二つの調査区の主に剝片石器類を対比していくことにする。(Tab. 17) まずこの表より顕著なことは、石鋸と剝片鐵の変化量である。(亜剝片鐵とは、本文中でも扱ったが、主要剝離面を多く残しながらも、周縁あるいは表面に二次加工したものに対して仮に名づけたものである) 一次調査区での石鋸と剝片鐵との占める割合において、互いに逆転することで、特に二次調査区での通常の石鋸の占める割合は約77%を示し、圧倒的に通常の両面加工の石鋸が多いのに対し、一次調査区においては32%とかなり少量になっていることである。特に二次調査区出土の石鋸は、大形・中形・小形と三つのタイプがあたかも一セットであるかのような有り方を示しており、このことも両面加工の通常の石鋸が、二次調査区の主体になっていることを裏づけるものであろう。次に剝片鐵とその製作上関係が深いとされるつまみ形石器であるが、一次、二次共に剝片鐵の数に大差がないのと同様に、数量の変化に極端な差は認められない。石鋸・サイドブレイドについては、二次調査区に多い傾向にある。他の資料については、その比較できるだけの資料に乏しいと思われる。

福岡県柏田遺跡は、その時期的なものについては、一次調査区に近似しており、剝片鐵と打製鐵では正倒的に剝片鐵が多く出土しているなど、縄文後期初頭～中葉にかけて、剝片鐵がそのピークを持つことが予想される。

Tab. 17





二次調査風景



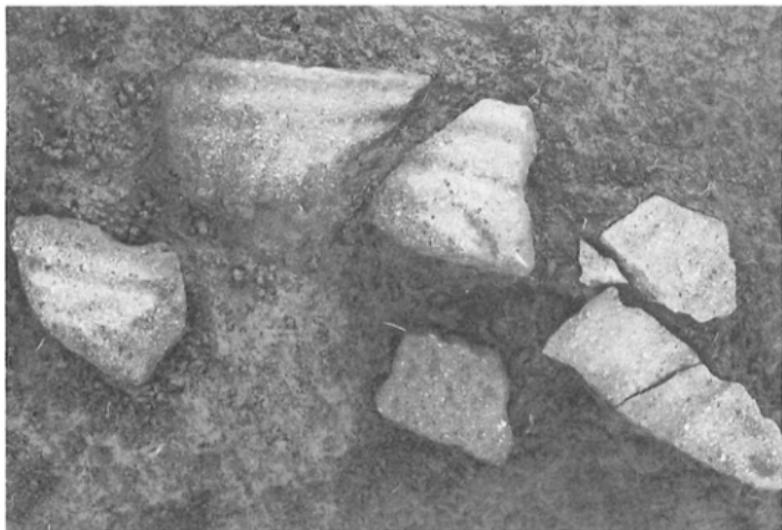
土層写真



土層寫真



二次调查遗物出土状况



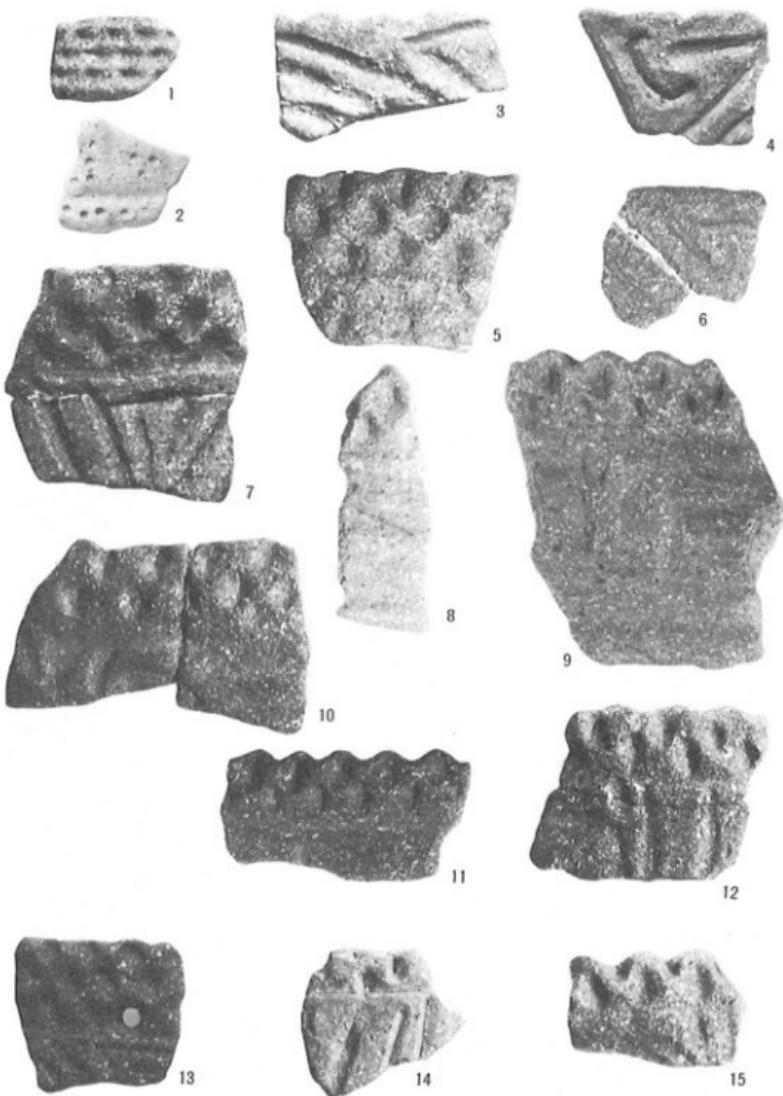
土器出土状况



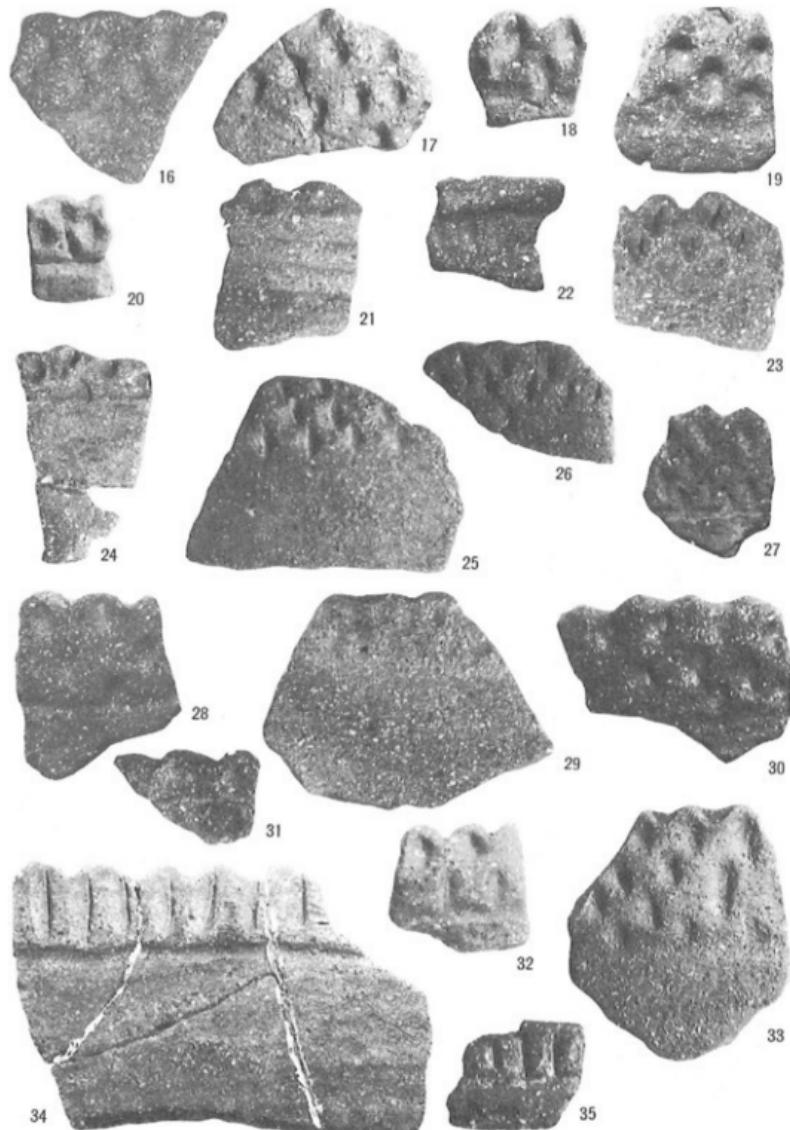
石器出土状况



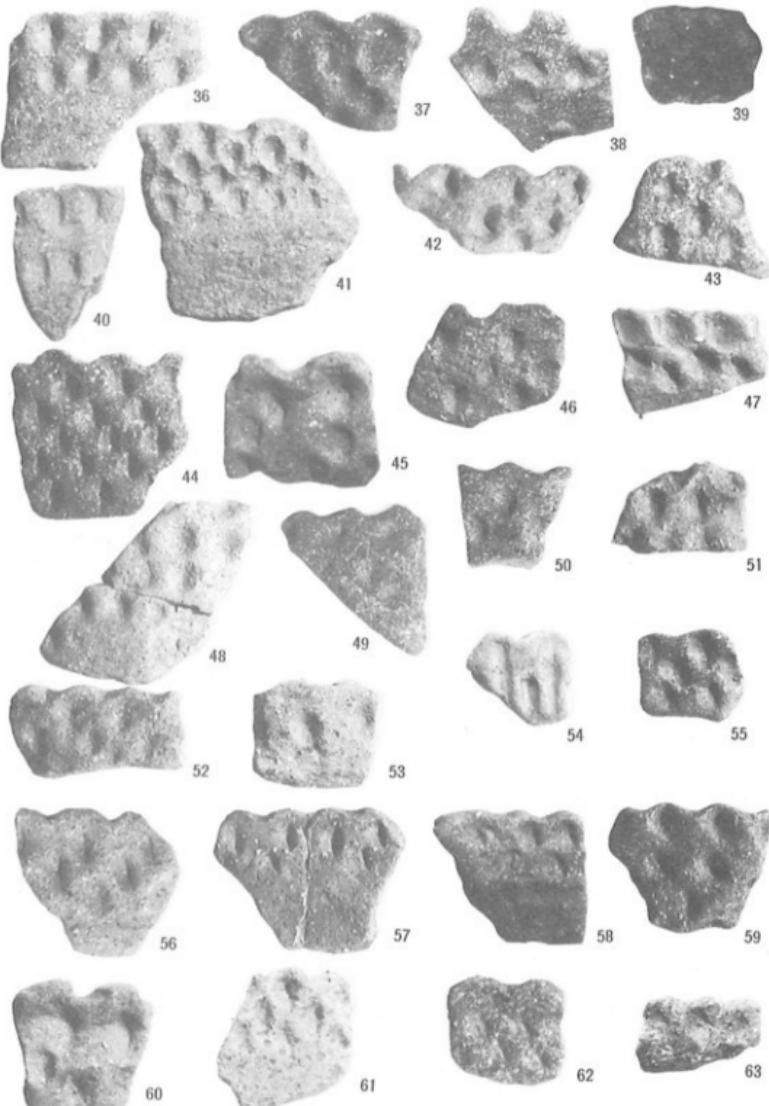
石斧出土状况



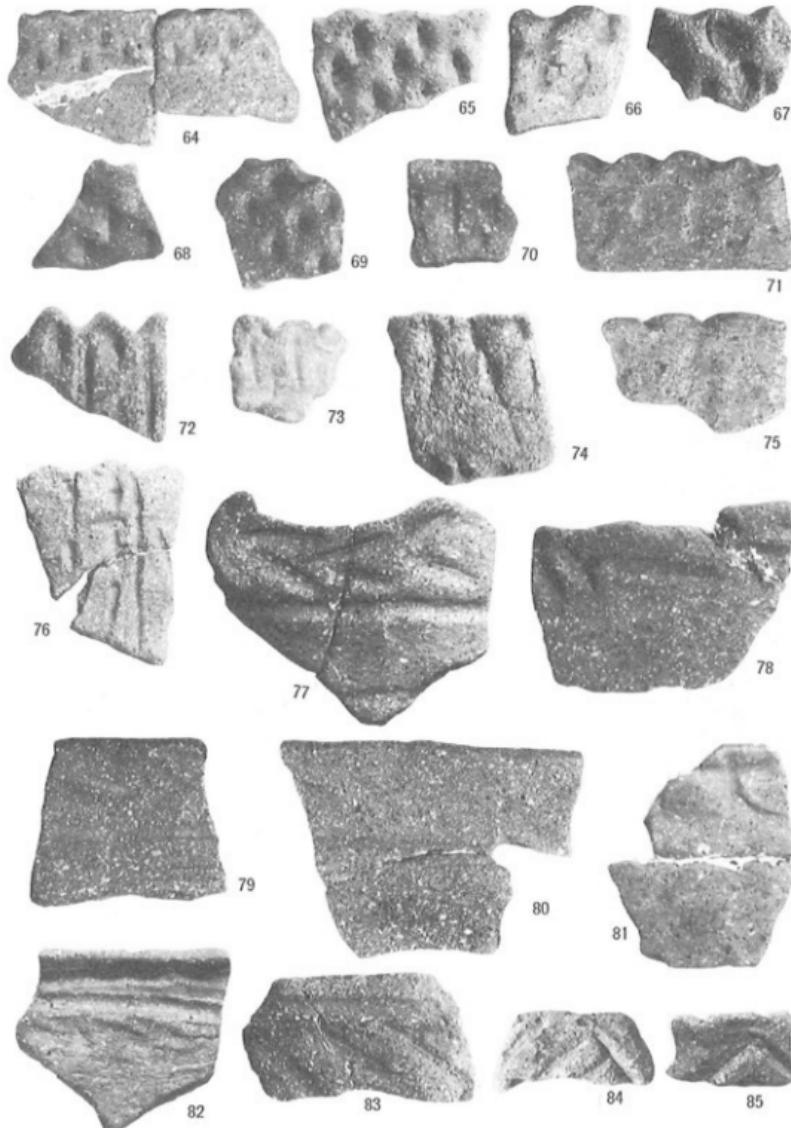
二次調査出土土器 ① (32)



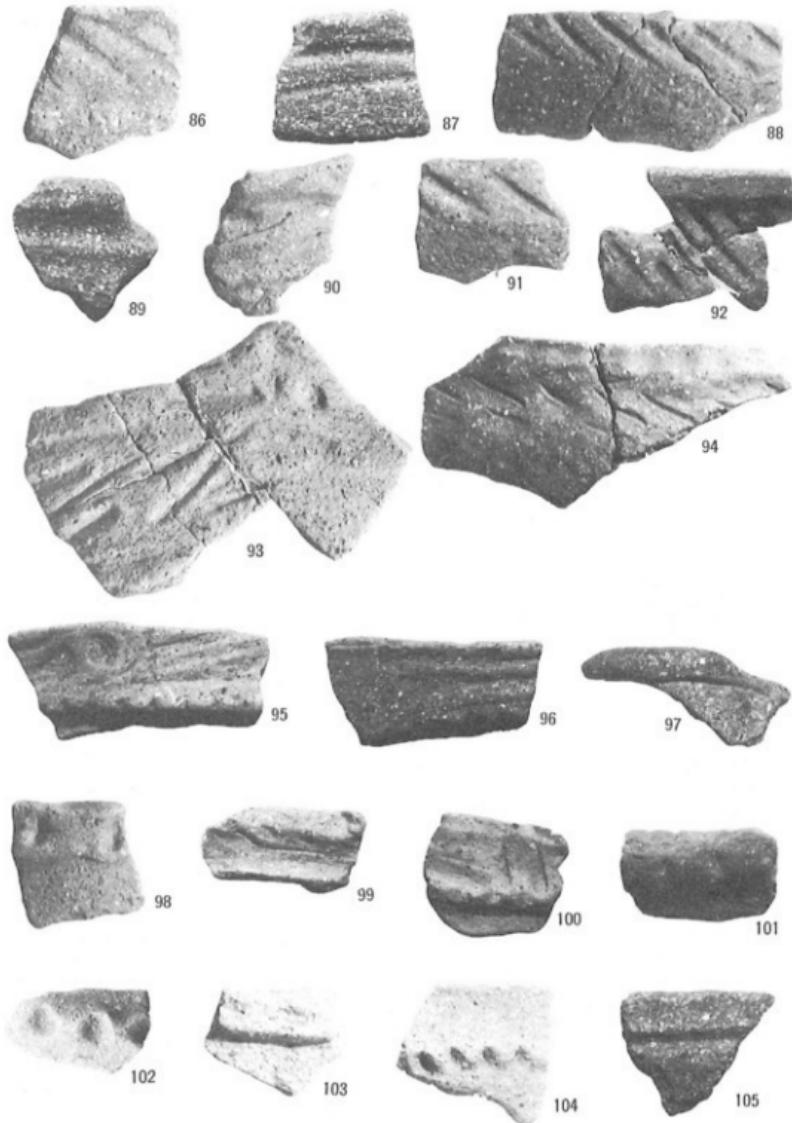
二次調査出土土器 ② (3/2)



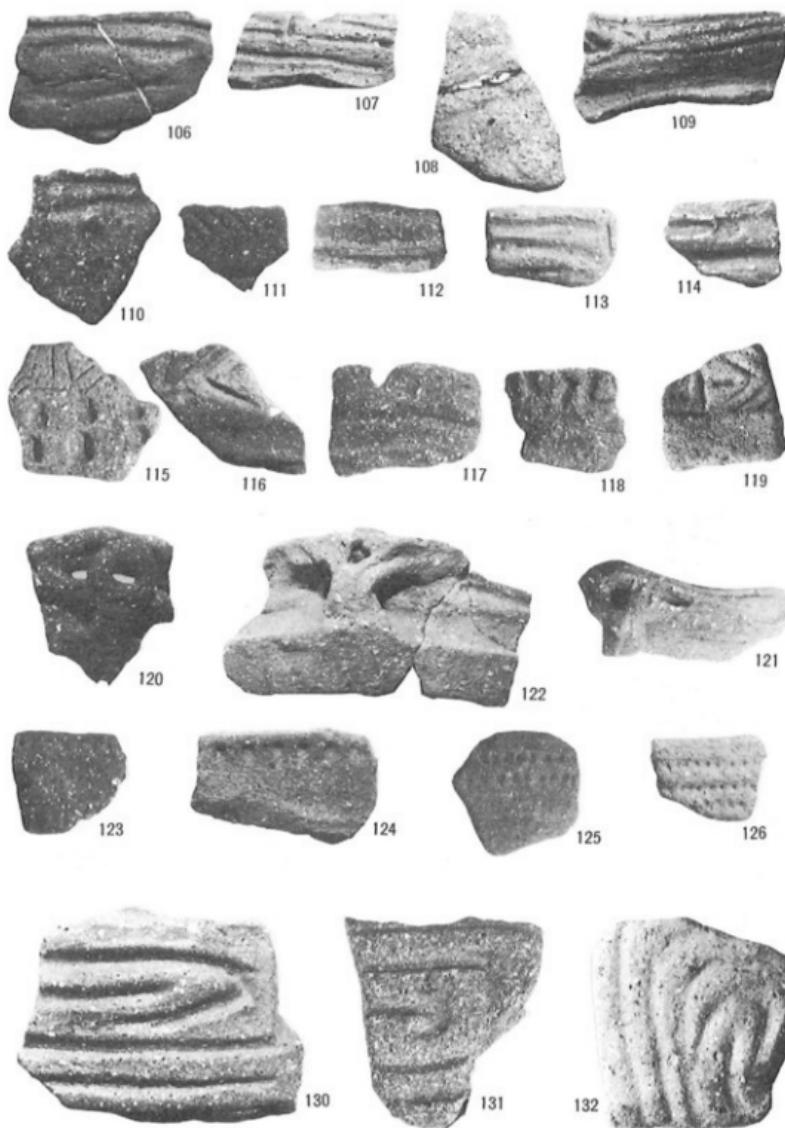
二次調查出土土器 ③ (34)



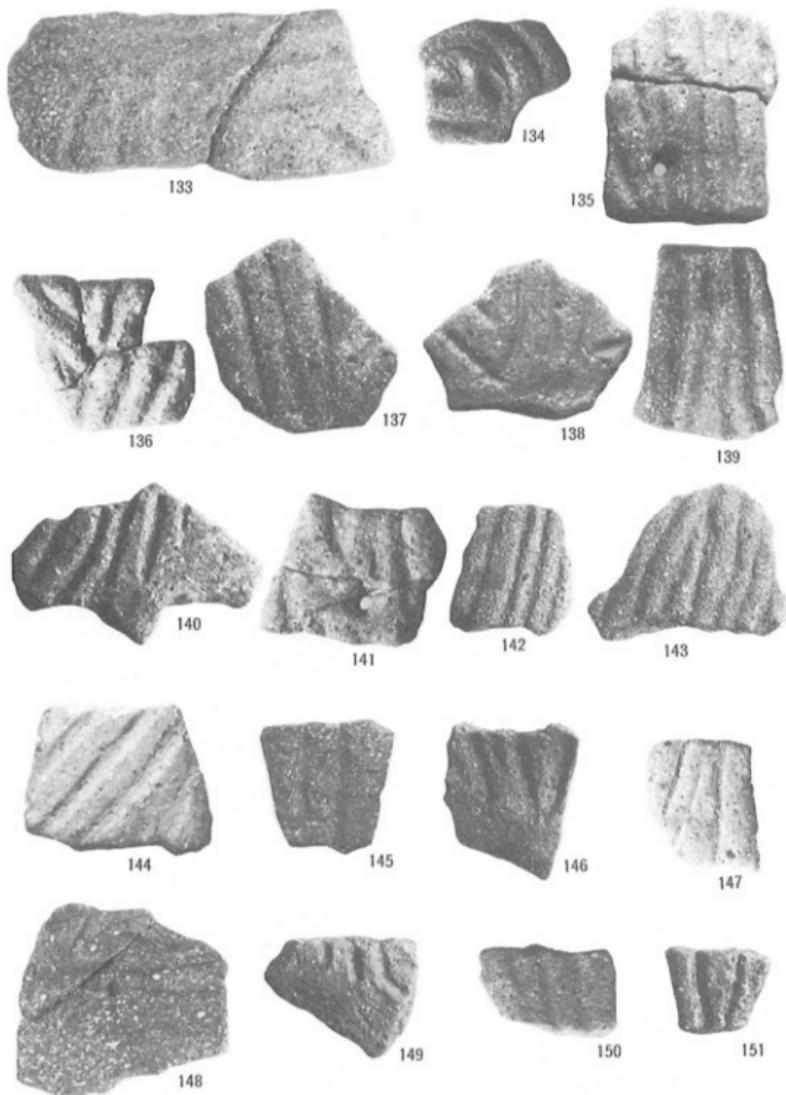
二次調查出土土器 ④ (1/2)



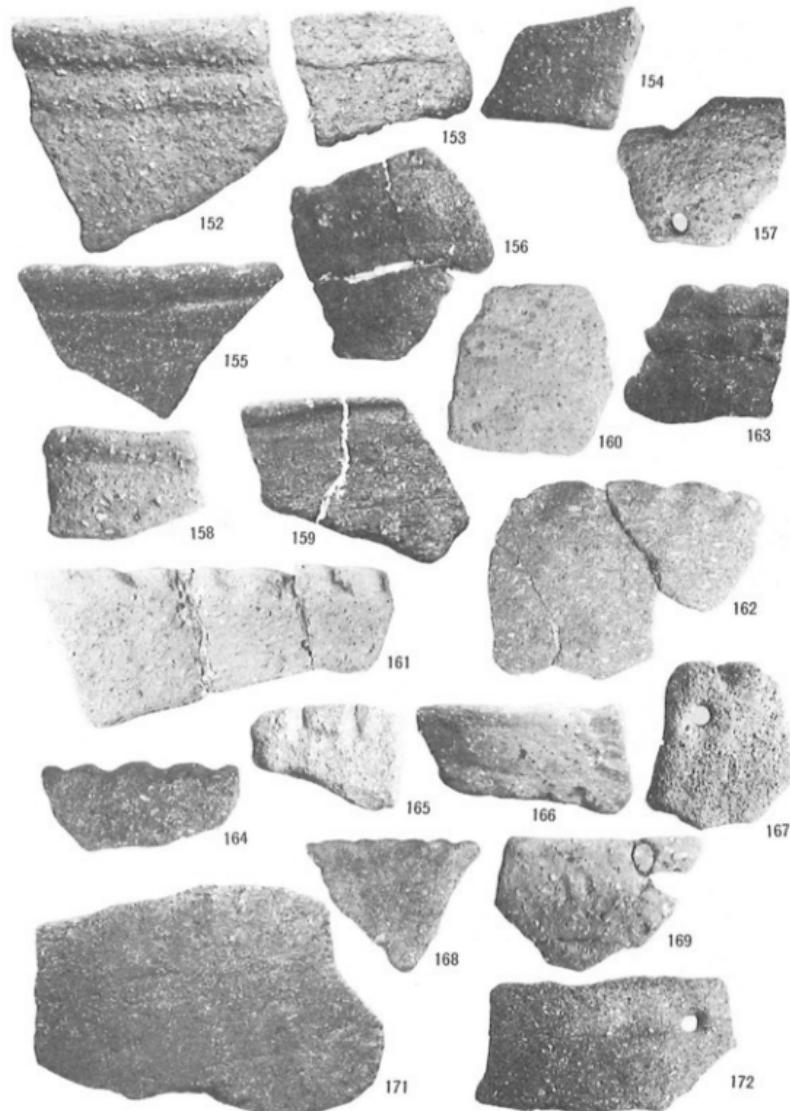
二次調查出土土器 ⑤ (3/2)



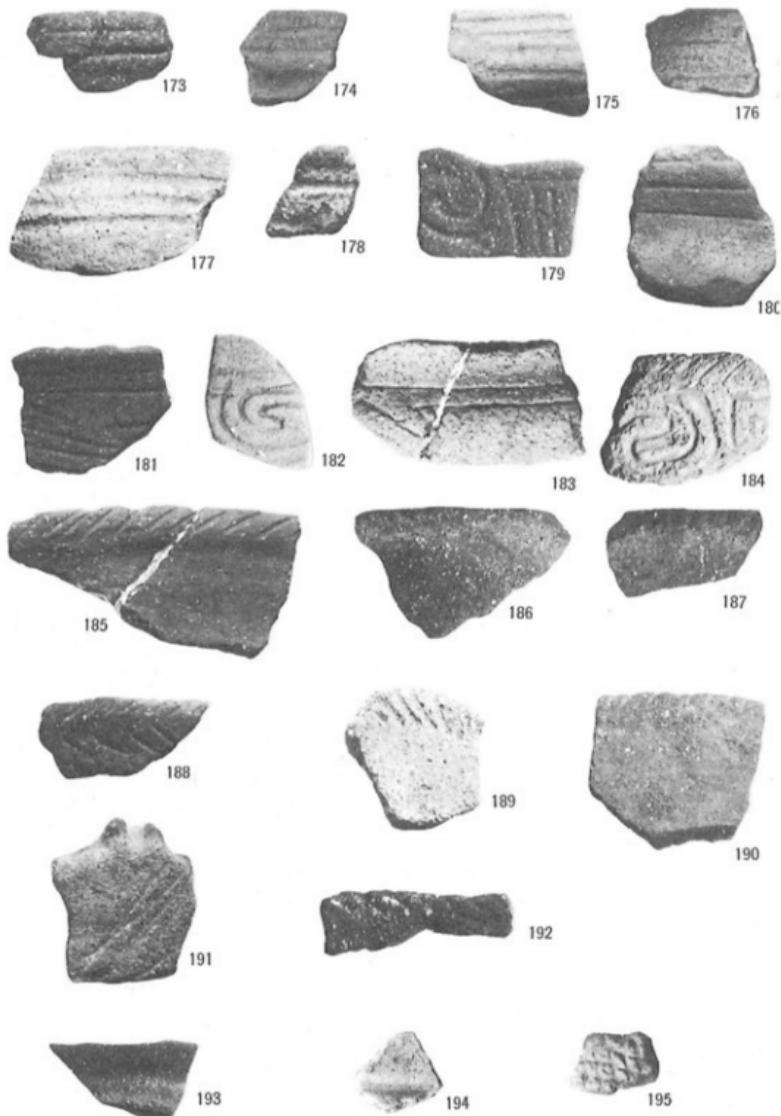
二次調查出土土器 ⑥ (3/2)



二次調查出土土器 ⑦ (3/2)



二次調查出土土器 ⑧ (1/2)



二次調査出土土器 ⑨ (3/2)



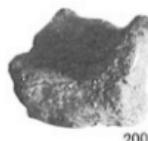
196



197



198



200



202



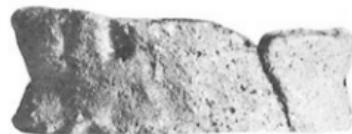
204



205



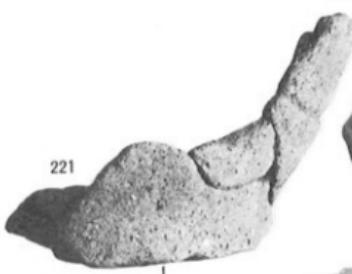
208



211



213



221



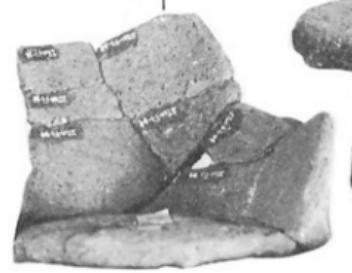
216



219



230



224

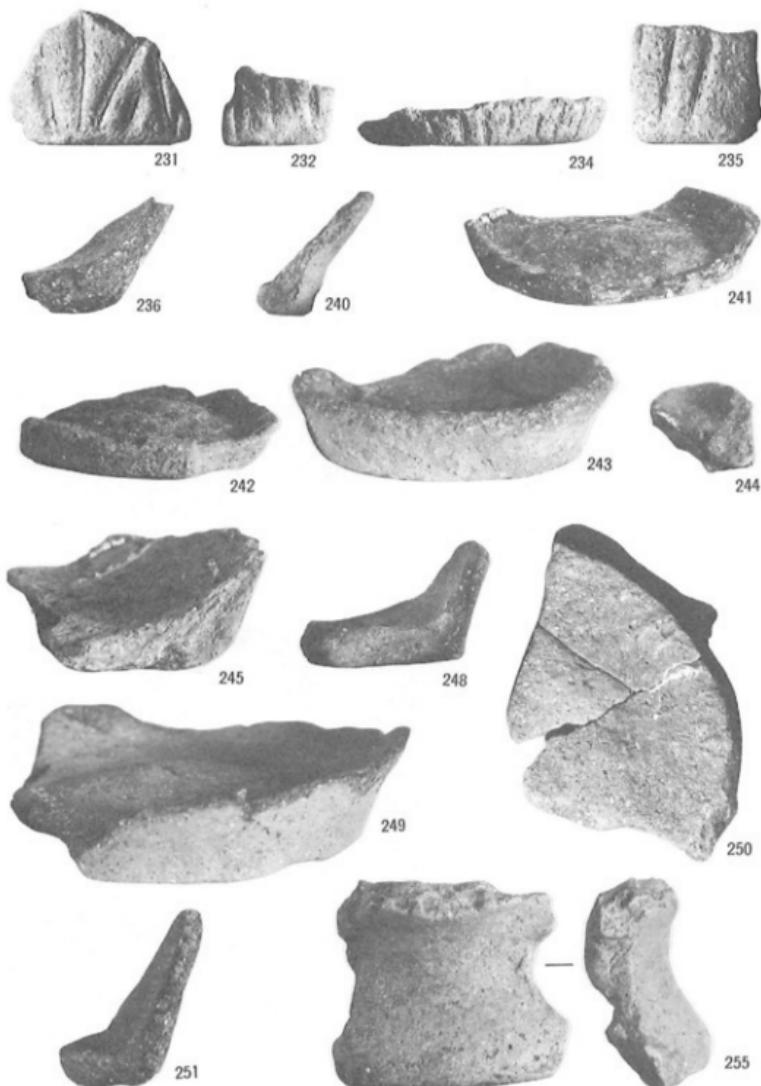


228

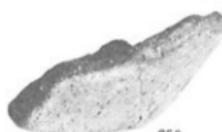


229

二次調査出土土器 ㊱ (1/2)



二次調查出土土器 ⑩ (32)



256



258



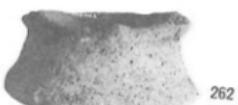
250



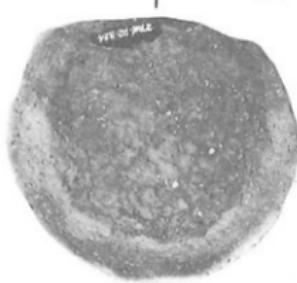
260



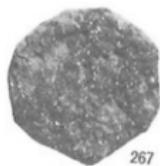
261



262



263



267



269

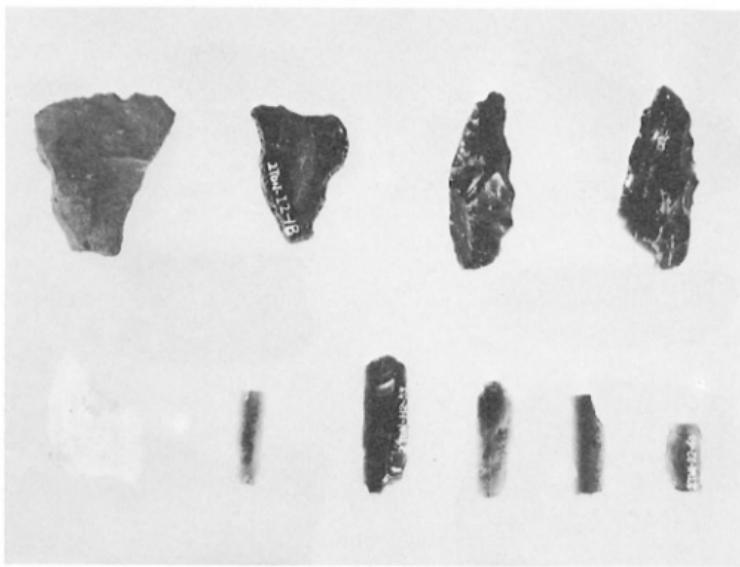


271

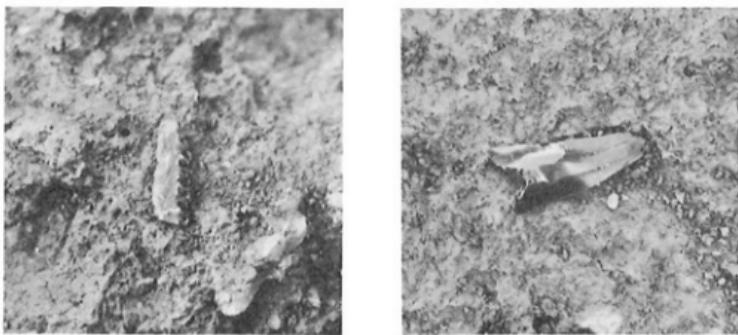


272

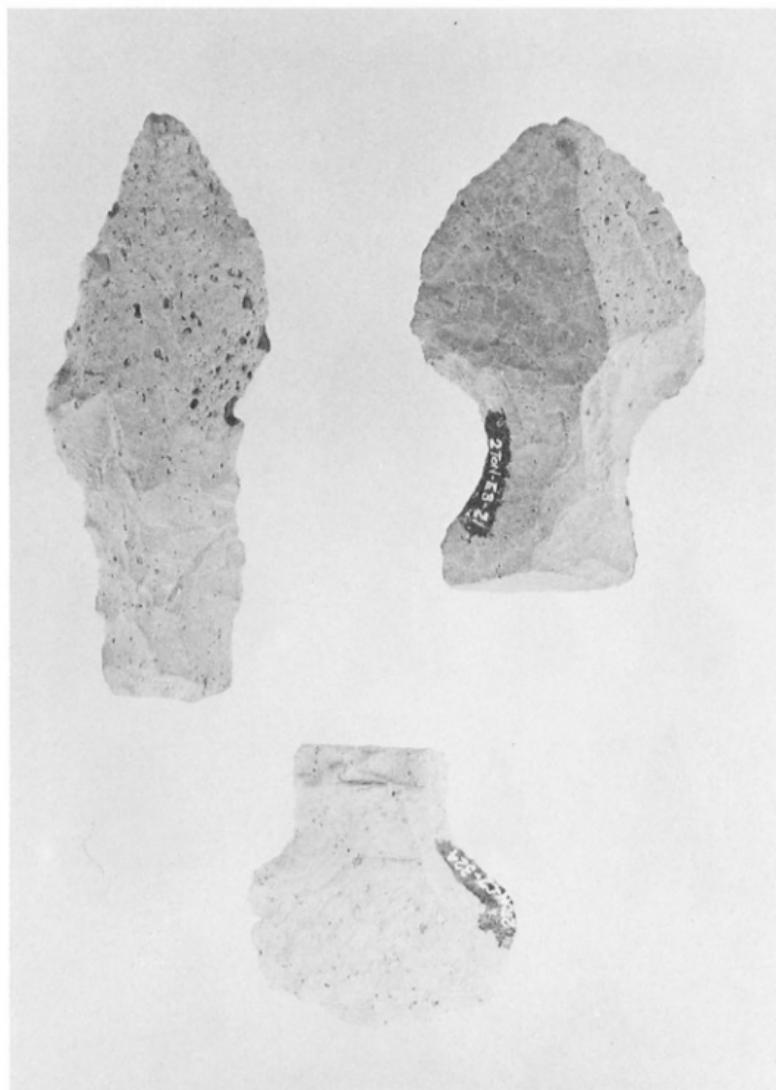
二次調查出土土器 ⑧ (3/4)



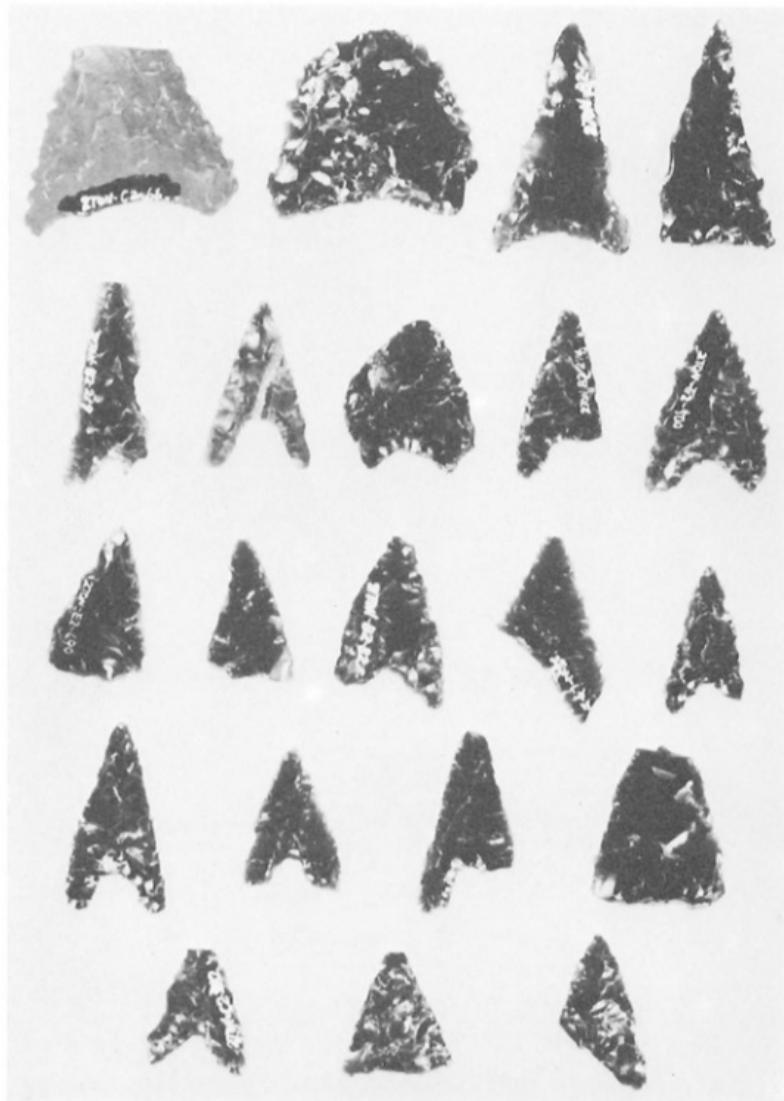
二次調査出土石器 (3)



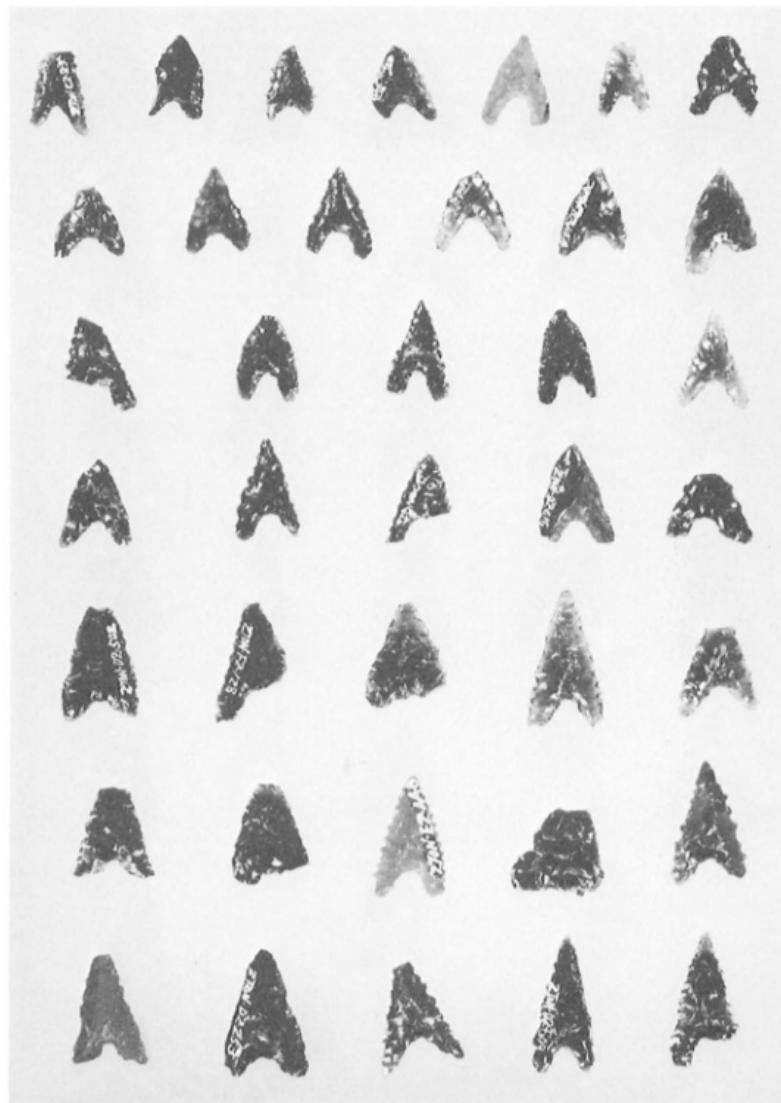
石器出土状況



二次調查出土石器 (34)



二次調查出土石器 (34)



二次調査出土石器 (34)



二次調査出土石器 (34)



二次調查出土石器 (3)



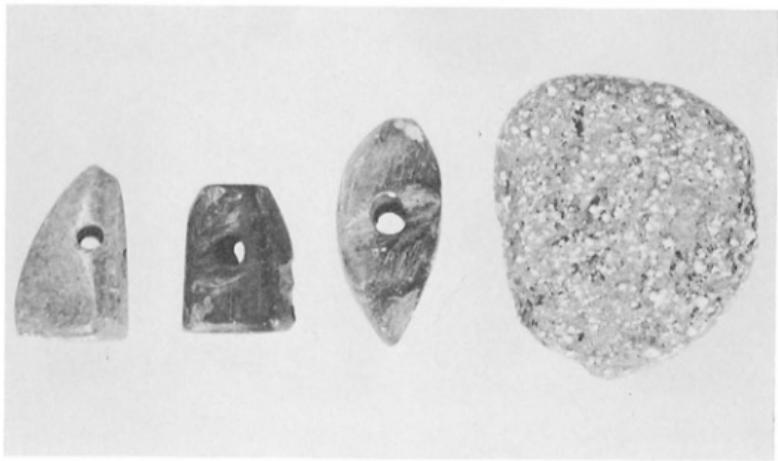
二次調査出土石器（34）



二次調查出土石器 (34)



二次調查出土石器 (3/4)



二次調查出土石製品 (3/4)



二次調查出土石器 (46)



二次調查出土石器 (34)



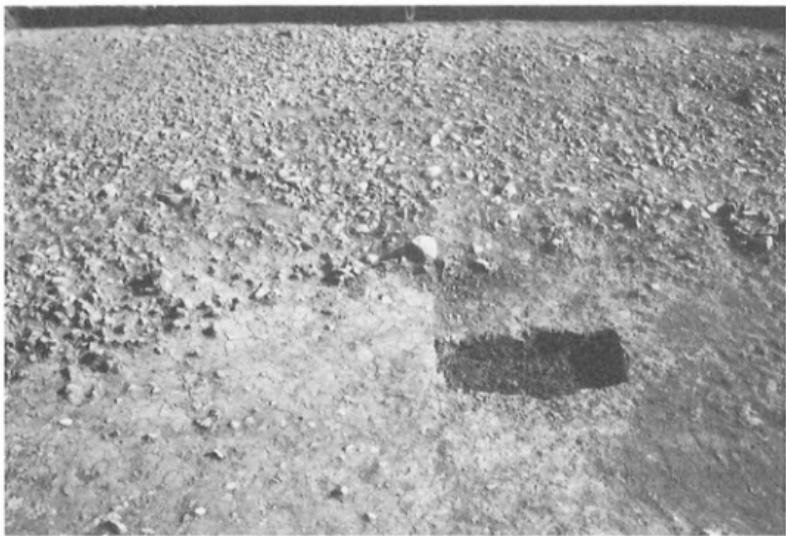
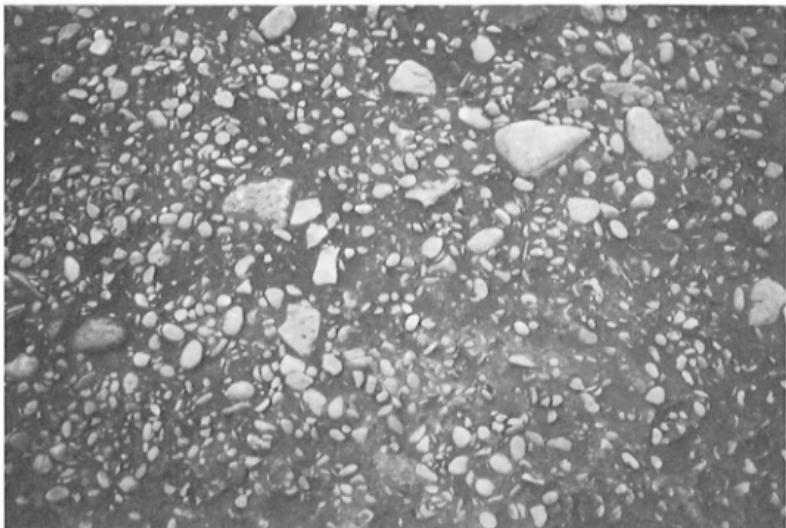
二次調查出土石器 (3/3)



二次調査出土石器 (34)



二次調査出土石器 (34)



円礫出土状況(上) 角礫出土状況(下)



調査完了全景（上・東側より 下・西側より）



調査に参加した人達（上・一次）（下・二次）



完成後の空港

長崎県文化財調査報告書第83集

殿崎遺跡

1986

発行 長崎県教育委員会
長崎市江戸町2-13

印刷 株式会社 隆文社
佐世保市瀬戸越3丁目4番7号